平成 22 年度

学社連携・融合事業実践事例集

平・小名浜・勿来・常磐・内郷・好間・四倉・三和・遠野 川前・小川・田人・久之浜地区の実践



いわきまなびあいバンク

目 次

| (1) 平地区 | |
|--|---|
| 平第一小学校 ·······1 | • 夏井小学校 ······13 |
| 平第二小学校 ·······2 | 草野小学校14 |
| 平第三小学校 ······3 | ・赤井小学校15 |
| 平第四小学校 ······4 | 平第一中学校16 |
| 平第五小学校 ······5 | 平第二中学校17 |
| 平第六小学校 ······6 | ・平第三中学校18 |
| ・郷ヶ丘小学校7 | 中央台北中学校 ······19 |
| 中央台北小学校 ······8 | • 中央台南中学校 ······20 |
| 中央台南小学校 ······9 | • 豊間中学校 ······21 |
| · 中央台東小学校 ······10 | ・藤間中学校 ······22 |
| ・豊間小学校11 | 草野中学校23 |
| • 高久小学校12 | • 赤井中学校 ·······24 |
| (2) 小名浜地区 | |
| 小名浜第一小学校 ············25 | • 泉小学校 ······33 |
| 小名浜第二小学校 ········26 | • 泉北小学校 ···································· |
| 小名浜第三小学校 ·······27 | 渡辺小学校 ···································· |
| 小名浜東小学校 ·······28 | • 小名浜第一中学校36 |
| 小名浜西小学校 ······29 | 小名浜第二中学校 ···································· |
| · 鹿島小学校 ·······30 | ・玉川中学校 ·············38 |
| 江名小学校 ·······31 | ・江名中学校 ···································· |
| 永崎小学校 ·······32 | • 泉中学校 ·······40 |
| | |
| (3) 常磐地区 | |
| ・湯本第一小学校41 | 藤原小学校 ·······46 |
| ・湯本第二小学校 ·······42 | ・湯本第一中学校47 |
| ・湯本第三小学校 ·······43 | ・湯本第二中学校48 |
| ・長倉小学校44 | · 湯本第三中学校 ······49 |
| 磐崎小学校 ················45 | • 磐崎中学校 ·······50 |
| (4) 勿来地区 | |
| 植田小学校 ·······51 | 川部小学校 ······59 |
| ・汐見が丘小学校52 | • 植田中学校60 |
| ・錦小学校 ·······53 | • 植田東中学校61 |
| 錦東小学校 ······54 | • 錦中学校 ·······62 |
| ・菊田小学校 ······55 | • 勿来第一中学校63 |
| ・勿来第一小学校56 | • 勿来第二中学校64 |
| 勿来第二学校 ·······57 | 川部中学校 ···································· |
| ・勿来第三学校 ·······58 | |

| (5) 内郷地区 | |
|--|---|
| ・白水小学校 ·······66 | ・宮小学校 ······71 |
| ・内町小学校 ······67 | ・高野小学校72 |
| · 綴小学校 ·······68 | • 内郷第一中学校 ·······73 |
| ・御厩小学校69 | 内郷第二中学校 ·······74 |
| ・高坂小学校 ······70 | 内郷第三中学校 ······75 |
| (6) 好間地区 | |
| ・好間第一小学校76 | 好間第四小学校79 |
| 好間第二小学校77 | 好間中学校 ······80 |
| · 好間第三小学校 ······78 | |
| (7) 四倉地区 | |
| ・四倉小学校81 | ・大野第二小学校・84 |
| ・大浦小学校 ······82 | ・四倉中学校85 |
| 大野第一小学校83 | • 大野中学校 ·······86 |
| (8) 三和地区 | |
| ・沢渡小学校 ······87 | • 三和中学校 ······92 |
| 三阪小学校 ······88 | • 三阪中学校 ······93 |
| ・差塩小学校 ······89 | 差塩中学校 ······94 |
| · 永戸小学校 ······90 | 永井中学校 ······95 |
| · 永井小学校 ······91 | |
| (9) 小川地区 | |
| ・小川小学校96 | 小川中学校 ······98 |
| ・小玉小学校97 | |
| (10) 川前地区 | . 川益中学校 |
| ・川前小学校99 ・桶売小学校100 | ・川前中学校102・桶売中学校103 |
| ・小白井小学校100 | ・小白井中学校103 |
| | 7、口开中子仪104 |
| (11) 久之浜地区 | |
| ・久之浜第一小学校 · · · · · · · · 105 | ・久之浜中学校107 |
| ・久之浜第二小学校106 | |
| (12) 遠野地区 | |
| ・上遠野小学校108 | ・上遠野中学校110 |
| • 入遠野小学校109 | · 入遠野中学校 ······111 |
| (13) 田人地区 | |
| ・田人第一小学校 · · · · · · · · · · · · · · · · 112 | • 田人中学校 · · · · · · · · · · · · · · · · · · · |
| ・田人第二小学校 · · · · · · · · · · · · · · · · · · · | • 石住中学校 ····················117 |
| ・石住小学校 · · · · · · · · · · · · · · · · · 114 | • 貝泊中学校118 |
| ・貝泊小学校115 | |

| タイトル | 「自然環境に目を向けたエネルギー教育の推進」 |
|------|------------------------|
|------|------------------------|

サブタイトル

~地域の人材や企業の活用によるエネルギーに関する授業の充実~

1 自校の事業への取り組みについて

本校では、発達段階に応じ、主に各教科や総合的な学習の時間の中で、学習内容と関連付けたり発展事項として取り扱ったりすることでエネルギー教育を推進してきた。

エネルギー教育全体計画に基づき4・5・6年の社会科や理科、総合的な学習の時間において、エネルギーに関係する施設の見学、ソーラーカーの製作や光電池実験、エネルギー教育に関するVTR視聴による調べ学習、エネルギーに関する出前講座の活用等の取組みを行ってきた。

2 実践授業について

(1) 指導計画にあたって

事業の実施にあたっては、地域の人材や企業の協力を得ながら、子どもたちの興味・関心を高め、調べ学習や体験の機会を十分に確保できるようにしてきた。協力者や協力企業との折衝や渉外は主にエネルギー担当教員が行ったがPTAが担当した事業があり、保護者の協力も得ながら取り組みを進めてきた。

(2) 授業の実際(平成19年度の実践より)

≪企業と連携を図りながら行った授業の実践≫

4年生では東北電力いわき支店の電気に関する出前講座、5年生では日産自動車いわき泉工場、日産プリンス福島販売いわきニュータウン店と連携を図った環境と自動車づくりについての出前講座の活用を行った。

4年生のエネルギーに関する出前講座は、手回し発電機による 電球点灯実験やソーラーパネルを使った発電体験、送電施設や設 備の説明など、電気エネルギーに関する体験活動を十分に行うこ とにより、発電の仕組みや電気の効率的な利用方法を知るなど、 身近なエネルギーに対する関心を高めることができた。運営面で は4学年PTAの支援を受け、保護者も体験活動に参加するなど、 親子でエネルギーについての理解を深めることができた。

5年生の環境と自動車づくりに関する出前講座は、自動車工場の見学の後、もっと深く追究したいという子どもたちの願いから、日産自動車いわき工場並びに日産プリンス福島販売いわきニュータウン店の協力を得て実現したものである。事前の打合せを十分に行ったことや講師の方の事前の準備、実車による二酸化炭素排出量比較実験などにより、子どもたちはそれぞれの課題を深く追究することができた。



<電気エネルギー出前講座> 協力:東北電力いわき支店



<環境と自動車づくり出前講座> 協力:日産自動車いわき工場 日産プリンス福島販売

(3) 授業をふりかえって

- 各分野の専門家の専門性を生かした授業は子どもたちの興味・関心を高め、新たな課題の発見や 主体的な追究活動につながった。
- 新たな地域の人材を発掘することができたことは、教育課程の改善につながった。
- 各事業所や団体、個人等が行っている社会貢献の取組みを、地域に広報することができた。

- 図書館の蔵書の充実とインターネットの活用の工夫により、子どもたちの追究活動はより一層深まっていくと考えられる。
- 聞いたことや体験したことを効果的に生かすために、年間指導計画への位置付けを明確にするなどの工夫が必要である。
- 社会貢献の取組みを行っている事業所や団体、個人等は他にもあると考えられる。今後も連携を図ることができる地域の人材を積極的に発掘していくことが必要である。

教科名 (総合的な学習の時間等) 実施学年 (全学年)

| タイトル 「うひ | かまつり | 第2部体験教室」 |
|----------|-------------|----------|
|----------|-------------|----------|

サブタイトル

1 自校の事業への取り組みについて

午前中に行う学習発表会と午後に行う学年の体験活動を合わせて、「うめかまつり」と総称している。体験活動では、地域の教育機関や団体から指導者を外部講師として招聘し、各学年の実態に応じた内容を継続して行っている。学習発表会後の活動という利点を生かし、たくさんの保護者による運営のサポートや、活動への参加・参観が得られている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

日程があらかじめ決まっている行事なので、外部講師の方々への連絡調整を計画的に実施している。講師の方々も、毎年の行事として理解しているので、スムーズな調整が行えている。また学年ごとに活動内容を固定させることで、児童が6年間ですべての体験ができるようにするとともに、計画の段階での煩雑さを軽減させている。

(2) 授業の実際

第1学年「リズムダンス教室」

キッズ・ジュニアエアロビック指導員による指導で、児童 と保護者が共に汗を流して、楽しい活動となった。

第2学年「絵手紙教室」

地域の絵手紙の会の会員15名による細やかな指導で、画 材をもとに思い思いの作品を完成させることができた。

第3学年「昔遊び教室」

地域の敬老会から10名以上のお年寄りの方々が参加した 一緒にお手玉を作って遊ぶなどして楽しい時間を過ごした。 第4学年「木工作教室」

福島県もりの案内人の会の講師による指導で、木材を活用 した工作を行った。出来上がった作品に満足げであった。 第5学年「茶道・生け花教室」

地域にお住まいの池坊と裏千家の指導者の方々に、それぞれの基礎的な知識をご教授いただきながら体験活動をした。 第6学年「勾玉づくり教室」

いわき市考古資料館のご協力により、勾玉づくりに挑戦した。親子で協力して活動する姿も見られた。



みんな一緒にリズムダンス!!

(3)授業をふりかえって

それぞれの学年で発達段階に応じた特色ある活動が行えたことで、思い出に残る有意義な体験活動となった。また、指導者の方々の感想からもこの「体験活動」にかかわることが楽しみであることが伝わってきた。このように学校と地域の教育機関や社会教育団体とが連携し、さらに保護者を巻き込みながら、互いに協力しながら活動できたことがよかった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後とも、これまで築き上げた地域の教育機関や社会教育団体との連携をさらに密にしながら、継続して実践していくことが重要であると考える。

教科名(総合的な学習の時間) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 環境リサーチ2009 |
|--------|--------------|
| サブタイトル | ~身近な環境を調べよう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校では、総合的な学習の時間において学校や地域の特色、課題、本校の教育目標、現代社会の抱える課題をふまえ、単元開発の視点を「人」「自然」「文化」「社会」とし、『見つめる目(やわらかな感性)・かかわる力(コミュニケーション能力)・広げる翼(実践力)』の育成を目指している。

そこで、本単元において、身につけさせたい資質や能力として次のように設定した。

- ○見つめる目・・・自然環境に目を向け、自分を取り巻くものに疑問や興味・関心をもつ感性や感覚
- ○かかわる力・・・環境保全に配慮し、多様な視点から積極的に自然環境にかかわる力
- ○広げる翼・・・自然との共生・共存を考え、進んで地球にやさしい地域をつくる実践力

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

先に述べた資質や能力を育むためには、より専門的な助言や支援が必要であると考えた。そこで、本校では、県・市の環境アドバイザーを年4回の環境調査の講師として派遣申請することにした。そうすることで、子ども一人一人に身近な環境に目を向けさせ、具体的な助言や支援のもとに課題を追求する中で、育てたい資質や能力が効果的に高まっていくと考えた。

(2)授業の実際

5月中旬~下旬に2回実施した。身近な環境である「新川」に実際行き、環境アドバイザーの方々から具体的な説明をいただいた。そのことにより、子どもたちは、周辺の様子や気付いたこと等を整理して、各自の課題を設定することができた。主な課題は次のようになっていた。

- ・ 新川の変遷(ジオラマ作り) ・水質調査
- ・ 生物調査 ・新川のごみ問題 等
- 9月中旬~下旬に再び2回実施した。課題別に分かれ、環境アドバイザーからより専門的に助言をもらうことで、子ども一人一人の調べ学習が充実していった。



植物の説明を聞く子どもたち

(3)授業を振り返って

専門的な助言や支援のおかげで、子どもたちの調べ学習に対する意欲が高まったり、内容が深まったりした。また、子どもたちの感想からは、自然環境に対する視野を広げ、進んで身近な環境にかかわろうとする姿が見られた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

環境アドバイザーからご指導いただき、課題設定、課題追求ができたことは、子どもたちにとって 大変有効であった。さらに、学んだことを伝える場面(発表会)において、適切な指導・助言をいた だければ、自分や友だちの活動を振り返り見直して、次の活動に生かしていけるのではないかと考え た。 教科名(生活科 総合) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「子どもの豊かな心を育む」 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~平養護学校との交流学習を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

学区内に平養護学校があり、本校はこれまで交流を深めてきた。

児童の手による計画、実践の場を設定し交流の学習を進めていくことは、児童の思いやりの心を 育む上で大変重要な教育活動であると考える。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

4月(新学期)に平四小と平養護学校の全職員が一同に顔合わせの機会を設け、年間の計画立案をする。七夕祭り(7月)、稲刈り(10月)、平窪祭り(11月)の計画の詳細についてお互いの職員が共通理解を図り、年間の活動に取り組んでいく。3月(学年末)には、交流担当職員により、年間活動の反省をし、次年度の活動に生かせるようにしている。

(2) 授業の実際

交流田植えを5月14日に実施する。

以後、草取り、稲刈りそして収穫した米を利用しての 平窪祭り(11月)を実施した。

収穫した米は、平窪祭りにおいて餅つき用米となる。

本年度は、インフルエンザの影響により、平窪祭りの交流 活動は中止され、餅つきのみを5年生と実施した。



交流田植え

(3)授業をふりかえって

※子どもたち 思いやりの気持ちが芽生えた。また、実施したいという声が多かった。

学校 年間の計画に位置づけて、継続して活動ができるよう工夫している。

地域 田の管理は、地域の経験者の協力を得て、地域、養護学校、平四小の結びつきを一層深 めることができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

年度の始めの平養護学校、平四小の職員の打合せを密にして、よりよい活動となるように スタートをきることが重要である。

また、年度末の各校から出された反省を次年度に生かすことが大切である。

教科名(総合的な学習) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「米作り体験活動」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~「米つくり」の体験活動の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

○1年間の米作りの農業体験活動を通して、勤労の尊さや食農、食育について考え、自分の生活を見直そうとする豊かな心を育成する。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

○田の借用

○案山子の設置

○田植え用苗の調達

○稲刈り作業の確認

○田植えの作業内容の確認

○収穫した米での収穫祭

(2)授業の実際

- ○稲刈り作業の手順を聞いて、どの子も協力して作業を体験 することができた。
- ○初めての体験という児童が多かったため、興味を持って体験することができた。
- ○保護者も一緒に体験活動をすることができた。



(3) 授業をふりかえって

- ○1年間の農業体験活動を通して、勤労の尊さを知ることができた。
- ○支援をいただいた、地域の方々への感謝の心が育ってきた。
- ○地域の方々との交流は、地域でのあいさつにつながった。
- ○食に対する考えが深まった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

○教師側でどうしてもお膳立てした教育になりがちなので、なるべく子どもたちが主体的に関われる ような活動にしていきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第4学年)

| タイトル | 「盲導犬講習会」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~視覚障害者と盲導犬体験教室~ |

- 1 自校の事業への取り組みについて
- ・ 高橋由紀雄さんご夫婦の視覚障害や盲導犬についての講話や盲導犬「エヴァー君・キャルちゃん」と一緒に行う視覚障害者の疑似体験を通して、視覚障害に対する児童理解の一助とする。
- 2 実践授業について
- (1)授業計画にあたって
 - ・ 事前に電話等で、日程・授業内容・役割分担等について了解を得て、講師宅に 「講師派遣申請」を送付した。
- ・ 授業前に、講師高橋さんと担任とで事前打合せを行った。
- (2)授業の実際
- (1) 高橋さんの話 視覚障害者とは・視覚障害者の歩く方法・盲導犬とは・盲導犬との生活
- (2) 擬似体験

目かくしをして、ガイド歩行をしよう・つえ歩行をしよう・平行バランス、 視覚なしを体験しよう

- (3) 盲導犬と触れ合おう 一緒に歩いてみよう
- (4) 高橋さんにお礼を述べる
- (3)授業をふりかえって

盲導犬を引退したキャルの珍しい犬用車椅子を利用しているのを見せてもらって、児童は勉強になった。目隠しや白杖、盲導犬に引いてもらう体験をし、児童や保護者が感動し、よい体験となった。

児童は熱心にメモをとったり、積極的に質問をしたり、今後の総合での福祉学習の意欲づけになった。

- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ・ 授業のねらいやどの段階でどのような形でサブティーチャーを導入するかなどを明確にす る。
- ・ 事前に講師の方と十分に話し合い、役割分担を決定する。
- ・ 授業の事前指導と事後指導をしつかりと行う。
- ・ 記録や反省を十分に行い、来年度の実施に生かすようにする。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第6学年)

| タイトル | 「開かれた学校の推進」 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~「長寿会との交流会」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

総合的な学習「地域との交流」の学習の一つとして、地域の方々との交流を通し、共に生きていくことの大切さを知ることができるようにする。

またこれらの活動を継続的に主なうことで、お世話になった人たちへ感謝の気持ちを伝えることができるようにすることを目的としている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- ① 児童を4つのグループに分け、グループごとに時間や内容を調整する。
- ② 実施計画を作成し、各担当者(長寿会)に知らせ、調整する。
- ③ 運営の仕方・内容ついて長寿会の代表者と打ち合わせをする。
- ④ 長寿会の方に人数を揃えてもらい、準備物等の打ち合わせをする。

(2)授業の実際

寿会のお年寄りと交流することで、自分たちの身近にいる人たちのことを知り、交流することの楽しさを知った。 はじめに未経験のゲームを長寿会の方から教えてもらい、 2回目は勝負するような計画で行った。はじめはおとなし かった子どもたちもみんな集中してグランドゴルフやク ロリティーを楽しむことができた。



グランドゴルフを教えてもらう

(3) 授業をふりかえって

この授業を通して、子どもたちは地域に住むお年寄りたちとの交流の楽しさに触れることができた。

また、長寿会の方々も、子どもたちとの交流を楽しみにしており、どの方もみんな意欲的に取り 組んでいただいた。これらの交流を通して子どもたちと地域の方の心の交流が深まっていけば、 地域の教育力も高まり、子どもたちを地域みんなで育てる環境が整ってくると思われる。

3 自校の取り組みの充実に向けて

その後さらに、絵手紙教室や折り紙教室等も開催し、地域の方・長寿会との交流を深めた。これにより、子どもたちの中に地域の方に感謝する気持ちが芽生え、感謝の会を開くことになる。 そこでは、自分たちの思いをしっかりと述べ、感謝の気持ちを表すことができた。お年寄りの中には泣いてしまう方もおり、そのことで子どもたちは、地域の方との交流の大切さと感謝することのすばらしさを感じることができた。 教科名(社会科) 実施学年(第3学年)

| タイトル | くらしをまもる |
|--------|-----------|
| サブタイトル | ~火事がおきたら~ |

1 自校の事業への取り組みについて

○社会科の授業の中、教科書や資料を中心に学習してきたことが、自分たちの町の中にある消防署(中央台分遣所)の中ではどのように行われているのかを確かめる。さらに消防署(中央台分遣所)という施設の仕組みを知り、消防士の平素の地道な努力があって、自分たちのくらしは守られていると言うことに気づき、より学習を深めようとする意欲につながるようにする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

○ 学年を3グループに分け、①消防署(中央台分遣所)内の施設について ②消防車の仕組みについて ③救急車内の見学と仕組みについて の全体を順番に回るように流れを組んだ。最後に全体で質問タイムを設けてもらい、さらに理解が深まるように配慮した。

(2)授業の実際

- 消防車や救急車を見ることで、どちらの車にも狭いなが ら様々な工夫がなされていることを知り、感心していた。
- 消防服を実際に試着させてもらうことで、消防服の工夫 に感嘆しながらも、その重さに驚き、消防士の仕事の大変 さなどを感じることができた。
- 施設内の見学では、24時間いつでも出動できるように なっている話や中央台では1年間にどの程度消防車や救 急車が出動しているのかの話を聞いた。
- 後日、消防署(中央台分遣所)より、非常食の乾パンをいただき、試食をした。なぜ、そのような物が消防署に置いてあるのかを中心に、火事だけではなく、災害においての消防の仕事、自分達はどのように行動するべきかの話し合いに発展することができた。



消防車について話を聞く子ども達

(3) 授業をふりかえって

- 教室の中で学習したことを実際の施設の中で確かめ、消防士、救急救命士の話を聞くことで 学習内容の理解を深めることができた。
- 教科書や資料に載っていた物を実際に見る事ができ、理解につながった。
- 自分たちが住んでいる地域の施設を知ることで、自分達の町により興味を持つようになった。

- 学区内にはないが、近くに「消防団」もあるので、そちらも見学をすると、組織の連携や違いについて、さらに深まった学習ができると思われる。
- 整備させた町であるので、「消防」関係の施設などを探す学習も想定される。

教科名(総合的な学習の時間) 実施学年(第5学年)

タイトル 人・自然へ感謝の気持ちを持つ体験活動

サブタイトル

一〜総合的な学習の時間「米について考えよう」の授業実践から~

1 自校の事業への取り組みについて

本校は、閑静な住宅街の中にあるため、自然は残っているが、自然とふれあうとなると難しいところがある。だが学区内には、自然に囲まれ昔ながらの生活の様子がうかがえる「いわき市暮らしの伝承郷」があり、5年生では社会の学習や食育と関連させて、米作りの体験活動をさせていただいている。苗を植えてから収穫・餅つきまでの貴重な体験を楽しみ、自然とふれあうことはもちろん、昔ながらの米作りのやり方を教えていただくことにより、地域の人々と交流を図り、米作りの苦労や作っている人の思い、普段何気なく食べている米のありがたさを感じ取ることをねらいとしている。

2 授業実践について

(1)授業計画にあたって

4月初めに、学校側の担当者と伝承郷の担当者で、だいたいの活動日程を決定した。米作りは気候なども関係してくるので、事前にお互いよく連絡を取り合うようにした。

米作りは、大きく「田植え」「稲刈り」「収穫祭」の3つの体験活動に分かれている。さらにその間に疑問に思ったことを課題にして調べ学習を進めたり、体験して分かったことを新聞にまとめたりした。どの活動ともボランティアの方が携わってくださり、また「収穫祭」の時には保護者にも手伝いをお願いして、共に収穫の喜びを分かち合った。

(2)授業の実際【稲刈り】

5月に3本ずつ植えた緑色の苗が、田んぼにぎっしりと見事に黄金色に染まっているのを見て、まず驚き、そして感動していた。作業は二人一組。一人が鎌で10株刈ったら相手に渡し、もう一人がわらで束ねて、ハセ木に干すという作業を交互に行った。慣れない鎌の使い方にとまどったり、腰をかがめて夢中で刈っていたため、起きあがったときに「腰が痛い」と悲鳴をあげてみたりと苦労している様子が見られた。やり方が分からないときには、ボランティアの方や伝承郷の方に丁寧に教えていただきながら、最後の落ち穂拾いまでしっかりとやりきった。



ずっしり重いな、大事なお米!!

(3)授業をふりかえって

子どもたちにとって、自分で植えた苗の生長を見て、それを自分たちの手で刈り取ったことは、とても貴重な体験となり、感動も大きかった。学校に戻ってきてからお礼の手紙を書いたが、その中でも「稲刈りの大変さがよく分かった」「ボランティアの人たちは東ねるのが上手だったし、やさしく教えてくれた」「落ち穂拾いをしながら、ご飯を残さず食べないと。と思った」などという感想が見られた。自分たちが見ていない間も、天候や害虫を心配しながら育ててくださった伝承郷の方々に感謝の気持ちを持つこともでき、とても有意義なものとなった。稲刈りの様子は学年便りでもお知らせし、家庭にも関心を持ってもらうようにした。

3 自校の取り組みの充実に向けて

他教科とも関連づけて、ぜひ続けていきたい活動である。約7ヶ月間という長い期間の中で、3回の体験活動は少ない気がし、また雑草取りや害虫駆除などの本当の意味での大変さを理解できているかは疑問だが、夏休み中なども個別に生長を見に行くように声をかけるなどしていきたい。また毎年余った苗をいただいているので、子どもたちに分けたりクラスで育てたりと、米作りの楽しさ・大変さをさらに広めたいと考えている。

教科名(体育) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「子どものたくましいからだと心をつくる」 |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | ~福島高専陸上競技部との陸上教室を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

- 本校児童の実態として、学力が高く、全てのことに素直に一生懸命取り組むが、ややたくましたにかけるため、体力向上の一環として実施した。
- 福島高専陸上競技部監督が地域内に在住(二人のお子さんも本校卒業生)し、また本校職員 とのつながりもあり、来年度の小学生陸上競技大会に向けて、5年生の興味関心を高める とともに、基礎基本の指導をお願いした。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- 福島高専では、陸上競技普及のために小学生等への指導も熱心である。学生が夏季休業中で ある9月中旬に実施することになる。
- 7月に、教頭が福島高専の監督の部屋を訪問し、実施計画を立案する。その後、監督の指導 のもと、学生が指導内容を理解・練習したとのこと。

(2)授業の実際

- 写真のように、児童は学生のすばらしい走りや跳躍に驚き、大喜びであった。
- ○「自分も高専の人のようになりたい」という気持ちが全面 に現れ、基礎基本の練習にも真剣に取り組んでいた。
- 約15名の学生も積極的に声かけをしたので、自分の改善点を知り練習するなど、学習に深まりが見られた。
- 競走では、「負けないぞ!」という気持ちで必死に走る 姿が見られるとともに、交流を図ることができた。
- 福島高専の学生も、小学生の指導を通して、教え方、伝 え方、楽しさを学ぶことができた。



高専のお兄さんやお姉さんと競走だ!

(3) 授業をふりかえって

- 今年度からの初めての試みであったが、子どもたちにとっても、教員のとっても、そして福 島高専の学生にとっても、得るものが大きい授業であった。
- 小学生ではできないような走りや跳躍を間近でみたり、本気になって競走したりと、陸上競技の楽しさを知り、来年度の大会へ向けての練習への意欲が十分に高まった。

- 来年度も実施することにより、今年度のような効果を期待している。また、「たくましいからだと心づくり」を目指し、子どもが自ら継続していくようにしていきたい。
- 福島高専の監督も今回の授業を高く評価している。これからも、計画的に、継続的に実施できるように、連絡を密にしていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「豊間のよさ」を見つけよう | |
|--------|------------------------------------|--|
| サブタイトル | ~「うすいそ」の昔について調べよう~ (鈴木 弘一さんのお話しから) | |

1 自校の事業への取り組みについて

豊間小学校の学区内には、「沼の内弁財天」「塩屋崎灯台」「中田横穴」等の歴史的に有名なものや、かつては日本一の生産を誇る包装かまぼこなどの産業、薄磯海岸や鳴き砂などの恵まれた自然がある。子ども達は、下学年の頃から、2年の生活科や3年の社会科の町探検を通して地域のよさに触れ合う機会が多いので、子ども達自身が地域についてもっと調べたという願いを持っている。また、地域の方も協力的で積極的に関わってくださる。

そこで、各学年の発達段階や教科指導との関連を図りながら、子ども達が主体的に学習し、地域の 人々の触れ合う喜びを味わえように願って実践計画を立てた。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

(事前)

- ① 公民館見学・・公民館の事業の一環として高齢者学級の開催があること、ヨガサークルを体験させていただき、地域の方が様々な活動を行っていることを知る。
- ② 公民館長さんから学区内の老人会についての情報をいただく。
- ③ 子ども達に講話をしてくださる方を電話で交渉して決める。
- ④ 自宅に伺い、子どもの頃の生活の様子などを伺う。昔の写真などの資料を借用。
- ⑤ 大正時代に小学生だった方にどんなお話を聞きたいか、子ども達に質問内容を考えてもらい、まとめる。講師の方にお話していただきたいことと質問内容を伝える。

(事後)

○ 子ども達の感想をまとめ、読んでいただく。時間や内容についての反省を話し合う。

(2) 授業の実際

- ① 講師紹介(年表や当時の小学校の写真を提示)
- ② 「うすいそ」の昔について
- 小学校の様子
- 小学校が終わると・・
- 子どもの頃の生活
- ・ 今の子ども達に伝えたいこと(着物の姿の写真を見ると子ども人数の多さに驚いていた。鈴木さんの一言一言が、子ども達にとっては驚きだった。難しい言葉があった場合には担任が補足説明をした。
- ③ 質疑応答



鈴木 弘一さんの講話

(3)授業をふり返って

子どもの感想から、自分の学校に愛着を深く持つようになったこと、93年間も地域に住んで活躍していらっしゃる鈴木さんに尊敬の念を抱いていること、昔の子どもの遊びをうらやましく思っていることなどがうかがえた。事前の話し合いや授業を通して、教師自身学ぶことが多く、4年や6年の社会科などに発展させていきたいと思った。

- 本校の地域人材バンクに登録されている方なので、実践した内容をさらに記録累積して、今後も 活用していくようにしたい。
- ・ 一学年だけの取り組みに終わらないように、情報交換し全職員で共有していきたい。
- 公民館と連携を密にし、新しい地域の情報を毎年取り入れていきたい。
- ・ 目標に合った授業にするためには、講師の方との事前の話し合いの時間を十分に取りたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第3・4学年)

| タイトル | 「今、自分たちに!そしてこれからの福祉を考える子どもにな一れ」 |
|--------|---------------------------------|
| サブタイトル | ~「盲導犬エヴァーとともに」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

(1) 国語科の「伝え合うということ」の単元で点字という文字を通し、コミュニケーションのあり方について学習をした。これを活かしさらに発展させるために、総合的な学習の時間で、視覚障がい者や聴覚障がい者の方々からの講話からその知恵や工夫を知り、これからの福祉についての考え方を広げ深めることをねらいとする。

2 実践授業について

- (1) 授業計画にあたって
- ① 講師は高橋由紀雄氏
- ② 電話にて日程調整(多忙なところご無理を言って開催していただく)
- ③ 講師依頼書発送(ねらいを記載し、当日の内容方法を確認する)

(2)授業の実際

- ① 盲導犬を持つきっかけ及び盲導犬との生活の講話を聞く。
- ② 盲導犬に出会ったら注意すべきことの説明を聞く。
- ③ 三つの歩行を体験する。
- ④ 視覚障がい者に接するときのエチケットを学ぶ。



盲導犬エヴァーと一緒

(3) 授業をふりかえって

- ① 盲導犬を持つきっかけ及び盲導犬との生活の講話を聞くことによって、具体的な苦労や生き るための努力を感じることができた。
- ② 体験(目隠しと盲導犬)から、歩行の難しさと闇の世界への不安と恐怖を感じ、福祉について 考える一助となった。
- ③ 介助(人や盲導犬)の信頼関係がいかに大切かを知り、今自分たちにできることや将来の福祉について何をすべきかを考えることができた。

- (1) 祖父母参観を毎年実施している。地域に住む高齢者の方々から伝承遊びを学ぶことが今後も継続していけるように、日程や内容の充実を図っていきたい。(本年度で26回開催)
- (2) 教育課程の編成と並行して、各教科等のねらいにそった講師や日程や内容の吟味を図り、 計画的・継続的な学社連携融合事業を展開していきたい。 (田植え・稲刈り・歯磨き・食育等)

教科名(社会科) 実施学年(第6学年)

| タイトル | 「長く続いた戦争と人々の暮らし」 |
|------|------------------|
| | |

サブタイトル ~太平洋戦争中の夏井地区の人々の暮らしについての話を聞こう~

1 自校の事業への取り組みについて

この単元は、新学習指導要領「社会編」の第3章 第3節 第6学年の内容(1)に基づいている。 日華事変により我が国が戦時体制に移行し、アジア・太平洋地域において連合国と戦って敗れたことを取り上げて調べたり、日本各地が空襲を受け、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、国民が大きな被害を受けたことが分かるようにしたりする学習である。長く続いた太平洋戦争中、夏井地区の人々はどのように、物資に困窮する生活に耐えて生き抜いてきたのかを、学校図書館を活用し、実際に戦争を体験した地域の高齢者に話を聞く活動を取り入れ、子ども達が資料を活用したり調査したりして学習が具体的に展開できるように工夫した。

2 実践事業について

(1)授業計画にあたって

本校恒例の異学年交流児童会活動「縦割り夏井探検集会」の中で、地域のお年寄り宅を訪問し、インタビューする活動があった。その中で、学区内の戦争体験者(坂本氏)の存在を知った6年社会科担任が「長く続いた戦争と人々のくらし」の単元で戦争実体験の講話を入れた学習計画を立てた。

まず、坂本氏に授業の趣旨を説明し、ゲストティーチャーとして講師を依頼し、快諾していただいた。

次に、坂本氏と授業の事前打合せを持った。打合せでは、本単元のねらいと戦争の是非では無く、当時の子どもの立場でとらえた社会情勢や夏井地区の様子を思い出して語ってもらいたいという授業者の願いを伝えた。授業者は、講師の記憶を裏付けるように昔の卒業アルバムの写真を画像資料として準備した。坂本氏自身も市役所に出向き、平空襲の資料を調べて構想を練り、担当と授業の流れを確認して授業に備えた。

(2)授業の実際

授業は6年教室で、講師・社会科担任・学級担任との TTで行った。

社会科担任が卒業アルバムから集めた昭和初期の夏井小学校の外観や市販の写真集からの学童疎開や金属供出の様子を50インチの大型画面で映し出した。

坂本氏には、その画像の解説と自分が子ども時代の 視点でとらえた戦争の悲惨さや当時の夏井地区の様子 を語っていただけた。

そのため、子ども達も戦争中の生活の大変さを具体 的に想像することができた。

坂本氏にとっても子ども達にとっても、授業を計画 した社会科担任にとっても充実した時間となった。



学徒動員や防空壕について語る坂本氏

(3) 授業をふりかえって

6年生にとっては、当時の子どもの視点で戦時中の世相や夏井地区の戦災を聞くことにより、平和の尊さについて考える機会となった。教員にとっては、地域人材の発掘と地域との連携が授業に及ぼす効果を実感すると共に、講師の授業に対する教材研究の真摯な姿勢に触れ、教えることの責任の重さを再確認できた。講師にとっても、教材研究と授業の実践は充実感となり、地域の子ども達とのふれあいは励みになったようである。

3 自校の取組の充実に向けて

来年度に向けての課題は連携の質。実践例のように、連携先(講師)と学校側(授業者)が共に意見を出し合って授業を計画するためには、物理的な時間と場所の確保・日程の調整が必要になる。イベント的に連携するだけでなく、連携する双方が授業に関する意見交換を対等かつ十分に行い、共に同じ授業の目標に向かうことが理想。連携から融合へ、学びの連携と質の向上を目指したい。現在、連携は連携を呼び、夏井地区の子どもを夏井地区のみんなで協力・協働して育てようという気運が芽生えている。

教科名 (総合的学習の時間) 実施学年 (第5学年)

| タイトル | 「お米を作ろう」 |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | ~種から育てたお米でもちを作って食べよう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

次の目標の達成にむけて本事業を取り組んできた。

・感じる心植物の不思議を発見し、感動や喜びを感じることができる。

・作り出す知恵 植物を育てるために必要な世話の仕方や工夫を知り、分かったことを表現で

きる。

・実現する力 疑問に思ったことを解き明かし、やってみたいことを実現しようとする。

・関わる喜び
地域の自然に親しみを持ち、進んで関わることができる。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

田を地域住民の方からお借りし、学校田として永年使用させていただいている。児童や教師が稲の育成を管理するだけでは難しく、PTAや地域住民の協力を得て行ってきた。稲は無事に生長し、PTAや地域住民の協力のもと収穫をむかえた。

子ども秋祭りでは、PTAの協力を得て、もちをつきそれを調理する計画となった。

(2)授業の実際

学校行事である「子ども秋祭り」では、その収穫したもち米を、PTA・地域住民の協力のもと児童が臼と杵でもちにつきあげ、調理し自分たちで食べた。種まきから稲作に関わってきた児童は、生長や収穫の感動や喜びを味わうことができた。また、児童がグループごとに調べてきた稲作の方法や世界の米料理について、校内テレビで全校生に発表した。

後日、関わってくださった田の地主さん、PTAの方、地域住民の方に礼状を送り感謝の気持ちを表すことができた。



地域の方とおもちつき

(3) 授業をふりかえって

児童は、収穫の喜びを味わうとともに、稲作の大変さや、それに関わってくださった多くの人への感謝の念を持つことができた。また、調べ学習を通して、稲作や世界の米について調べ、そこから食料生産と関連づけ、その重要性を理解することができた。

PTAや地域住民は、大変ながらもこの事業を楽しみにしていてくださる方が多く、実践のみならず計画や反省に参加し協力してくださった。児童の成長を共に喜び、児童との交流を楽しんでくださった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

稲作は児童や教師の力のみでは行うことができず、PTAや地域住民の協力が必要不可欠である。しかし、一部の協力的な保護者との連携に偏りがちでもある。より多くの方の協力が得られるような場の設定を検討していきたい。また、児童の体験や調べ学習がより深まるよう他教科との関連を図るとともに、教師の教材の提示や情報提供等の教材研究の更なる深まりが必要である。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第6学年)

| タイトル | 赤井のまちについて調べたことをまとめよう |
|--------|------------------------------|
| サブタイトル | ~夏井川を調べよう(夏井川に住む生き物たちと水の汚れ)~ |

1 自校の事業への取り組みについて

これまで各教科や総合的な学習の時間において学んできた知識を生かして、地域の環境に関心を持ち、具体的に調べる活動を通して、「環境とともに生きる」ことへの理解を深めることができるようにする。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

① 水質環境調査

河川環境子供研究発表会資料・環境マナー教室事業資料による学習情報の収集 公民館事業からの情報収集

② 水生生物調査

夏井川河川管理事務所との連絡・調整

(2)授業の実際

- ① 5学年時の学習の振り返りと課題の立案 以前調べたべた茨川環境のまとめを想起し、学習 の課題を持つ。
- ② 課題について調べる方法の検討、資料をもとに調査の仕方を探る。(グループ)
- ③ 現地調査水生生物の捕獲・撮影水質調査
- ④ 調べたことのまとめ、報告会 環境保護の視点から、調べたことをグループごと にまとめ報告・展示会をする。(図書館・インター ネット、その他の資料の活用)



パックテストで調べたよ

(3)授業をふりかえって

- 5学年時の環境学習を参考にしながら、地域の河川の実態について詳しく調べようと意欲的 に活動していた。地域に根ざした体験活動のよさを実感できたものと思う。
- 現地調査は、当日までの天候等により安全面での配慮を必要としたが、幸い天候に恵まれ、 子ども達の歓声が響くものとなった。
- 管理事務所や公民館事業の講師からのご協力を得て、学習を深めることができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 継続的に取り組み、調査結果を累積していくことは、調査の質を高め、子ども達の関心を更に地域全体の環境へと発展させていくと考える。

実施学年(全学年)

| タイトル | 「親子奉仕作業」 |
|--------|----------------------|
| サブタイトル | ~ 学校を自分たちの力で美しくしよう ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

保護者と生徒が休日を利用して学校美化の奉仕作業に取り組むことを通して、親子の絆を強めるとともに、開かれた学校づくりの一助とする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

PTA執行部と教職員との事前の会合を数回持ち、計画の具体化を図った。

(2) 授業の実際

雨模様の天候であったが生徒は一生懸命作業に取り組んだ。校庭の側溝あげは過去10年以上実施したことがなく、作業は想像以上に難航したが、保護者の積極的な支援もあり、予定時間内に何とか仕上げることができ、保護者も生徒も達成感を味わうことができた。



親子で側溝の砂揚げ作業

(3) 授業をふりかえって

全身が筋肉痛になるほどの疲労を覚えたが、保護者と生徒、教職員が一致協力して作業に 当たったため、さわやかさをみんなで分かち合うことができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

PTA執行部を中心とした綿密な計画立案が本事業を成功に導いた。今後も今回の経験を生かして、きめ細やかな計画を立案していきたいと思う。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1学年)

| タイトル | 「進路や生き方」 |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | 自分の進学希望高校について詳しく調べよう。 |

1 自校の事業への取り組みについて

・上級学校についての体験調査や説明会などを通じた、中学校卒業後の具体的な進路や行き方に ついて明確にする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- ・生徒の希望状況を把握し、希望の多い高校を中心に、高校へ説明会への参加の有無を調べた。
- (2)授業の実際
- ・生徒の進学希望高校を調査する。
- ・自分の進学希望高校について、本やインターネットを使い調査し、新聞形式でまとめる。
- ・説明会の時に、質問したい内容を調査する。
- ・説明会を開き、説明を聞いたり、質問したりする。
- 説明会のまとめをする。

(3)授業をふりかえって

・生徒にとって中学校教師から話を聞くよりも、実際の高校から話を聞くことにより、集中して 内容をメモしたり、疑問に思ったことを質問したりしていた。中学校にとっても、教師が各高校 に対する知識を広げることができた。また、高校にとっては、中学生が質問したことについて、 どのようなことに関心があるのかが分かったのではないかと思う。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・進路について、高校だけでなく大学や職業についても詳しく話を聞ける場面があったほうが、 より先をみた進路を考えることができると思う。 教科名 (総合) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「薬物乱用の防止」 |
|--------|----------------|
| サブタイトル | ~ 薬物乱用防止教室から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

青少年による薬物乱用が、深刻な社会問題となっていることから正しい情報でその害の恐ろしさを知り、体に及ぼす害を理解する。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

いわき保健所並びに薬剤師との連絡調整を行い、事業のねらいを達成するために生徒

一人一人の興味関心を把握して充実した取り組みになるよう配慮した。

(2)授業の実際

薬物乱用による障害や主な症状をパワーポイント等の視聴覚機器の活用を通して、生 徒たちは興味を持って授業に取り組んでいた。薬物乱用の恐ろしさには、脳の働きを麻 痺させ、思考力・判断力が鈍る、運動機能を低下させること、また、依存性が強いこと を知り、体に及ぼす害を理解することができた。

(3)授業をふりかえって

パワーポイント等の視聴覚機器の活用を通して、生徒は興味を持って取り組んでいたが、一部内容が難しく、生徒の意欲を持続させることが不十分であったと感じている。

- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ① 生徒の学習意欲を持続させるための工夫が必要である。
- ② 生徒の学習内容に関する実態把握を十分に行なうようにする。
- ③ 連携融合先との連絡を密にすることで生徒の指導に生かしたい。

| タイトル | 「ちょっと待ったケータイ あなたの命と未来を守るために」 |
|--------|------------------------------|
| サブタイトル | ~ 携帯・インターネットの利用のしかたを考えよう ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

携帯電話やインターネットを利用する上でのマナーを身につけるとともに、利用時にトラブル

に巻き込まれないようにするための知識・対処方法について学ぶ。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

電話やメール等で、ねらいをもとにした講演内容や準備について、打ち合わせを数回行った。

(2) 授業の実際

パワーポイントの資料をもとに、携帯電話でのメール上やインターネット上のトラブルを、具 体例を通してわかりやすく伝えていただいた。

生徒たちは身近な話題でわかりやすく説明してもらったため、話の内容に引き込まれ、集中して聞くことができた。

生徒の反応や感想から、ねらいは十分達成されたと思われる。

(3) 授業をふりかえって

- ・ フィルタリングの必要性・安易に個人情報を載せたブログやプロフィールの危険性がわかっ た。
- ・ メールは相手のことを考えることが大切だとわかった。 という感想が多数あった。また、 自分で自分の身を守るようにしたいという気持ちを育てることができた。
- ・ 保護者にも参加を呼びかけたが、参加者が少なかった。

- ・ 情報メディア教育を今後も生徒に継続的に指導していくため、次年度各教科につなげていき たい。
- ・ 同様の講演を、PTA (親向け) にできるように計画していきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第2学年)

| タイトル 「職場体験学習 | |
|------------------|------------------|
| サブタイトル ~ 職場体験学習を | 通して自己の生き方を考えよう ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

- ① キャリア教育の一環として実施し、職場での体験を通しながら自己の将来の生き方について 考えるとともに望ましい職業観や勤労観を育成する。
- ② 職場体験学習を通して働くことの大変さとやりがい、社会人としての礼儀やマナーの大切さについて感じさせる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

授業を進めるに当たり、そのねらいを達成するため事前に社会人の方を招聘し、働くことの意義について講義をしてもらった。職場の選定に当たっては生徒の希望を重視し、アンケート調査から職種及び事業所、生徒の割り振りを決定した。事業所は約50あまりであったが、事前の交渉において依頼の趣旨、内容、方法等について綿密な打合せを行った。ほぼ生徒の希望と合致した選定ができたが、教師側のアプローチは時間と労力がかかり大変であった。また定休日等の関係で引き受けてもらえなかった事業所もあり、毎年計画段階において苦労しているのが現状である。

(2)授業の実際

授業当日は6職種、48事業所に分かれて約半日の体験 学習を行った。事前の学習によりその職種について調べ学 習を行っていたが、実際に仕事をしてみると最初のイメージとは違ったということを感じた生徒が多かった。体験先には学年担当が訪問し、生徒の様子を観察したり、事業所の方から聞き取りを行った。ねらいにせまる授業となった。 事後においては各自の自己評価を行うとともに、事業所に評価を依頼し、生徒たち仕事の様子の把握に努めた。各事業所とも忙しい中で生徒たちに真剣に向き合っていただき、その真剣さは多くの生徒たちに伝わった。



商品陳列 (楽器店にて)

(3)授業をふりかえって

- ① 事前の学習に基づいて多くの生徒が、真剣に授業に取り組み、各自働くことの意義について 見つめる良い機会となった。事業所からの評価も概ね良好でまじめに取り組んでいた様子が 伺えた。
- ② 学校では体験できない社会の厳しさを味わえたことは生徒たちにとって貴重な経験となった。
- ③ 事業所評価のなかで、挨拶の声が小さかったり、指示されたことをしっかりやらなかったり、 積極性に欠けるという指摘があった。事後指導で話をするとともに、次年度の課題として今 後の学校生活の中でも指導していきたい。

3 自校の取り組みの充実に向けて

生徒たちにこの授業のねらいは何であるのか、そのためにどんなことをするのか等、職場体験学習の意義を事前指導に於いてより強調するとともに、1年次から進路の学習を通して「自分の生き方」についての指導を充実させ、この学習に結びつけることが重要である。3年間を見通した系統的な計画が必要となる。また、あいさつの大切さ、人との接し方等礼儀やマナーの大切さについても普段の学校生活の中で指導していくことが大切であると実感した。

教科名 (総合学習) 実施学年 (第2・3学年)

| タイトル | 「豊間の未来を考えよう」 |
|--------|------------------|
| サブタイトル | 「自己の生き方について考えよう」 |

1 自校の事業の取り組みについて

目的

- (1) 福祉の仕事に携わる人々と直接接することにより、働くことの意義や尊さを実感し、福祉への 理解を深める。
- (2) 自分たちができることを考え、身近な人々とのつながりを通し、地域から受けている恩恵や地域の一員であることを認識する。
- (3) 職場訪問・体験することで、職業に関する知識を深め、興味・関心を高める。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

5月11日 ○「ボランティア体験学習について」概要説明・班作り

5月18日、5月25日、6月1日、6月8日

○「自分たちにできることは何か」計画→準備(各班)

※6月12日まで担当教師が訪問先と事前の打ち合わせ

6月15日、6月22日、7月6日

○事前打ち合わせを受けて、訪問計画書を作成、準備

※7月3日しおり完成

7月8日 ○訪問先へアポイント取り

(2)授業の実態

初めは緊張していたが、各事業所で一生懸命取り組むことができた。今年初めて、2、3年合同取り組んだが、学年の枠を越えて協力してできた。一日だけであったが、へとへとになった生徒も多かったが、働くことの大変さや福祉について理解を多少なりとも深める機会となった。

(3)授業を振り返って

生徒たちの声より

- ・子供は苦手だったけど、今回の活動で好きになりました。実は私たちよりもいろいろみていてすごいなあと思いました。逆に子供たちが笑顔にしてくれました。
- ・患者さん一人一人は精一杯生きているんだなあと感じました。
- ・園児は純粋でまっすぐ、自分も全力で向き合わないと心は動かせない。
- ・思った以上に話ができず、自分のことで精一杯だった。
- ・予想以上に介護は大変そうだった。
- ・人の世話をするということは、とても大変で、根気のいる仕事だと思った。

3 自校の取り組みの充実に向けて

訪問先の特徴を考慮し、自分たちができることとして地域や学校の特性を生かした、じゃんがらや琴演奏などを行った。訪問先を地域施設としたり、訪問を通して得たことを発表するだけに終わらせず、その後の生活場面で具体的活動計画を実践したりできればより地域に根ざしたものになるだろう。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 身近なことから、たくましく生きる力を学ぼう |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | |

- 1 自校の事業への取り組みについて
- 自分に身近なもの(教務・関心・地域・文化・人々など)に着目し、調査研究体験を通して、 生きる力を育成する。
- 個人テーマに基づくテーマ追究学習を行うことで、探究心と新たな知識を発見する楽しさや 創意工夫し、まとめる力を養う。
- キャリア教育を行い、将来の進路選択の手がかりや職業観の育成を図る機会とする。
- 2 実践授業について
- (1) 授業計画にあたって
- (1) 個人テーマによる研究実践(7月)では、市立図書館や大学や高校など、公共機関、各事業所、インターネットなどを活用して、生徒個々人のテーマに基づく調べ学習を実施するにあたり、学校は訪問先との連絡調整を行った。
- (2) 1・2年生はグループ、3年生は個人での職場訪問や職業体験を実施した。(10月) 夏休み中に訪問先との連絡調整などを教師が行い、その後生徒自身で訪問依頼を行った。
- (3) 本校の立地条件で、公共交通機関の便が非常に悪いため、生徒の移動に伴う交通の足の確保が非常に困難で、地域のバス会社との折衝や保護者への依頼に時間を要した。
- (2)授業の実際
- 個人テーマでの調べ物学習や調査研究は、生徒一人一人の取組が多種多様で、まとめたもの を文化祭で保護者や地域の方々に発表し、成果を伝えることが出来た。
- 3年生の職場体験は、52名の生徒が、それぞれ異なる職場で、職業の実践を体験することができ、働く事の意義や苦労技術のすばらしさなどを体験でき、大変勉強になったという感想が、多くの生徒から出された。
- (3)授業をふりかえって
- 学校の中だけで体験できないことや、大人の中で緊張して働く事などの体験はとても貴重だと思います。しかし、受入れ先を生徒数分探すことや3年間のローテーションなども考えて、長期の見通しを持った計画を作成しておかなければならないと思います。
- 学校から生徒を校外に出すためには、看護をどうするか、交通機関の確保、費用をどうするか、授業時間と関わりをどうするかなど、課題はまだまだ解決されていないのが現状です。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ○学校で出来ることと地域や関係機関との協力が必要なものなど、再度見直しをしていかなければならないと思います。
- ○地域や保護者の方々の協力を得るための体制作りが必要と思いました。

教科名 (総合) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「ゲストティーチャーとともに」 |
|--------|------------------------|
| サブタイトル | 「地域の方々に学ぼう」~4講座の授業を通して |

1 自校の事業への取り組みについて

本校第3学年では、総合的な学習の時間を利用して、地域の方を講師として、授業を行っている。今年度は、「健康太極拳」「手編み」「水墨画」「YOSAKOI」の4講座を開設した。生徒の興味・関心を考慮しながら、自分たちと同じ地域に住んでいる方とともに活動をすることで、地域と学校の結びつきがより強くなっている。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

まず草野公民館と連絡を取り、公民館に登録している「社会教育団体」のリストを受けとり、 その中から本校の生徒の実態に合った講座をピックアップした。さらに、その講師の先生と連絡 を取り、日程、時間など細かい調整を行った。また、後日、授業についての打ち合わせを持った。

(2) 授業の実際

生徒の希望に応じ、4講座を開設した。どの講座においても生徒たちは、意欲的に活動した。「健康太極拳」では、中学生にもできる健康維持のための太極拳を学び、「手編み」では、基本的な手編みを実施した。男子も一生懸命取り組んでいた。「水墨画」では、基本的な技術や味わい方を学んだ。「YOSAKOI」では、元気に声を出しながら、踊りに取り組んだ。講師の先生との交流はもちろん、生徒同士のつながりも深まった。

(3)授業をふりかえって

生徒たちにとって、このような体験活動の機会はあまりないため、どの講座にも一生懸命取組み、大変有意義なものとなった。さらに地域の方々との交流も深まった。学校としても「開かれた学校つくり」の観点から有効であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後も、公民館との連携をさらに深め、この事業を継続していきたい。内容についても生徒の 実態を的確に把握し、吟味していきたいと思う。 教科名 (総合の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「生徒の郷土を愛する心を育むいとなみ」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~閼伽井岳清掃登山を通して~ |

1. 自校の事業への取り組みについて

- (1) 自分たちの住む郷土に関心を持ち、郷土の自然の豊かさや文化・歴史を知るとと もに、それらを大切にしようとする態度を育む。
- (2) 規律ある集団行動を通して、集団生活のきまりや公衆道徳を身につけさせる。

2. 実践授業について

(1)授業計画にあたって

・閼伽井岳常福寺の住職と連絡を取り、住職講話をまず電話で依頼した。

了承を得た後、正式な依頼書を持参提出した。

(2)授業の実際

・往復12Kmの道のりを生徒たちは元気に歩き通した。

途中険しい山道もあったが、事故・ケガもなく全員無事に帰校することができた。

また、帰り道ゴミ拾いを行ったが、多くの生徒が真剣に取り組んでいた。

予想以上にゴミが多く、生徒たちは驚いていた。

(3)授業を振り返って

- ・生徒の誰一人弱音を吐くことがなく、嬉々として清掃登山に臨んでいた。このことから
- 、郷土を大切に思う心が十分に育まれたものと思われる。
- 3. 自校の取り組みの充実に向けて
- ・閼伽井岳清掃登山は本校独自の伝統行事である。今後もこの活動を通して、生徒たちに

郷土の自然を大切にしようとする心と態度を育んでいきたいと考える。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第6学年)

| タイトル | 「小名浜について学ぼう」 |
|--------|-------------------------|
| サブタイトル | ~ 地域の産業「かまぼこづくり」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域の産業である「かまぼこ」について、生産に関わる方々から、かまぼこづくりの歴史や作

り方について学び、実際に作って食べる活動を行い、地元産業についての理解を深める。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

地元のかまぼこ製造販売業者「味の信和」の方々に連絡し、学校に来ていただく日時や内容を決定する。

(2)授業の実際

- 1 「かまぼこ」づくりの歴史について学ぶ。
- 2 「かまぼこ」のつくりかたについて学ぶ。
- 3 保護者のボランティアを加えて、いっしょにかまぼこ 作りを行う。
- 4 試食会を行う。



かまぼこづくり

(3) 授業をふりかえって

地元の産業を担う方々から直接話を聞き、保護者を交えて制作活動を行うことで、地場産業に

3 自校の取り組みの充実に向けて

対する理解を深めることが出来た。

このほかにも、「さんまのみりん干し」づくりや「さんまのポーポー焼き」づくりを行うこと

も可能であるので、次年度はさらに計画的に地域の産業について学ばせていきたい。

教科名(国語科) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「一音読と表現読み」 |
|--------|------------------|
| サブタイトル | ~ 豊かな表現活動を目指して ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校児童は、活発で行動的な児童が多いが、改まった場や必要な場面で、自分の思いや考えをなかな か表現できないことが多い。そのため、自分の思いや考えを存分に表現する力や表現する楽しさを味わ わせることをねらいとして取り組んだ。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- いわき市教育委員会の「特別非常勤講師の活用」に基づき、計画を立案した。
- 年度当初に、本計画を立案し「特別非常勤講師採用希望書」を提出した。
- 採用決定を受け、教頭が講師と連絡を取り授業計画を立て必要な準備を進めた。

(2)授業の実際

☆講師~大和久子(森 絵留)氏

- 全学年を、低・中・高学年に分けそれぞれ1時間ずつの授業を行った。
- それぞれの発達段階に合わせた詩の表現・朗読をとおして 指導いただいた。
- 講師は長年劇団を中心とした活動を続けるとともに、音声 学にも取り組んでこられたので、表現とそれを伝える発声 について具体的に指導いただいた。
- 発声の具体的な理解として、風船を利用した呼吸法について指導いただいた。
- 児童は発声のメカニズムがわかりやすく理解でき、意欲的 に表現に生かすことができていた。



楽しみながら表現しよう

(3)授業をふりかえって

- 教員以外の、専門的な分野に精通する方から指導を受けることは、児童にとって普段の学習と違っ た新鮮さがあった。
- 自分の思いを自分の言葉でより伝わるように表現することが苦手な児童にとっては、どうすればよいのかの一つの方法を具体的に知ることができた。
- 教員にとっても、新鮮な指導技術を知ることができとても有意義だった。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 本校児童の実態により必要な領域を分析して、今後もこのような取り組みを継続していきたい。
- 指導の重点化を図り、将来を見通した長期的な指導計画を立て、それに合う事業を立案していきたい。

教科名(総合的な学習) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「長寿会との交流会」 |
|--------|------------|
| サブタイトル | ~昔遊びを通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

・玉川長寿会の皆さんと「昔遊び」を通して交流することにより、お年寄りに対する思いやりや 昔の遊びの楽しさを知る。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- ・新型インフルエンザの影響で実施時期を変更した。
- ・長寿会の代表者と学年担任が事前打ち合わせを行い、活動内容について共通理解を図った。

(2)授業の実際

- ・ 長寿会の方々16 名が参加、短時間の中で効率よく楽しめるようにと、準備をいろいろ整 えてきた。
- ・ 8種類の遊びを、グループごとに順に回り、全員が全種類の遊びを体験した。
- 昔の道具や遊び方についてのお話を聞けた。
- ・ 限られた時間の中ではあったが、和やかな交流活動が行われ、子どもたちも長寿会の方も 満足そうであった。

(3) 授業をふりかえって

長寿会の方々はこの交流の場を大変楽しみにしていて、子どもたちが楽しめるようにといろ いろ準備をしてくれた。

・ 遊びの楽しみ方や、友達同士の協力等交流が図れた。

- この交流会をはじめ、お年寄りとの心温まるふれあいが増えればよいと思う。
- ・ 受身の体験活動にならないような計画をさらに考えて生きたい。
- ・ 国語や社会の学習と関連して戦争体験や昔の暮らしなどについてのお話を、学習過程にあ わせ何度か聞けるような交流にしたい。

| タイトル | 「地球環境と新エネルギー」 |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~総合的な学習の時間「地域環境づくり」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

- 電気の大切さを知り、新エネルギーに対する興味・関心を深め、地球温暖化対策に積極的 に参加する意欲を育てる。
- 東北電力の方々と連携を図り、電気の仕組みやおもしろさ、大切さについて実験を通して 理解する。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- 二酸化炭素削減に取り組む方法や意識の高揚を図るため、電気を扱っている東北電力の 方々との連携を図り、具体的な実験を通して、電気の大切さを理解するための授業を展開 することについての共通理解を図った。
- 担当者(5学年)及び教頭が窓口となって折衝し、講師派遣依頼書を作成した。

(2)授業の実際

- 講義
 - ・電気の大切さについて
 - ・火力・原子力の仕組みについて
 - * パワーポイントで児童に分かりやすく説明をしていただいた。
- ○体験コーナー
 - ・太陽エネルギー、泰用風力についての体験実施
- (3) 授業をふりかえって
- 授業後関心・意欲が高まり、今後の調べ学習において個人のテーマが定まった。
- 東北電力の方々への畏敬の念が深まり、キャリア教育の一環となった。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
 - 平成22年度の総合的な学習の時間の指導計画に、全学年で新エネルギーを取り組み、実施することとなった。 その際、今年度同様に外部人材の活用を図りたい。
 - 学校全体で、二酸化炭素削減についての具体的な取り組みを福島議定書等を活用して推進する。また、その成果・課題について、学校便り等を通して公表し、保護者・地域連携との 共有を図る。

教科名(学活) 実施学年(第3、4、6学年)

| タイトル | 自然災害科学実験教室 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~ナダレンジャーがやってきた~ |

1 自校の事業への取り組みについて

自然災害に対する理解を深めるとともに、自然災害に対する対応、対策をたてる必要性を理解させる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

事前にNPO法人「福島災害コーディネーター支援センター」の方と4回本事業について話し合い実施時間、場所、内容など細部にわたって、打合せを行った。 また、当日は午前中から、保護者と本校職員、支援センターの方で準備を行った。

(2)授業の実際

13時30分より、本校体育館において行われた。 ナダレンジャーがいろいろな実験を通して自然災害 の怖さ、事前の心構え也準備の大切さについて指導し た。子ども達はナダレンジャーの扮装や、実験に興味 関心を示し、最後まで熱心に授業に参加した。



ナダレンジャーによる 震度の揺れの実験

(3) 授業をふりかえって

インフルエンザ流行のため、全学年で行えなかったのが残念であった。

参加された保護者や地域の方の感想は実験から災害の理解が進んでき大変良かったというもの であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

本校は高台にあり、津波などの影響は考えられないが、その他の自然災害対応は常に考えていかねばならない。このような学習を通して児童は自然災害に対する心構えを培っていくであろう。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第4学年)

| タイトル | 「かしまジュニア福祉スクール」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~かしま荘のお年寄りとの交流~ |

1 自校の事業への取り組みについて

学区内に老人ホーム「かしま荘」があるので、総合的な学習の時間での福祉の分野において子ども たちとお年寄りとの交流と行っている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

かしま荘の担当者と学校の担当者が、電話等で連絡を取り合い、実施日時・方法・内容等について 決定している。

(2)授業の実際

- 〇 開会式
- 子どもたちによる音楽発表 (方部音楽祭で発表した曲)
- 交流…グループ毎に昔遊びやゲームを行う。(お手玉、けん玉、あやとり、風船バレー、トランプ似顔絵、折り紙)



お年寄りの方々とのふれあい

- 〇 閉会式
- (3) 授業をふりかえって
- お年寄りの方々は、子どもたちとの交流をとても楽しみにしていて、喜んでくださっている。
- 子どもたちも、お年寄りの方々に喜んでもらえることを、自分自身の喜びとして感じている。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
 - 実施時期は、方部音楽祭後に例年計画しているが、児童の意欲付けのためにも、早期から具体 的な計画等を提示し、取り組ませていきたい。

教科名(社会科) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「子どもの健やかな育ちを願ういとなみ」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~「防火教室」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

「くらしをまもる(消防)」についての学習で、実際に仕事をしている消防署員の方から火事 の恐ろしさと予防についての心得を知る。また、家庭に啓発する機会とする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

年度当初に、消防署より防火教室の要請があり、時期(期日)を検討した。当日の内容につい

て、一週間ほど前に、署員の方と学級担任とで打合せをした。

(2) 授業の実際

火の取り扱い方をクイズ形式で考えたり、トラッキング現象の実験を見せていただいたりした ので、児童は興味深く取り組んでいた。所員の方も、わかりやすく説明してくださったので、よ り理解が深まった。

(3)授業をふりかえって

一人ひとりの感想をみると、火の恐ろしさを知り、防火に対する意識が高まった。また、感想

を家庭に持ち帰り、防火の呼びかけをすることができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

「写真を撮る」、「児童の感想を掲示する」などして実施記録を累積させて、本校の取り組みを さらに充実させたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5学年)

| タイトル | 「人や自然と豊かにかかわり合い、共に生きる児童の育成」 |
|--------|-----------------------------|
| サブタイトル | ~ 野鳥観察をとおして~ |

1 自校事業への取り組みについて

本校では、これまでも身近な環境問題に取り組んできており、野鳥観察もその一環として行っている。自然 とのふれ合いをとおして、地域のすばらしさ、自然の大切さを体感させ、自分の住む町や自然を愛する子どもの 育成を目指している。地域の環境や自然について体験活動をとおして学ぶことは、心豊かな児童の育成につなが っていくものであると考える。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本事業充実のために、外部講師の活用を図っている。日本野鳥の会いわき支部から専門的な知識や経験に富む先生をお招きし、児童と野鳥との出会いが感動の出会いであるように設定している。日本野鳥の会いわき支部の基本理念は「野鳥も人も地球の仲間」であり、「共に生きる児童の育成」を目指す本校の目的と重なっている。事前打ち合わせの時間は十分には確保できないが、講師の先生のきめ細やかな配慮のもとに可能な限りの事前打ち合わせを行い、授業の充実を図っている。

(2)授業の実際

- 春は初めてということで、双眼鏡の使い方などの基本的なことについて学習したあと、野鳥の観察を行った。校舎周りのツバメそしてカラスと活動を広げていった。
- 冬は冬鳥、特に海を中心に生活する鳥について観察 を進めることにより、春とは違った種類の鳥を多く 観察することができた。
- 海鳥は色に特徴があるものが多く、子どもたちは双 眼鏡や望遠鏡をのぞき、真剣に観察していた。
- 講師の先生とも鳥について話をし、ポケット図鑑を 開き確認するなどの様子がみられた。



海に浮かぶ鳥を観察中!

(3)授業をふりかえって

- よく見かけるツバメにも種類があることや一年中見られるカラスにも種類があることに驚いていた。それらの鳥を見て「○○カラスだ。」と呼び喜んでいた。
- 永崎という地域に住んでいても、海にいる鳥をじっくりと見る機会はなく、たくさんの種類の鳥を見ることができて驚いたという感想が多かった。また、これを機会に鳥の観察を自分でもしてみたいという感想もあった。
- 自分たちの住む地域の環境について学習することができ、恵まれた環境であることが自覚できた様子である

- 身近な自然に積極的にかかわり合う活動を継続することにより、地域の自然の豊かさに誇りをもち、地域の 環境について守り育てていこうとする児童の育成を目指していく。
- 本校の特色ある教育活動として自然と深くかかわり合う本事業を、永崎地区の環境保全へと広げ、そして充実させていく貴重な体験の場として今後も継続して実践研究していきたい。

| タイトル | 人から学ぶ自分にできることは |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | ~福祉「車いすに乗ってみよう」の授業から~ |

1 本校の事業への取り組みについて

本校では、4年生で福祉をテーマに総合的な学習を進めている。「車いすに 乗ろう」では、相手の立場によって物事を考えることが苦手な子ども達に、車いすの疑似体験を通して、相手をより正しく理解しようとする態度や、お互いの違いや良さを認め、尊重し、共に生きるために自分たちはどうしたらよいか を考えさせるのに良い機会になると考える。又、自分自身を振りかえったり、いろいろな人に対して、自分にできることを見つけることができるようにさせたい。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

市で行っている市民講座の中の、「初めての福祉」〜障がい福祉について〜 の講座を活用した。約1ヶ月前に、学年主任が市の障がい福祉課に電話で車いす体験を申し込んだが、他校の先約があり、講師には来てもらえなかった。そこで、自分たちだけで車いす体験をすることにした。市の障がい福祉課に電話で申し込み、車いす3台(各クラス1台ずつ)を借りることにした。前日の夕方、学年で、校長名での借用書を持参して市役所に車いすを借りに行き、翌日車いす体験の授業を実施した。

(2) 授業の実際

○ 体育館の中に車いすで通るいろいろなコースを作り3人1組のペアで交代で車イス体験行なった。 (S字、段差、凸凹、狭い道)

○はじめは、車いすを上手に操作できないことに戸惑ったり、腕が疲れて長く乗るのは大変だということに気付いた。

○狭い道や S 字カーブ、段差などで止まってしまい 友達に手をかしてもらって車いすを動かしたりして いた。押す人がスピードを出し過ぎると乗っていた



人が恐い思いをしたりするということ、手助けをするときにも注意してやらなければならないということにも気付いた。

(3)授業を振り返って

活動後、体験を通して分かったこと、考えたことを発表し合い、意見交換を行った。校内のスロープや町の中の施設などを思い出し、車いすの人がより生活しやすい環境作りが大切だと考える子が多かった。又、車いすの人の大変さや自分との違いに気づき、自分たちは、どうしてあげたらよいのかを考えようとしていた。その中で、施設の改善だけではなく、人の心も大切だという意見も出た。子ども達は、車いすの人は、自分たちが思っていた以上に大変な思いをして生活していることに初めて気づいたようだった。

3 本校の取り組みの充実に向けて

車いすの疑似体験だけでなく、お年寄りや目が不自由な人との交流の機会を設け、盲導犬や点字などについても、調べ学習だけでなく、直接お話を聞いたりすることも計画している。それによって、世の中にはいろいろな人たちがいて、お互いに助け合って共に生きていることに気づかせたい。その気づきが、自分や他人を尊重する態度につながっていくと考える。

| タイトル | ユネスコ学校 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~世界遺産と平和について考えよう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

ユネスコ活動について学ぶ活動を通して、世界遺産や原爆ドームについて知り、 平和を守るために自分たちのできることは何か考える。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

いわきユネスコ協会と連絡を取り、「ユネスコ学校」を開催する運びとなる。

実施時期や開催内容については、いわきユネスコ協会と連絡を取り合い、1月21日に開催し、6名の講師が来校し体育館(全体)と各教室で学ぶ二部構成で実施するようにした。

(2) 授業の実際

① 導入 10分

〈全体活動、体育館で実施する〉※講師1名

- いわきユネスコ協会について
- いわきユネスコ協会の活動について
- ② 展開 40分

〈全体活動、体育館で実施する〉

- ユネスコ活動について
 - 世界寺子屋運動
 - ・世界遺産と平和
- 世界遺産の保護活動について
- ③ 展開・終末 35分〈4学級に分かれて各教室で実施する〉※講師4名

【感想を話そう】

- 話を聞いて感想を話す
- 原爆ドームがなぜ世界遺産になったのか話し合う
- 平和を守るために自分たちにできることは何か考えて文章にまとめる

(3) 授業をふりかえって

○ 子どもたち(感想より)

- ・ユネスコ活動内容がよく分かった。
- ・世界遺産を戦争による破壊から守る活動が平和につながることを理解した。
- ・自分たちができる活動として募金活動がある。→実際にユネスコ募金活動を6年生を中心に実施 した。

〇 学校

・国語科で学んだ「平和のとりでを築く」やユネスコ作文コンクールへの出品、調べ学習との関連 が十分に図られ、原爆ドームや世界平和について深く考える契機となった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

次年度もいわきユネスコ協会の協力を得て開催予定である。国語科や作文コンクールへの出品も計画に入れ、子どもたちに課題意識を持って「ユネスコ学校」に参加させたい。お話をいただく内容について前もって具体的に依頼しておくようにしたい。



教科名(総合的な学習の時間) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「田んぼで育む豊かな心」 | |
|--------|--------------------------|--|
| サブタイトル | ~ 学校田を活用した地域密着型の体験活動から ~ | |

1 自校の事業への取り組みについて

本校は全校児童107名の小規模校である。周辺に大きな店舗はなく、主要道路の周辺には田畑が広がっている。森林や川など、自然に恵まれた環境の中で、児童は様々な体験活動に携わることができる。その中で、地域の人材を活用した稲作の体験活動を通して、農業についての理解を深めるとともに、郷土を愛する豊かな心を育むことをねらいとし、上記の学習内容を設定した。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本授業の指導者は、本校職員、公民館、地域の高齢者が携わっている。稲作は年間を通した活動であるので、年度初めには関係機関へ活動計画を提出し、話し合いを行っている。活動日が近くなると、準備物や時間の再確認を行うようにしている。稲作の活動は天候の状況に大きく左右されるため、情報交換を密にしていくことに心がけている。

(2)授業の実際

田植えに始まり、草取りや稲刈り、脱穀など、児童は積極的に活動を行ってきた。特に地域の方に協力いただいたのは、かかし作りである。今年度は一人一体のかかしを立てることを計画した。児童の持つ技術だけでは組み立てが難しいところであったが、3名のお年寄りに指導いただくことで、とても丈夫なかかしを作ることができ、児童も満足感を得ることができた。冬には活動のまとめとして、公民館で「感謝の会」を開いた。収穫したお米から紅白もちを作り、お世話になった方々や全校生徒に配付した。農業についての理解を深め、地域の一員としての自覚が芽生えたと考える。



地域の方と稲刈りをする様子

(3) 授業をふりかえって

教室で児童がまとめの発表を行った際に、1年間の田んぼの学習を経て、「お米の大切さに気づくことができた」「家でも感謝の気持ちをもって食事をしたい」などの感想を聞くことができた。また、地域の方々と連携して体験活動を行う機会があったことで、郷土を愛する心も育てられた。学校と地域が一体となって子どもたちを育てていくという姿勢も強まったと考える。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今年度は稲作体験以外にも、他学年での陶芸教室や川の生き物調査などで地域の方々と協力して活動を行ってきた。一つの学年だけで終わりの体験ではなく、進級しても様々な体験活動を児童が行えるようにしていくことが求められる。そのために、さらに学習内容が充実するよう、全職員一丸となって教育課程の改善を図っていきたい。

教科名(学校行事) 実施学年(第1・2学年)

| タイトル | 「クリーン作戦」 |
|--------|----------|
| サブタイトル | |

1 自校の事業への取り組みについて

- ・地域の方々と共に清掃活動を行うことにより、地域の一員としての自覚を深める。
- ・地域の方々と生徒が協力して美化活動に取り組むことで、地域内の環境美化に努める。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

・事前に、日時の連絡と参加依頼する。

(2)授業の実際

- ・通学路の清掃は、回収するゴミ等の数が少なく、清掃活動の効果は薄かった。
- ・地域の方々の参加も少なく、地域との交流は深まらなかった。

(3) 授業をふりかえって

・普段、学校でしか見ることのできない生徒集団の姿を、地域の方々に見ていただくことで、学

校の様子を理解していただけるよい機会となっている。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・今後は、通学路だけでなく、地域の公園まで清掃の範囲を拡大し、また、地域の方々との交流

を更に深める方策を考え、より多くの方々と接することで、生徒に地域の一員としての自覚を

持たせると共に、地域の方々に生徒のよさを理解していただく絶好の機会としたい。

教科名(学校行事) 実施学年(全学年)

| タイトル | 地域交流事業 心豊かな生徒の育成 | |
|--------|------------------|--|
| サブタイトル | 地域交流事業を通して | |

1 自校の事業への取り組みについて

校との交渉、地域の老人会への案内配布。

地域の方々との交流を通して、本校教育目標である「心豊かな生徒」の育成を図ると共に、社

会に貢献する意識理念を高めることをねらいとしている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

生徒会役員と担当教師での内容検討、地域人材の情報収集、協力依頼、幼稚園・保育所、小学

(2) 授業の実際

自分たちが普段当たり前のように生活している中学校で幼児やお年寄りが一日過ごすにはどのような配慮が必要なのか、地域をさらによくしていくためには何ができるのか等を考えながら活動することができた。

(3) 授業をふりかえって

小学校や幼稚園の職員からは互いの子どもたちの心の成長のため、今後も継続した取り組みに したいとの感想をいただいた。地域の方々からは、子どもにとって充実した意義のある活動であ ったとの感想をいただいた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

それぞれの活動の段階で、生徒の心の成長の様子を性格に把握し、学校生活全般で学びの系統

性や連続性、発展性を考えた指導を行っていきたい。

教科名 (総合的な学習) 実施学年 (第1学年)

| タイトル | 地域との触れ合い活動 | |
|--------|------------|------------------|
| サブタイトル | ~「福祉」 | 地域の福祉施設訪問活動を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

誰もが安心して幸せに生きる福祉社会をつくるために、福祉問題に目を向けた学習を通して、地域福祉への関心と理解を深め、更に自ら参加実践することによって心豊かな人間形成を図るとともに、福祉問題を解決する力を身につけることを目的に、第1学年の総合的な学習の時間のテーマを「福祉」として、実践している。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

年度当初、組織を立ち上げ、1年間の見通しを立て、6月には訪問施設の決定、担当教員と訪問先担当者との打ち合わせを行った。7月には第1回目の福祉体験活動、その際、担当教員は生徒の活動の状況の確認を行った。その際、活動に関するアンケートをお願いした。

(2) 授業の実際

高齢者福祉を学ぶ生徒達の訪問先は老人ホームやケアホームなどで、介護知識、介護予防等の学習をするとともに、実際に介護体験(車椅子介助、歩行時の介助、食事の介助)や高齢者との触れ合い活動(お手玉作りや歌唱)を通し、地域の高齢者福祉の現状や今後の支援について学んだ。最近は核家族が多いため、高齢者の方との触れ合いが少なくなっているのが現状である。しかし、生徒達はとまどいも見せず交流を楽しんでいた。

障がい者福祉を学ぶ生徒達の訪問先は「いわき学園」や「カナン村」などの福祉施設で、入所者の方との物作り(ポチ袋づくり、キノコづくりなど)に挑戦したり、物作り支援を体験し



│ ~「おばあちゃんの昔話」を聞く~

た。普段は障がいのある方と接する機会も少ないことなどから、うまくとけ込めない生徒が多かった が、積極的に交流しようとする意思はみられた。

児童福祉について学ぶ生徒達は、幼稚園や保育園を訪問し、保育活動の援助や幼児と一緒に活動することで触れ合いを深めた。将来の職業に保育士を目指す生徒も多く、楽しく交流する姿が見られた。 訪問先からも比較的良好な評価が多かった。

(3)授業をふりかえって

どの訪問先でも、普段の生活ではほとんど体験できない介護や介助、保育などを通して地域の福祉の現状の一端を学習することができ、良かったという感想が多かった。しかし、常に体験することは不可能なので、地域でボランティア活動に取り組みたいとか困っている人を見かけたら援助していきたいなどの感想も多かった。学校としても、生徒の感想や訪問先からの感想等から今回のこの体験は普段できないこととして、効果があったと考えている。また、地域からも同様である。

3 自校の取り組みの充実に向けて

学校教育は、地域の方々の支援が必要不可欠である。総合的な学習の時間、地域との触れ合いを持つことを視点に交流、体験活動を進めている。今後もこのような取り組みを続けながら、人権教育や道徳教育、環境教育などを更に充実させ展開していくことが結果的には福祉教育を行っていることにもなると考えている。

教科名(選択家庭) 実施学年(第2学年)

| タイトル | 「生活に役立つ小物作り」 | |
|--------|-----------------------|--|
| サブタイトル | ~ 手芸「パッチワーク製作」の授業から ~ | |

1 自校の事業への取り組みについて

不要になった衣服や、被布を再利用し、エコを考えながら生活に役立つ小物作りに取り組む。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

公民館活動を行っていた卒業生の保護者にお願いして、引き受けていただいた。

(2) 授業の実際

個性を生かした作品作りに努め、指導を受けながら、熱心に作業に取り組んだ。

意欲の高い生徒は、複数の作品を完成させ、生活に生かすことができた。

(3) 授業をふりかえって

生徒は、地域在住で本校卒業の先輩保護者という点からも、親しみを持って活動することができた。地域の生徒の特性を良く知る保護者ということもあり、生徒指導の面からも、教師と協力して行うことができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

基本的な技術をしっかり見につけることにより、さらにレベルの高い作品を制作できる応用力

をつけさせたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1学年)

| タイトル | 身近な「食」について考えよう |
|--------|-----------------------------|
| サブタイトル | ~ 地元産の食材を使った郷土食づくりの体験活動から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

子ども達を取り巻く食料事情に注目し、食物が手元に届くまでのしくみや食に関する問題点について理解し、食育の学習を通して、健康によい食物を選ぶ力、マナーよく食べる力、自然環境や食糧問題について考える力を身につける。また、地産地消の学習の一環として、地元産の食材を使った郷土食づくりの体験活動から、食の安全について考え、よりよい食生活の実現にむけての課題を持ち、自らの今後の食生活の充実に役立てようとする態度を育てる。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

今回の全体活動計画では、農林水産省 東北農政局 福島農政事務所 地域第三課を窓口とし、各関係機関への協力要請・連絡調整などで助言・指導を頂いた。

○身近な「食」に関する講話

- ・日本の「食糧自給率」について…市役所出前講座の活用
- ・「体づくりに必要な食生活」について…学校栄養教員の活用
- ・「エコクッキング」について…東部ガス株式会社
- ・「食品表示」について…農林水産省 東北農政局 福島農政事務所 地域第三課

○郷土食づくり体験活動

- ・食材・実演協力など…中央卸売場、株式会社マルト、福島県青年農業士、きゅうり生産農家
- ・調理機材・調理指導など…東部ガス株式会社、いわき市小名浜学校給食共同調理場栄養士

(2) 授業の実際

当日は、10学級を前班と後班に編成して、入れ替えで体育館で郷土食づくり体験(サンマのすりみ汁、いわき産のきゅうりを使った漬け物、いわき産の米)と武道館で「エコクッキング」や「食品表示」、ねぎ生産農家の人の講話を聞く1日体験学習となった。郷土食づくりでは、栄養士の指導のもと、地元産の食材を使った実習にいつも以上にありがたみを感じながら一つ一つ真剣な表情で作業に取り組んでいた。自分たちで心を込めて作ったすりみ汁や漬け物を満足気な顔で完食する生徒達の姿があった。講話では、食生活のあり方が食料生産や環境問題と密接なつながりがあることを知り、エコクッキングの知識をより多くの人が実践することによって食料生産や環境問題が改善されるという広い視野をもてるきっかけとなったようである。



サンマのすりみ汁作りの実演

(3) 授業をふりかえって

地元の生産農家の方々との交流を通して、子ども達は毎日口にしている食材がどのようにして手元に届くのか具体的に知ることができ、地産地消のよさについて関心をもつことができたようである。また、今回協力して頂いた関係機関の講話は、各分野の視点から「食」に関するさまざまな問題点や課題についての共有の場となり、今後の食生活の改善や工夫について考えるきっかけ作りに役立ったと考えられる。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後も、子ども達にとって、より身近な地域素材や題材を活用し、地元で活躍されている人材や各種関係機関との連携を図ることによって、地域で働く人の生き様に触れ、自分の生き方について考える機会や郷土愛を育むような学びの充実を図りたい。

教科名(図画工作) 実施学年(第6学年)

| タイトル | 感謝の気持ちを込め、焼き物で家族へプレゼントしよう |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~陶芸教室 図画工作の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

- ・卒業を間近にひかえ、愛情をもって育ててくれた家族に対し、感謝の気持ちを込めて焼き物のプレゼントをつくる学習。
- ・焼き物の美しさに触れたり、粘土が陶芸へ変化する楽しさや実際に使うことができる喜びを味わわせたい。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

・「子ども達が地域社会の中でいろいろな人たちと交流し、様々な生活体験、社会体験、自然体験を 豊富に積み重ねること」や「家庭や学校や地域社会の連携」が重要であると指摘されている。 焼き物の制作を通して造形的なものの見方や考え方、造形感覚を養うことができるよう、近くに住む講師と細部にわたる打合せを行い、授業に至っている。

(2)授業の実際

~ 陶芸教室 ~

- ・地域の方であるという親しみを持ちながら学習に取り組み 、専門的な技術についても、かみくだいて分かりやすく教え ていただくことができとても勉強になった。
- ・子ども達は、目を輝かせながら作品づくりに取り組み、 作品鑑賞では粘土から陶器への変化に十分喜びを味わい 授業の目標を達成することができた。



陶芸教室のはじまり

(3) 授業をふりかえって

・粘土に触れることで、気持ちが安定したり、創造力が働いたりして、子ども達の教育には、とても 効果的である。自分の思い通りの作品にはなかなか仕上げられなかったが、感謝の気持ちを込めて作 品づくりに励み、楽しく学習できた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・限られた少ない時間での学習である。目標達成のため、子ども達への事前指導の困難さはもちろん ゲストティーチャー (講師) の苦労や人生観等も子ども等に伝わる時間を確保したいところである。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5学年)

| タイトル | 幼稚園児との交流をしよう |
|--------|--------------|
| サブタイトル | ~楽しく給食を食べよう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校は幼稚園と隣接しているという立地条件を生かして、幼小連携事業を教育課程に位置づけて取り組んでいる。主な交流学年は、1年、3年、5年である。特に5年生は翌年6年となり、新入生との関わりが深くなることから時数も多く配当している。

2 実践授業について

交流授業を実施するためには、担当教師同士の打合わせが必要となってくる。隣接しているという利点を生かして顔を合わせての打合わせ会を数回計画した。また、学校の休み時間には児童が幼稚園に出かけて園児の実態を把握しながら交流を積み重ね、それらを合同で実施する給食試食会の計画に生かすようにした。

(2) 授業の実際(合同給食試食会)

- ・最初は、5年生が昇降口まで幼稚園児を迎えに行き、手をつないで入室した。
- ・次に、5年生が音楽の時間に練習していた歌と合奏を披露した。園児はとても熱心に鑑賞していた。
- ・次は、班ごとに園児と一緒に楽しく活動する時間になった。かるたやなぞなぞ等、自分達で準備した内容で仲良く楽しむことができた。
- ・最後に、給食を楽しく食べた。準備も声を掛け合いながら一緒に行い、会話を楽しみながら試食することができた。後片付けも協力して行うことができた。



(3) 授業をふりかえって

日頃、自己中心的な児童が園児と関わることにより園児の世話をすることや相手のことを考えて行動することができるようになった。さらに優しい眼差しや穏やかな態度も見られるようになってきた。また、園児は体も大きく力もある5年生の児童達を頼りにするだけでなく疑問に思うことを教えてもらうことにより尊敬の気持ちも抱きつつあった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

園児は頼りになる5年生児童がいる小学校生活へ憧れや期待を持つことができるようになるし、児童はいたわりの心や思いやりの心を持つことができるようになる。小1プロブレムの解消や心を育てる教育にはとても効果的な活動である。さらに、園児の様子や活動内容を詳しく把握するためには幼稚園教育に詳しい方の指導を頂くことが望ましい。

教科名(総合的な学習の時間) 実施学年(第3学年・第4学年)

| タイトル 森林学習から(生 | 学校周辺の野鳥観察) |
|---------------|------------|
|---------------|------------|

サブタイトル

~地域ボランティアの方の協力を得て学校周辺の野鳥を調べよう~

1 自校の事業への取り組みについて

市内の地域ボランティア団体(いわき野鳥の会)会員の方々の知識・技能等を、野鳥観察やその後の振り返り学習を通して伝達していただくことで、会員の方々との交流を深めるとともに、地域の自然環境等に一層興味・関心を持つことができる。

2 実践事業について

(1) 授業計画にあたって

- ・4年生は2回目の学習であることから、昨年度の実践に加え、野鳥観察のポイントの確認や観察後のまとめ方に力点を置くようにし、事前の打ち合わせを行い、実施方案等を作成する。
- ・3年生は初めての体験となるので、観察の仕方や野鳥に関心をもたせることに主眼を置き、事前打ち合わせをいって、実施方案等を作成する。

(2) 授業の実際

<4年生の例>

①ねらい

「野鳥の特徴を発見し、鳥博士になろう」

- ②昨年の体験を生かして、野鳥観察を行った。
- 10人のグループに1人会員の方がつく。
- ・各自、特徴をメモしていく。
- ・準備物 (双眼鏡、探検バック)

③まとめ

- ・見つけた鳥の中で、一番印象深いものをまとめて発表。
- ④スズメのクイズ
- ⑤後日全員のまとめた鳥とその特徴を一覧表にし、全校 児童が興味を持って見れる場所に掲示した。



観察の結果をもとにまとめを行う

(3) 授業をふりかえって

- ・野鳥の会の会員の方々とも2回目ということで、年配の方々との接し方や交流の仕方もわきまえつつ、自然の生き物に対する子どもたちの見方が変わり、より興味をもつようになった。また、鳥の特徴の見分け方も分かるようになった。
- ・3年生は、野鳥の観察を通して、自然のすばらしさや生き物の多様さなどを感じることができた。 普段見ることができない鳥の様子を観ることにより、自然を観察する眼が養われた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・今後もこの連携を継続し、全児童が卒業するまでの中で体験できるよう、早めの計画、事前の打ち合わせ、内容・準備物についての確認等を行うとともに、単に野鳥の観察に止まらないように授業の内容を充実させていく。

タイトル 人や自然に働きかけ、共に生きる子どもの育成

サブタイトル~「見つめよう人とくらし、考えよう地球環境」の授業から~

- 1 自校の事業への取り組みについて
- 地域素材である湯の岳の散策を、校地内の樹木を1年間観察し四季の移り変わりによる樹木の変化 を調べる学習の導入、自然との出会いとして位置づけた。
- 地域人材である「いわきの森に親しむ会」の方々による、森の案内や専門性を生かしたネイチャーゲーム等を通して子ども達の興味・関心を引き出したい。
- 湯の岳の自然観察を通して、森の中の動植物にふれ、自然の豊かさやすばらしさ、不思議さを味わ わせ、森林や樹木に関心を持たせる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本校の人材リストに登録されている「いわきの森に親しむ会」の方々には今まで、教職員研修や校地内の樹木整備、子ども達への自然観察の仕方の指導等で、定期的に関わりを持ってきた。今回も森の案内人のプロとして、より専門的な視点からの指導支援により、子ども達の活動がより充実するようゲストティーチャーとして講師の依頼をした。

(2)授業の実際

4年生44名を7班に分け、それぞれの班が7名の

「いわきの森に親しむ会」の方々のサポートを受け、4月に湯 の岳の自然散策を実施した。

また、保護者ボランティアを募集して、引率や看護、安全面 への配慮をお願いした。

〈活動から~子どもが感じたものや学んだこと等〉

春の自然、樹木、草花、湯の岳のでき方、きつつき、ネイチャーゲーム、昆虫、いのしし、炭坑、落ち葉と微生物四季ごとの 里山の移り変わり「いわきの森に親しむ会」の方々が、里山の 自然に関する専門的な解説やネイチャーゲーム等を取り入れた りしたので、子ども達の発見や驚きが多く満足度の高い学習と なり、湯の岳の魅力を実感できた。

次の学習への大きな意欲付けとなった。



「いわきの森に親しむ会」 との湯の岳散策

(3)授業をふりかえって

- 緑を大切にすることが自然環境を守ることにつながることがわかった。
- 人や自然に働きかける活動を通して、樹木だけでなく森の動物や生き物の生態、森林と人々のくらしのつながりにまで学習が広げられた。
- 地域素材、地域人材、学校、保護者による、連携・融合が図られた。
- 保護者にとっても自然を体験できるよい機会となった。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 湯の岳での「いわきの森に親しむ会」の方々とのふれあいを、春夏秋冬と四季を通しての体験活動に発展させていく。
- 湯の岳は徒歩可能な位置にある自然のすばらしさを体験できる素材であり、その山荘で活動する 「いわき森に親しむ会」は専門的な知識・技能を持っている。両者がタイアップした環境学習、 森林学習、自然学習のプログラムを開発していく。

教科名(総合的な学習) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「知恵と技の交歓教室」 |
|--------|-------------------------|
| サブタイトル | 〜地域の老人にみなさんと伝承遊びを体験しよう〜 |

1 自校の事業への取り組みについて

地域のお年寄りの方々との交流を深める中で、日常なかなか経験することのない伝承遊びに楽しく 取り組むことができる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

磐崎公民館との連携事業のため、公民館との事前の打合せ、内容・準備物についての確認、当日参加の磐崎地区老人会のメンバーの人数等を把握する。

また、5学年担任との打合せを数回実施し、実施方案等を作成する。

(2)授業の実際

わら細工づくりやお手玉作りは、初めての経験の児童がほとんどであり、興味をもって意欲的に活動することができた。

活動をとおして、普段なかなか接することが少ないお年 寄りの優しさに触れ、お年寄りに対しての親しみや感謝の 気持ちを持つことができた。



わら細工 (縄ない)

(3)授業をふりかえって

わら細工やお手玉づくりをとおして、伝承遊びに触れることができ、伝承物の良さに喜びやすばら しさ、お年寄りの優しさを感じることができ、普段の授業等であまり体験できない、感謝の心や思い やりの心の育成になった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

男子も女子も、わら細工やお手玉づくりに大変興味を示し、次年度からも継続し、地域のお年寄り との交流を深め、豊かな心や思いやりの心の育成に努めたい。 教科名(生活、総合) 実施学年(第1~6学年)

| タイトル | 「藤原校一日入学」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~ 地域の高齢者との交流を通して ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

児童が高齢者とのふれあいを通して、高齢者のもっている技能を学び、体験するとともに豊かな人間性を養う。

- ② 高齢者の社会参加に貢献するとともに、高齢者に現行の学校教育について理解を深めてもらう。
- 2 実践授業について
- (1)授業計画にあたって
- ① 青少年育成市民会議藤原支部長、藤原公民館長、藤原老人クラブ会長に学校に来ていただき、校 長、教頭、担当者と事前打ち合わせを持ち、事業のねらいを確認し、授業内容について話し合った。 多くの高齢者が参加できるよう、藤原町区長、釜ノ前地区自治会長を通して学区の全戸に事業 の案内を回覧した。
- ③ 授業のねらいが達成できるよう、授業内容を計画した。

(2)授業の実際

昔遊び(1年生)

児童がグループに分かれ、けん玉、コマ、竹とんぼ、 おはじき、お手玉などの昔の遊びを、高齢者と一緒に行った。児童と高齢者がひざをつき合わせ、楽しむ姿が見 られた。

縄もじり (4年生)

高齢者に稲のわらを使って、縄もじりのやり方を教えてもらった。完成した縄をつないで、長縄跳びをして楽しんだ。児童は、初めのうちはできなくても、手を取って教わるうちに、少しずつできるようになり、驚いていた。



高齢者に縄もじりの手ほどきを受ける児童

(3)授業をふりかえって

地域の高齢者との交流を行うことによって、子どもたちに思いやりの心が育ってきた。

教職員に地域の教育資源を積極的に授業に取り入れようとする雰囲気が高まってきた。

③ 地域の方々も学校の教育活動をより深く理解し、子どもたちを地域で育てていこうという意識が 高まってきた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

授業のねらいの達成に向け、授業の内容や進め方について、事前に関係団体と十分に話し合いを持つことが大切である。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1学年)

タイトル 自分たちの住んでいる地域を知ろう

サブタイトル

|~湯本は私たちに何を教えてくれるのか~

1 自校の事業への取り組みについて

本校は、温泉と炭鉱で栄えてきた歴史的背景があり、まちづくりやヘジテージツーリズムの分野で活躍してきた地域の先輩を講師に招くなどして、地域理解を深める学習を設定した。また、先輩方の生き方に触れ、これからの生き方や進路に対する関心を高めさせることをねらいに学習計画を作成した。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本実践では、地域のまちづくり機関であるじょうばん街工房21と常磐炭田史研究会に協力を依頼した。事前の打ち合わせでは、温泉や炭鉱に関する諸施設を巡って説明していただくことと生徒たちの生き方や進路に結びつくような人生談を話していただくことの2点をお願いした。

(2)授業の実際

- ○全体講演会「湯本町の歴史とこれから」
- ○学級内講演会・巡検
- 1組「閉山と炭鉱会社(娯楽施設の設立)」
- 2組「閉山と炭鉱労働者(人生の岐路)」

湯本病院:炭鉱病院の看護師の経験談 温泉会社タンク前:炭鉱と温泉の関係

山神社:神社(目的,行事等)の由来 六坑園:六坑の由来や入山の様子

3組「炭鉱と商店」

つるの足湯:足湯設置の経緯

裏町界隈巡検:寺亀醸造,三函座,野口雨情童謡館

4組「湯本温泉と旅館経営」

一番町・桜木町・中央通り、温泉神社

○映画「フラガール」視聴 (解説付) ○一枚新聞, 礼状の作成

(3) 授業をふりかえって

生徒たちが作成した一枚新聞には、「湯本の歴史が分かって、みんな頑張って生きていたことがわかった」「温泉が出なくなった時期があって苦労した」「炭鉱のしくみや地下がどうなっていたかよく分かった」「命がけで働いていたからこそ人との絆が強かったのだと思う」「フラガールの後ろに石炭を掘るお父さんの姿があった」「映画フラガールの見方が変わった」などの感想が見られた。地域理解がいっそう深まり、温泉を生かしたまちづくりの歴史や苦労、炭鉱経営あるいは労働者としての充実した生活の様子や苦しさなどを実感できたことがうかがえる。

3 自校の取り組みの充実に向けて

本実践は、子どもたちに地域のことを語り継いでいきたいという地域の先輩方の思いをもとに取り組むことができた。本校は、職場体験や地域の行事への参加など、地域と連携することが多く、今後も事前に十分な打ち合わせをもち、ねらいを共有して実践していきたい。



教科名(創意) 実施学年(全学年)

| タイトル | 子どもの健全育成のために |
|------|--------------|
|------|--------------|

サブタイトル ~ 薬物乱用防止教室~

1 自校の事業への取り組みについて

近年、薬物による犯罪被害が多くなっている。人気女優が薬物使用しマスコミに騒がれたのも記憶に新しい。薬物についての理解を深め、薬物の使用の怖さを低年齢のうちに植えつけるのは、今後健康な生活を送る上で大切なことになってくると考えられる。そこで、本校では薬物乱用を防ぎ、健康な生活を送るために、学校薬剤師と連携して、薬物乱用防止教室を行った。

2 実践授業について

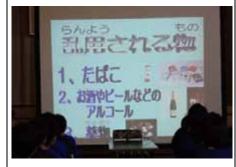
(1)授業計画にあたって

主に養護教諭が計画の立案にあたり、学校薬剤師と薬物乱用防止教室の内容について連携を深めながら授業計画を立てた。授業前に2回、薬剤師と養護教諭の間で打ち合わせがもたれ、重点内容の確認を行った。中学生の健康面で心配されることは飲酒、喫煙の問題である。この二つが薬物依存の危険性と無関係ではないということを認識させるねらいもあり、飲酒、喫煙の問題も重点的に取り上げてもらう配慮をした。

(2) 授業の実際

授業の中では、保健委員の生徒が司会・進行を行い、学校薬剤 師がコンピュータのスライドショーを用いて、薬物にはどんなも のがあるのか、また薬物の本当の怖さにどういうものがあるのか などの説明があった。

昨年も同じ学校薬剤師により薬物乱用教室が行われたが、2,3 年生のために、昨年とは違う内容を工夫し、専門的で分かりやすい内容の授業であった。特にスライドショーの映像には、普通の 生活では見ることのできないドラッグの映像や、薬物依存で文章 を書けなくなった人の手紙の映像などがあり、生徒は薬物につい て理解を深め、その怖さを専門的な立場から説明されたため説得 力があった。



薬物乱用教室の様子

(3)授業をふりかえって

薬剤師の方のスライド資料から、生徒たちは視覚に訴える形で薬物の怖さをよく理解できたようである。特に重度の薬物依存で小学校低学年程度の文章しか書けなくなってしまった成人患者の手紙は、衝撃的だったという内容の感想が多く書かれていた。また、アルコールやたばこの摂取から薬物依存に発展するケースが多くあるという説明が生徒たちにとって印象深かったようで、ねらい通りアルコールやたばこの危険性の認識も促すことができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

生徒の実態をよく把握している養護教諭と、学校に身近である学校薬剤師がうまく連携し、生徒がこれからの生活を健康でかつ安全に過ごすための大切な知識を身につけることができる授業になった。

今後とも性教育講座など健康面において、外部機関の専門的な知識を生かして連携できるような授業実践の積み重ねをしていきたい。

教科名(美術) 実施学年(第1学年)

| タイトル | 「森林学習を通して環境問題を考える」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~ 自然に触れる「木彫」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校1年生は森林環境学習推進事業の指定を受け、総合の時間を活用して森林環境学習を実施 し、田人中学校学校林の除伐体験も行った。その学習と連携して、地域在住の彫刻家である伊藤 祐一さんのご指導を受け、木彫に取り組んだ。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本校は美術の専門教員がいないこともあり、以前より学校近隣にお住まいの伊藤祐一さんに美 術の彫刻分野のご指導をいただいている。平成 21 年度は森林環境学習と関連させることで、よ り深い木材に対する理解の上での授業ができた。

(2)授業の実際

森林環境学習を通して森林について学び、田人中学校の学校林除伐体験を終えた後での授業だったので、木材についての理解の上に立って授業に取り組むことができた。

木材の特徴について理解し、彫刻刀の使い方について講師の先生の指導の下、どの生徒も熱心に「刻字」製作に取り組んだ。

(3) 授業をふりかえって

生徒にとっては専門家の先生が指導に当たってくれることで、意欲の向上が見られた。学校と しても指導方法を学び効果的であった。地域の方が中学生を指導してくれることで、中学校の様 子を地域の方々に理解していただくことができ、成果があった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今年度は森林環境学習との相乗効果で、木彫に対する生徒の興味関心がいつもより高く、熱心に製作に取り組むことができた。次年度以降は、地元に残る常磐炭鉱の遺跡などを有効活用して 社会科の授業でも学社連携事業を進めていきたい。

また、そのための地域の人材発掘に努めていきたい。

教科名 (総合) 実施学年 (第2学年)

| タイトル | 「自分と社会を見つめて」 |
|--------|--------------------------------|
| サブタイトル | 「上級学校で学ぶ意義を見いだそう」~高校の出前事業を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

上級学校の先生方を招いて、授業を行うことで生徒たちに将来の進路選択への意識を高める とともに、実際の高校の先生方の授業と現在中学校で行っている授業との関連性を体得し、こ れからの学習への意欲を向上させることを目的とする。

2 実践事業について

(1)事業計画にあたって

- ① 教頭による関係高等学校への講師派遣依頼。
- ② 2 学年総合学習担当による質問事項・準備物・受講生徒数(名簿)の確認。
- ③ 2 学年総合学習担当による礼状の作成・発送および学習内容のまとめ学習(レポート作成)。

(2) 事業の実際

6つの上級学校(磐城高校・湯本高校・磐城農業高校・いわき光洋高校・いわき総合高校・福島高専)の先生により、6つの講座(英語・数学・農業・社会・演劇・理科)を開設し、生徒の興味・関心に応じてそれぞれ20~30名のクラス分けを行う。約50分間でそれぞれの講座を受講し、その後、約30分間で高校の特色や部活動、高校生活などの質疑応答を行う。初めのうちは緊張した雰囲気であったが、講座が進むにつれ生き生きと活動することができ、質疑応答においても活発に行われ生徒にとって充実したものになっていた。



磐城農業高校の授業風

(3) 事業をふりかえって

生徒にとって初めて高校の先生との交流であったため、高校の様子なども聴くことができ、 これからの進路学習に対する意欲の高まりが見えた。また、講座終了後も他の講座の生徒とお 互いの授業内容や高校の特色などを話し、情報交換をする様子も見られ高校進学への興味が喚 起された様子がうかがえた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

教室数や生徒数、高校側の学校事情なども勘案しなくてはならないが、生徒の興味関心に応じた講座の増設(例えば工業科・商業科・水産科等)もできれば更に充実した事業になるものと思われた。また、家庭や地域からの意見なども取り入れながら、今年度の反省を生かし、より良い事業の展開を目指していきたいと考えている。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「豊かな心をはぐくむ食育活動」 |
|--------|------------------|
| サブタイトル | 〜磐城農業高校との連携を通して〜 |

1 自校の事業への取り組みについて

- (1)食育活動について
 - 自然とのふれ合いが少ない子どもたちに、土にふれる喜び、植物の育ちを見る喜びや収 穫する喜びを味わわせ、食に対する興味・関心を高めることができる。
- (2) 連携について
 - 農業高校の指導を直接受けることによって、小学校では教わることができない専門的な 技術や技能について学ぶことができる。
- 2 実践授業について
- (1) 授業計画にあたって
- ① 平成21年3月

磐城農業高校と本校教諭の打ち合わせ

② 平成21年4月~平成22年2月 栽培・収穫・調理実習

③ 平成22年2月

本年度の反省

- ※ 渉外は、両校長の指示のもと、主に体験活動コーディネーター(小学校)と食物科担当教 諭(高校)の間で綿密に行われた。
- (2)授業の実際
- ① なす、ピーマンの栽培・収穫・調理

6月、右掲のように高校生の指導のもと、なす、ピーマ ンの苗を植えた。7月に収穫し、野菜カレーを作って食 べた。子どもからは、「ピーマンは苦手だったけど、 自分で作ったピーマンだと思うとおいしく食べること ができた。」との感想が聞かれた。

② カボチャの栽培・収穫・調理

6月、カボチャの苗を農業高校の畑に植えた。9月に 収穫し、給食センター出荷した。同月、勿来地区の小中 学校の給食として「カボチャポタージュ」が出された。 「ぼくたちの作ったカボチャが給食として出されるな んて夢みたい。みんなに喜んでもらえてうれしい。」 との声が子どもから出ていた。

③ 大豆の栽培・収穫・調理

6月、大豆の苗を植えた。11月に収穫し、2月に農業 高校生の指導のもと豆腐づくりに挑戦した。「自分たち で作った大豆が豆腐になるなんて驚いた。高校生のお兄 さんにやさしく教えてもらったからできた。また、

いろいろ教えてほしい。」などの感想が見られた。



【高校生の指導で苗植え】



【高校生と豆腐づくり】

(3)授業をふりかえって

- ① 子どもたちは、磐城農業高校生との食育に関する連携を通して、栽培の大変さや収穫の喜び を味わうなど「食」に対する意識を高めることができた。
- ② 小学校としては、農業高校と連携することによって、専門的な技術や技能を教えていただき 指導の幅を広げることができた。
- ③ 連携先の農業高校としては、高校で学んだ技術や技能を小学生に教えることで、「生きた知 識として定着を図ることができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 体験活動推進のためのよりよい体制づくりが必要になる。

| タイトル | 「地域の名人を探そう」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~ 伝統工芸「組小細工」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

よさに気づくことができる子どもを育てるため。

地域に興味を持ち、自分の課題を見つけ、追求していくことで、自分たちが住んでいる地域の

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

日ごろ見過ごしてしまいがちな、学校前にある作業場、何をしているところなのかを疑問に持

った児童の発言をきっかけに、全体へ広め興味を持たせるようにした。

(2) 授業の実際

- 自分たちの近くに、こんな仕事をしている人がいたこと、 趣味が仕事になったことなど、子どもたちに夢を与える ような話を聞くことができた。
- 事前に準備しておいた質問にも快く答えていただき、まとめの新聞作りにも役立てることができた。



作業を真剣に見守る子どもたち

(3)授業をふりかえって

- 「こんな身近に名人がいた」と、子どもたちが地域に目を向けるよい機会となった。学校と しても、人材発掘になり次回からも協力をいただけるようになった。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- さらに地域のよさに目を向けさせるために、地域の人材等の収集に努力して生きたい。

教科名(理科) 実施学年(第6学年)

| タイトル | 「地域企業が有する専門性を生かした理科の発展学習」 |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~ 身の回りにある水溶液の性質を調べよう ~ |
| | (株) クレハによる出前授業から |

1 自校の事業への取り組みについて

(株) クレハは本校の学区内(錦町)にあり、大規模な化学工場を持つ会社である。(株) クレハによる本校への出前授業は、今年で11年目を迎え、伝統的な取り組みとなっている。毎年、第6学年児童を対象に理科の発展学習として実施され、前年度の反省を基に、児童にとってさらによい授業となるよう見直しを行い、毎回工夫された内容となっている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

(株) クレハの出前授業担当者および本校の担当職員による打合せを重ね、これまでの児童の既習事項の確認や当日の授業の内容やタイムテーブル、双方の準備物(PC・スクリーン・実験器具・材料等)、児童の座席表(氏名の確認)、そして安全面での配慮等々、細かな内容の確認を行い当日に至っている。

(2) 授業の実際

~ 身の回りにある水溶液の性質調べよう ~

児童は、これまで理科の授業において、「リトマス紙」 を用いた水溶液の性質の調べ方を学習し、「酸性」「中性」 「アルカリ性」に分けられることを学んでいる。

その発展学習として、今回は自宅から児童が各自持ち 寄った様々な水溶液の性質を「ユニバーサル試験紙」「p Hメーター」「BTB溶液」などを用いて水溶液の性質 調べを行った。

各実験グループに講師の方が付き、実験器具の使い方 等、細かな指導を受けながら、児童たちは生き生きと実 験に取り組んでいた。



「pH メーター」で水溶液の性質を調べよう

(3)授業をふりかえって

児童たちは、紙の色の変化で水溶液の性質の強弱が分かることや、数値で表せることなど新たな発見に驚いていた。また、自分が持参した水溶液には様々な性質があることを理解していた。 今回の授業は、理科の発展学習としてとても有意義なものであった。

地域にある企業が有する専門的な知識を小学生のレベルに合わせて授業を提供していただいたことに感謝している。

3 自校の取り組みの充実に向けて

(株) クレハによる出前授業は、本校の伝統的な取り組みとして今後も継続していきたい。 また、新たな連携・融合支援先の発掘に努力し、学校と地域社会との結びつきを深めていきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「昔遊び」・幼小連携「昔遊びをしよう」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | |

1 自校の事業への取り組みについて

・老人会の方々を昔遊びの講師として招き、昔遊びのやり方、きまり、遊び方、コツ、裏技等を 教えていただく中で交流する。そして、自分たちが教えてもらった昔遊びを幼稚園児に教える 中で交流する。昔遊びを通して、年長者と自分よりも年下との交流する楽しさを味わう。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

・年度始めに幼稚園との計画の打ち合わせをした。次に老人会会長に連絡し昔遊びについて興味 のある方々を15名集めていただいた。指導と共に給食も試食していただいた。幼稚園とは、 事前に密に連絡を取り合って準備を進めた。

(2) 授業の実際

- ・年度始めに幼稚園とねらいや目標、大まかな活動内容について話し合い、計画を立てていたので、見通しを持って授業を展開することができた。
- ・老人会会長に子どもが好きで昔遊びに堪能な方々を集めていただいたので、余裕を持って楽し く指導していただいたとともに、給食も児童と試食していただき和やかな交流をできた。
- ・幼稚園児には、教える立場として自分が教えてもらったときのことを振り返りながら、優しく 親身に教え、楽しく交流していた。

(3)授業をふりかえって

- ・子ども達にとって昔遊びのおもしろさが分かり、昔遊びについてさらに興味・関心が高まった。
- ・老人会の方々も昔遊びでの交流や給食試食を通して、自分が子どもの頃の話や交流した子ども との楽しい会話で、現代の子どもや学校の様子について理解を深めていていただくことができ た。
- ・自分が教えてもらった昔遊びを幼稚園児に自信を持って得意気に楽しく教えることができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ・目標やねらいを共有し、常に課題意識を持たせて授業を共同で展開していくことが重要である。
- ・もう少し余裕を持って、計画的に、継続的に実施する。
- ・事前準備や団体との連絡調整をもっと密にして推進していく必要がある。

教科名(総合) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「地域を見つめ、自分を育て、未来を考えよう。」 |
|--------|-------------------------|
| サブタイトル | ~ 「稲を育てよう」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校は、周囲を田畑に囲まれた豊かな自然環境の中にあるが、児童のほとんどは農業体験をしたことがない。社会科の米作りの学習に合わせて実際に米作り体験をさせることにより、収穫の喜びや苦労を味わわせるだけでなく、自然環境や食育等についても学習できるようにした。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

4月、5学年主任を中心に、米作り指導をしてくださる講師の方と1年間の学習の進め方について話し合い、田植え、除草、稲刈り、脱穀、収穫祭等の体験学習の実施日や方法について見通しをもって学習を進めた。(体験学習の前にも確認の話し合いを持つように連絡を取り合った。)

(2)授業の実際

130名の児童のほとんどが、田植えや除草、稲刈り等は初めての経験であり、何もかも新鮮であった。作業そのものも慣れないことが多く、講師や保護者、担任に指導を受けながらの体験学習であった。しかし、時間が経つにつれて上手に作業できるようになり、米作りの苦労や喜びを味わうことができた。



田植え

(3)授業をふりかえって

児童の感想を読むと、米作りの苦労や喜びばかりでなく、田んぼの周りの小さな生き物、例えばどじょうやザリガニなどが棲んでいることを実際に見ることができた驚きなどが生き生きと 書かれていて、心に残る体験学習になった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

米作り体験は5年生で学習したが、地域の身近な環境については、低学年から系統的に各学年に位置づけることにより、より効果的に学習できると考える。また、田植え、除草、稲刈り、脱穀と限られた時間の中での学習であったが、できれば、苗を育てるところや、田んぼに苗を植えてからの成長過程なども詳しく観察させられれば、より深い学習になるのではないかと考える。

教科名(社会科・総合的な学習) 実施学年(第6学年)

| タイトル | 「和心~豊かな心を育む営み」 |
|--------|------------------------|
| サブタイトル | ~日本の文化にふれて「茶道の心」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

6年社会では、現代に受け継がれる日本の文化として、茶道や能などを取り上げている。子ども達は、身の周りにこのような500年以上も前の文化が受けつがれていながらも意識することは少ない。刻々と移り変わる社会の中で不変の「和の心」を地域の茶道クラブの協力を得て考えさせていきたい。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

勿来公民館事業の一環として、勿来茶道クラブの協力を得て本授業を計画した。

折衝・渉外にあたっては、公民館が窓口となり、学校と協議を重ね、計画・準備を進めた。 なお、児童には、授業等で事前に室町時代の文化についての復習をさせておくなどの準備をし た。

(2)授業の実際

- ○大半の児童が初めて茶道に接するということで緊張の中での活動となった。作法等について細かく クラブの方からご指導があり、伝統的な文化に触れるよい機会となった。
- ○活動班を3班に分け実施
 - 茶を点てる
 - ② 運び方
 - ③ もてなす

この一連の活動を通して、相手を「もてなす」一 服の意味に触れることができた。



「茶を点てる」活動

(3)授業をふりかえって

○今回、公民館や茶道クラブの協力を得て、相手を心からもてなす「茶の心」の一端に触れることができた。子ども達にとっては、初めての経験であり、堅苦しい作法の中にも落ち着いた雰囲気の中で、心から相手をもてなすことの意味について考えることができたようである。授業後、「一期一会」の掛け軸を見て、感慨深げな顔をしている子ども達の姿が印象的であった。地域の茶道クラブの方々も子ども達と触れ合う中で文化を伝承することの大切さを実感していたようである。

3 自校の取り組みの充実に向けて

○この茶道教室は、公民館・地域サークル・学校の連携により毎年行われてきている事業である。6学年にとっては、社会科の歴史で学習する内容を実体験できる貴重な学習でもある。教科の枠を外し、総合的な学習との関連を図りながら学習を進めていくことで、より広がりのある学習になることが期待できる。学校だけでは困難な課題の解決に向けて、今後も積極的に地域の教育力を活用していきたいと考える。

教科名(理科) 実施学年(第6学年)

| タイトル | 「クレハ理科授業」 |
|--------|-------------------------------------|
| サブタイトル | ~いろいろな道具で水溶液の性質を調べよう~ ~液体窒素を使おう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

ねらい

○企業との合同授業を実施することで、専門的な知識や技能を有するクレハ職員の支援を受け、多様で充実した授業(体験活動)を実施する。

2 実践授業について

- (1)授業計画にあたって
 - ①第1回事前打ち合わせ・・(授業の概要・日程調整) クレハ職員、6年担任
 - ②第2回事前打ち合わせ・・(授業案・準備物・日程の確認) クレハ職員、6年担任
- (2) 授業の実際
 - ①事務局挨拶·講師挨拶·日程確認
 - ②水溶液の性質について
 - ③ドライアイスの実験
 - ④まとめ・質問タイム

【児童の反応】

・授業の内容がわかりやすいこと、身近な素材を 活用し具体的な体験を通してわかることができるの で、児童の興味関心は高まっていた。



沈まないシャボン玉

(3)授業を振り返って

【感想・効果等】

- ・児童・・身の回りの溶液を酸性・中性・アルカリ性などと仲間分けができた。 これからの生活に役立ちそうな実験ばかりだったのでおもしろかった。 溶液の表し方や難しい記号など中学の勉強に役立つと思いました。
- ・学校・・複数の指導者、きめ細やかな準備があり、授業の発展学習として効果が得られた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ・理科における児童の興味・関心を十分に満たすことのできる企画である。しかし、楽しさだけの 授業ではなく、子どもたちの気づきを大切にした達成感のある機会となるように、支援企業との打合 せを十分に行い、取り組んでいきたい。

教科名(総合) 実施学年(第4学年)

| タイトル | 「福祉について考えよう」 |
|--------|---------------|
| サブタイトル | ~ 点字体験の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

2学期に、子ども達は国語の単元「伝え合うということ」の学習において、点字について学習している。ここでは、何らかの障がいを持った人々も健常者と同じように前向きに生活していることに気づいている。また、障がいを持つ人のために私たちにできることはなにかを考えさせてくれる内容でもある。

本単元では、このような機会をとらえ、実際に点字や手話、盲導犬に接する機会を設けることで、より福祉を身近な問題としてとらえ、共生を考えていくうえでのきっかけになるような展開としていきたい。特別な人に対する特別なことではなく、自分たちが暮らしている日常生活の中にあるということを知り、自分の年齢にあった福祉活動ができるようにさせたい。また、それが学校生活にも反映されるようにする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

活動計画 (総時数10時間 1月~2月)

- ○点字を知ろう(準備)・・・・・・ 1時間 ○点字を知ろう(点字体験学習)・・・・・2時間
- ○手話を学ぼう(手話体験学習)・・・ 2時間 ○盲導犬について知ろう(準備)・・・・・1時間
- ○盲導犬について知ろう(盲導犬体験学習)2時間○点字・手話・盲導犬についてまとめよう 2時間

(2) 授業の実際

ゲストティーチャーのお話から、点字はどのようにできている かその仕組みと成り立ちを知るとともに、点字を必要としてい る人がどれくらいいるのか概要をつかむ。

点字で本を作るのにどれくらいの労力がかかるか、点字を刻む 体験作業を通して実感する。

覚えた点字をもとに短い文章を作り、点字への興味を喚起するとともに、点字を必要とする人に対して共感的な理解をもつ。 この授業を通して、障がい者とのノーマライゼーションを確立するための一歩とすることができた。



点字で自分の名前を刻む

(3) 授業をふりかえって

エレベーターやお札、公衆電話などにある点字に対して、初めて認識した子が多く、改めて点字が生活に身近なものであることを理解することができた。

現在でも点字図書はまだまだ不足していること、点字図書の製作はボランティアの人々の努力によって支えられていることを知り、改めて福祉について考えるよい機会となった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

さらなる学校の教育活動の充実に向けて、地域人材バンクの整備を進めていきたい。

福祉について、単なるイベントとしてではなく、年間を通して継続的に学習できるような単元構想を 工夫していきたい。 教科名(総合) 実施学年(第5・6学年)

| タイトル | 「地元食材を生かした食育(地産地消)」 |
|--------|------------------------|
| サブタイトル | ~ 米飯給食モニター校実践事業の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

児童が郷土の自然・食文化について理解を深めることが、郷土を愛することのできる児童の 育成につながるとともに、飽食の時代といわれる昨今、生産者との交流を深めることにより、 食への感謝の気持ちを育むことができる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

地産地消の推進ということもあり、学区内の地元農家や近隣の漁港に授業者と栄養職員が訪ね、生産者との打合せを進めた。その際、いわき農林事務所から生産者の紹介をいただく。

(2) 授業の実際

地元農家で給食食材の提供者の方を講師として招聘し、野菜作りでの苦労についてお話を伺 う。土作り、苗の選択、安定した収穫量等、色々な工夫をしていることを児童は知る。「他の人 に食べてもらう」というのは、野菜を通して「この人の作る野菜は安全だ」という信頼感まで もやり取りされていることに驚いていた。

地元漁業協同組合の方を講師と招聘し、実際に使用している針や網を見せていただきながら、 魚を取るための工夫についてお話を伺う。児童は初めて知ることばかりで興味津々。身近な漁 港での工夫を知り実感として捉えられたようだ。

学習後、話に出てきた食材を使っての給食をいただく。

(3) 授業をふりかえって

学校給食を通して、食料自給率や食の安全について、または、地元漁業の現状等の貴重な学習を行うことができた。地域とのつながりについても、食を通して深まりと広まりがあった。 何よりも子ども達が給食の食材から自分達の食を見つめなおすことができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

自校給食であるため、栄養職員と学級担任による食育に関する授業や取り組みが、行われている。さらに、生産者との交流を取り入れた授業を展開し、食に感謝する心や郷土を愛する気持ちを育成していくとともに、子ども達を通じて家庭での食への関心を高められるよう努めていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「福祉体験活動」 |
|--------|----------------------------------|
| サブタイトル | 手話体験・インスタントシニア体験・盲導犬体験・点字体験をしよう。 |

1 自校の事業への取り組みについて

地域に根ざした福祉サークルや、福祉活動に携わる方々からのご指導や交流を通して、私たちが住む地域の福祉活動に対する理解を深め、実践意欲を養う。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

各団体や講師との日程がなかなか合わずに苦労した。また、打合せの時間も十分とれずに、学校と講師との意思疎通が十分に図れないままの授業となってしまった感がある。そんななかでも 懸命に指導してくださった団体・講師の皆さんには、とても感謝している。

(2)授業の実際

それぞれのコースで、生徒たちはたいへん興味を持って 真剣に取り組むことができた。手話や点字の体験を通して 新たな世界を知り感動した生徒、インスタントシニア体験 や盲導犬と二触れ合いで、老人や障がい者への理解を深め た生徒と、大きな収穫のあった授業であった。



手話を学ぶ

(3)授業をふりかえって

- ○生徒たちは一様に「とても勉強になった」「新しいことを知ることができ、うれしかった」「これから自分が何をすべきか気づいた」等の感想を持ち、おおきな成果が感じられた。
- ○講師からは「生徒たちが一生懸命取り組んでくれるので、楽しかった」との言葉をいただいた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- ○今後はコースを拡大するなどして、より大きな効果をあげられるよう、工夫した計画案を作成 したい。
- ○2学年で実施予定の職場体験学習との関連性を図りながら、効果を高めていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル 親一 | 子体験活動 |
|---------|-------|
|---------|-------|

サブタイトル ~ 地域とともに学ぶ 地域で子どもを育てる ~

1 自校の事業への取り組みについて

「開かれた学校づくり」の一環として、保護者の方々に学校及び生徒の様子を参観いただき、本校の 学校経営について理解を得る。

地域の方々や親子での活動、作業等を通して「絆」を深める。

家庭や地域の人々の協力を得ることにより、連携を深める。

2 実践授業について

(1) 指導計画にあたって

- 6月・・・係顔合わせ、実施計画審議、活動種目の決定、各講師への依頼開始
- 7月・・・講師派遣依頼文書の発送、参加種目決定のためのアンケート実施・集約
- 8月・・・担当教師と講師との事前打合せ、2回目のアンケート実施・集約
- 9月・・・参加種目の保護者への通知、各種活動の準備・活動

(2) 授業の実際

実施月日 平成21年9月12日(土)

日 程

1 校 時 授業参観

2~4校時 コース別親子体験活動

5 校 時 普通授業

活動の様子

当日は雨のため、外での活動(ソフトボールやテニスなど)ができなくなってしまった。

今年度、新しく取り入れたフラダンスは、保護者・生徒ともに好評であった。

事後アンケートの結果(来年度も参加したい約74%) からも、継続を望む声が多かった。



茶道教室

(3)授業を振り返って

◎生徒

親と一緒というのは少し恥ずかしかったようだが、ふだんなかなかできない体験をすることができ、とても貴重な経験となった。

◎地域・保護者

親子で作業をともにすることの大切さをあらためて感じたようだ。その中で、子供同士のかかわりや、他の子供、他の親との会話を持つことで、ふだん見られない事柄を親子ともに見出せた。

◎学校

多くの参加者を得たことにより、学校内の様子を理解していただけた。また、諸活動を通し、外部 講師や父母との触れ合いをすることにより、学校・家庭・地域との関係が深まった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

来年度、生徒数が増加することによって、参加者数が増加することが予想される。それにともない、活動場所の確保、雨天時の対応、人数の調整、新たな活動種目の開拓など、改善が必要な事項が多い。 しかし、地域との連携を図る絶好の機会なので、今後も継続していきたい。

さらに、実施方法などをマニュアル化することで、教職員が入れ替わっても、スムーズに実施できるようにしていきたい。

実施学年(全学年)

| タイトル | 「錦公民館まつり」への参加協力 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | 〜錦公民館祭り〜 |

1 自校の事業への取り組みについて

- 昨年度より公民館からの依頼を受けて、吹奏楽部が演奏会を行っている。
- ・ 美術部員が、例年ボランティアとして当日お手伝いに参加している。
- ・ 国語科、美術科で制作した作品を展示協力している。

2 実践授業について

- (1)授業計画にあたって
- ・錦公民館長さんの計画に従って、学校が協力している。
- (2) 授業の実際
- ・ 吹奏楽部の演奏(ミニコンサート)
- ・ スタッフの一員として、会場内でのお世話(美術部員)
- ・ 国語科作品の展示
- ・ 美術科、美術部員の作品展示

(3) 授業をふりかえって

- 吹奏楽部の生徒は演奏の機会を与えていただいたことはよかった。
- ・ 当日(例年寒い時期の実施であるが)は特に気温が低く、会場の暖房もない中での演奏で、 十分な演奏ができなかったことが残念である。来年度は控え室も準備していただけるとあり がたい。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- ・教科学習での作品を展示発表する形での参加協力を今後も継続していきたい。
- ・公民館との連携を密にして来年度も進めて行きたい。ただ、吹奏楽部の参加については、生徒 の健康面も含めた受け入れ態勢の充実をお願いしたいところである。

教科名(総合) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 福祉について考えよう。 |
|--------|----------------------|
| サブタイトル | 福祉についてワークショップ形式の授業から |

1 自校の授業への取り組みについて

10月に毎年行なわれている福祉体験学習に向けて、生徒の興味・関心に合わせて

福祉についての知識や技能を深めること。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

ゲストティーチャーの活用をはかるために、勿来社会協会へ協力を依頼した。

手話や盲導犬、車椅子体験でゲストティーチャーを招いて、体験活動を行なった。

(2) 授業の実際

それぞれの班ごとにワークショップ形式で時間を区切っての発表を行なった。自分たちの班が発表のとき以外は、それぞれの関心に合わせて、他の班の発表を見学した。発表に対して評価・感想カードを記入し、事後の指導へいかした。

(3)授業をふりかえって

授業参観時に行なったことから、保護者や地域の方々の参加も見られ、生徒たちの発表にも力が入った。当日もゲストティーチャーを招いて発表の補助をして頂いたり、生徒と外部との交流も生まれるきっかけとなった。

3 自校の取り組みの充実に向け

福祉活動を通して、これからの福祉に興味関心を持ち、社会全般について考えさせられた授業であった。また、地域の方々がどのようにして貢献しているか感じ得る授業であった。

今後とも地域福祉活動に理解を深めさせたい。

教科名(学級活動) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「命の大切さを考える授業」 |
|--------|----------------------------|
| サブタイトル | ~ 交通被害者の声 交通事故で最愛の娘を奪われて ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

ねらいとしては、実際に大切な家族を交通事故で亡くした経験を持つ講師の先生にお話をいた だき、家族を失う悲しみと家族の大切さを再認識する機会となるように設定した。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

福島県警察本部より、いわき南警察署を通して本校に依頼があり、実施日等の詳細については、 担当のいわき南警察署警務課との連絡調整を図った。

(2)授業の実際

命の大切さを考える授業

11月11日(水)に、福島県警察が進める「被害者に優しい人づくり事業」の出前授業が、本校生徒を対象に行われた。

平成15年5月、当時6歳の長女を大型ダンプに轢かれて亡くすという悲しい体験をされた佐藤清志さんを講師にお招きし、講話をいただいた。

生徒たちにとって、家族を失う悲しみや家族の大切さを再認識する上で、大変有意義な時間となった。



講演会の様子

(3) 授業をふりかえって

生徒にとって、学校では学ぶことができない、実体験に基づく貴重な講話をいただき、有意義な時間となった。また、教職員の中には、講師の先生と同じ年頃の子どもがいる者もおり、共感しながら聴き入っていた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

様々な専門的分野の方からの講話や体験活動を通して、生徒の興味・関心を高め、主体的な学 習態度の育成に努めたい。 教科名(総合学習) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「豊かな森林環境の恵みに感謝しよう」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~ 間伐材をわたしたちの生活に ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

森林環境学習の一環として、自分たちの郷土を理解し森林環境を守り育てていく意識をたかめてい く活動として位置づけた。間伐材を利用して、学校に配置するベンチ(縁台)を製作し、自分たちで 活用できるようにした。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

昨年度の活動を踏まえ、「間伐材木工教室」と銘打って、いわき森林組合の加工センターに材料となる間伐材の手配(購入)と講師をお願いした。当日は、加工センターから2名の講師が同行し、森林と間伐の関係の講義とベンチの作り方の指導を頂いた。

(2)授業の実際

3年生単学年で実施したので、製作にあたってグループ間で協力し、ものが出来上がっていく過程を楽しみながら活動していく様子がうかがえた。また製作にあたっては、活動を進めやすいようドリルを使わずくぎのみで作製できるように配慮いただいた。

活動を通して、ベンチが完成した喜びとその材料となった間 伐の役割を学び、改めて森林環境の保全の大切さを理解するこ とができた。



ベンチ組み立ての様子

(3) 授業をふりかえって

生徒達は、製作を伴う活動であったため楽しんで取り組むことができた。この活動は、材料の準備や製作の補助を含め、森林組合の協力があってこそ実現できるところである。昨年度のプランター、今年度のベンチと学校生活の中で活用される場面があり、活動として有益であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

当活動は、指定を受けている森林環境学習の一環で行った。予算措置があり、活動目的から講師の 選定や依頼が進めやすかったが、独自で計画する際には困難な点が出てくる。地域の特色を生かして 有益な活動ができるように、活動と共に講師の選定を予め計画しておかなければならない。 タイトル「のぞみ保育園との交流」

サブタイトル 第一回 仲良く遊ぼう 〈マット運動、紙飛行機作り〉

1 自校の事業への取り組みについて

全校生7名の小規模学校であるため、人と接する機会が少ない。そのため、本校の総合的な学習の時間 の指導目標である『豊かなかかわりの体験を積み重ねることを通して、自分の身近な人や自然、事象に適 切にかかわっていくことができるよう

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

年度末、本校の総合主任の先生及びのぞみ保育園の園長とおおよその日程を組み、1回目は白水小児 童が保育園を訪問し、2回目は、のぞみ保育園の年長児童が訪問することに決まる。

内容については、1回目が保育園で原案を立て、2回目は白水小が立てる。詳しい内容については主 に電話連絡で行うようにする。

(2) 授業の実際

今回は、体操の先生と地域ボランティア「紙 飛行機をとばそう会」の方3名を講師として、 前半は園児と共に楽しく体を動かす活動、後半 は紙飛行機作りを実施した。体操では、大勢の 園児と共に跳び箱やマット、表現活動を行った。 表現活動では、小学生がリーダーとなり園児達 をサークルにさそったり、共にダンスしたりす る姿が見られた。また、紙飛行機でも互いに教 え合ったり、ボランティアの方に折り方を聞い たりして、楽しい時間を過ごすことができた。 できあがった紙飛行機を園庭で飛ばす姿も見ら



体操のお兄さんや 園児達と楽しくマット運動やリズム 体操

園児に紙飛行機 の折り方を教え る2年生



(3)授業を振り返って

れた。

児童の中には兄弟がいない子もいるが、活動を通して小さい子を思いやる気持ちを自然に学ぶことができた。また、毎年行っているため、年少児への接し方なども身につけ、抱っこしたりお話しを聞いてあげたりするなど小学校では見られない姿も多く見ることができ、児童の良さを新たに発見することができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

学区内の保育園との交流を通じて、幼少の子供たちを思いやる心やいろいろな人や事象に適切に関わっていこうとする態度が身についてきている。今後、子ども達の活動が教師の立てた計画による受け身の取り組みから、進んで課題を見つけ取り組めるような方法をのぞみ保育園の先生方と相談していきたい。

教科名 (総合的な学習) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 「福祉について考えよう」 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~インスタントシニア体験を通して~ |

- 自校の事業への取り組みについて
- (1) 筋肉・耳・目などの身体的な衰えを体験することにより、高齢者の体に対する理解を深めるとと もに、これからの接し方について考える。
- (2) 車椅子の体験をすることにより、利用している人の気持ち、そして、介護する人が気をつけなけ ればならないことに気づき、これからの社会生活に役立てようとする。
- (3) 点字の仕組み・決まりを知り、実際に点字を打つ活動をすることにより、目の見えない方の情報 を得る手段としての点字を理解し、社会生活の中でどのように接していくかを考える。
- 2 実践授業について
- (1) 授業計画にあたって
- 10月30日 (金) 「ハートフル勿来」施設長 伊藤幸子様来校「インスタントシニア」コース作り 11月 6日 (金) 「インスタントシニア」「車椅子」「点字」の体験
- 感想等をまとめて提出 11月 中旬
- (2)授業の実際
- 3・4校時の2時間続き、学年合同で実施した。
- 学年を3班に分け、Aインスタントシニア体験(各種装
- 具)、B車椅子体験、C点字講習をローテーションで行った。
 - A: 手足におもり、耳に栓、目にゴーグル
 - B:乗る側・押す側、段差やスロープ
 - C: 点字の仕組みの理解、打つ体験
 - A~Cそれぞれ、サポートの方の指導や助言を得て、 所期の目的を果たしていた。また、実際に体験して初め てわかることを「実感」し、体の不自由な人の気持ちを 考えることができた。



装具をつけて出発準備

(3) 授業をふりかえって

|児童たちは、「どうして老人はこんなことができないんだろう||と思っていたが、自由が利かない 体、見えにくい目、聞こえにくい耳になる体験で理解でき、優しく接しなければならないと感じた。 車椅子では、スロープではスピード、小石では衝撃を感じ、少しの段差でもとても怖いと感じたりす ることが分かり、介助する人が注意すべきことを知ることができた。点字については、一つ一つの点 がとても重要であることや、打つ人の苦労にも気づくなど、今回の学習を通して高齢者等に対する見 方、考え方が変わった。 学校や地域としては、施設面等の調査や交流体験などをこれからも取り入 れていく必要があると考える。

3 自校の取り組みの充実に向けて

体験や感想にとどまることなく、児童の自主的な実践活動の充実を図る必要がある。そのためにも、 体験的活動の系統化や、総合的な学習の指導計画の見直しなどが重要視される。

教科名(国語) 実施学年(第5学年)

| タイトル | 郷土への関心を高めるいとなみ |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~「いわきの方言」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

5年生の国語科では、「方言と共通語」という題材で、地域の特色と言葉のつながりについて 学習している。この学習をさらに深めるとともに、郷土いわきへの関心を高め、郷土愛を育てる ことをねらって、専門家による「いわきの方言」の授業を設定している。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

本校の学校支援委員(三室千鶴子氏)のコーディネートにより、いわき地域学会の夏井芳徳氏に依頼し、授業をお願いしている。夏井氏は、平成15年度より毎年この授業を引き受けてくださっており、事業の趣旨や学校の状況などもよくご存じのため、事前の打ち合わせは電話にて行っている。

実施日時とテーマ等について確認した後、事前に資料を送付していただき、学級では資料をもと に下調べなどの準備をして当日の授業に臨んだ。

(2)授業の実際

・事前に夏井先生から身近な方言についての課題資料をいただいており、そのいくつかの方言(せど・かんぷら等)の意味を考える活動があった。クイズのような感覚で、子ども達は楽しく活動することができた。方言の意味が自分たちの予想とはずいぶん違っていたので、子ども達は驚いていた様子であった。また、「じゃがいも」等の語源の説明を通して、言葉と地域と歴史のつながりを分かりやすくお話していただき、言語のおもしろさを感じることのできる授業であった。



いわきの方言の特徴についての お話を聞く

(3) 授業をふりかえって

この学習を通して、方言は昔から使われ続け生活に根ざした言葉であることや「いわきの方言」の特徴について理解することができた。また、自分たちの身近な言葉は、ふだんは意識していないけれど、生活と非常に密接に結びついていることに気づき、言葉への関心を高めることができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

授業の発展的な学習活動として、専門的な知識を持つ講師の先生にお話を伺うことは大変に有意義であった。学習後には、児童の興味・関心が大きく高まったという成果を得られた。今後も各分野にわたり学社連携・融合推進事業の積極的な活用を図り、教育効果を高めていきたい。

教科名(生活科) 実施学年(第1学年)

| タイトル | みんな だいすき |
|--------|------------------|
| サブタイトル | ~「 昔遊び大会 」の授業から~ |

自校の授業への取り組みについて

この単元は、家の仕事を手伝ったり、家族と遊んだりすることを通して、家族の温かさや大切さを 実感させることが目標になっている。その中で、家族の一員としての自分の役割に気付き、自分にで きることを見つけ、進んで取り組むことをねらいとしている。

最近、本校でも両親共働きの家庭が増加している上に、核家族化が進んでいるために、家族や祖父 母とゆっくり触れ合う時間が取りにくくなってきている。

そこで、普段遊ぶことが少なくなった伝統的な遊び(昔あそび)を楽しむ会を企画し、学年便りを通 して、保護者や近くに住む祖父母に協力を呼びかけた。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

- 1 学年便りで「昔遊び大会」のお知らせと協力依頼をする。〈 一次募集 >
 - (1) 実施日・時間・場所・学習のねらい等の概略をお知らせする。
 - (2) 昔遊びの種類を提示し、協力依頼をする。 ※ 参加できる遊びに○(複数選択)をつけてもらう。
- 2 参加者をとりまとめ、遊びの担当者を学年便りでお知らせする。 < 二次募集 >
- 3 当日、打合せと担当調整を行う。

(2)授業の実際

〈日時〉 平成22年1月29日(金) 10:30~12:00 〈場所〉体育館

- 1 はじめの会で、参加者の紹介と遊び方の確認をする。
- 2 遊びコーナーを 9 か所設定し、保護者や祖父母に担当をして いただき、子どもが自由に昔遊びを楽しむ。
- (1) こままわし (2) あやとり (3) けん玉

- (4) お手玉
- (5) おはじき
- (6) 竹馬
- (7) ビー玉、ヨーヨー(8) 竹とんぼ
- (9) 羽根つき





~竹馬に挑戦~

(3)授業をふりかえって

児童数57名に対して、保護者や祖父母が30名も参加者が集まり、各コーナーの担当を喜んで引 き受けてくださった。担当者がとても丁寧に遊び方を教えてくれたので、子ども達も遊ぶ楽しさを十 分味わうことができた。また、参加してくださった方々も、かわいい1年生とゆっくり遊ぶことがで き、満足した表情でお帰りになられた。

今回の「昔遊び大会」で体験した遊びは、今後も継続して遊ぶように見守っていく予定である。

3 自校の取り組みの充実に向けて

本校では、学者連携・融合事業として様々な連携先を活用しているが、打合せの時間があまり取れ ず、電話連絡や当日の打合せをする程度になるのがほとんどである。

今回の昔遊びの場合、老人会にお願いしたこともあったが、連絡調整が大変だったという

反省があったため、身近な地域の方に協力を依頼することにした。実際に、自分の孫がいる場合、学 校に来るのがとても楽しみということもあり、参加者も集まりやすいようである。

そのため、2年生の「まちたんけん」も同様な形で行っている。

しかし、内郷地区では、「学校支援地域本部事業」が利用できるようになっているので、人材を有 効に活用していくことが、今後の課題である。

教科名(学級活動) 実施学年(第4学年)

| タイトル | 学級活動(2)「食に関する指導」 |
|--------|--------------------------------|
| サブタイトル | ~食に関する指導「ぼくのおやつ わたしのおやつ」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

今、子どもたちを取り巻く食環境は著しく変化し、健全な食生活が失われつつあり、様々な健康問題等が指摘されている。食育基本法の前文には、『子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要である。』と述べられている。県は食育推進計画を策定し、食育の推進に関する施策の計画をまとめた。また、県教委においては、「ふくしまの教育7つの約束」の「健やかな体をはぐくみます」に食育の推進を掲げるとともに、平成19年度を食育元年と位置づけた。

これらの推進計画を受けて、本校でも食育の推進に向けて授業における教育実践を積み重ねてきた。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

今年度は、食育の指導を全学年で実施するために、給食センターの栄養教諭や学校栄養職員に依頼 したり、学社連携・融合事業を利用して公民館に依頼したりして外部講師の獲得に努めた。

今回の食育の授業実践にあたっては、偶数学年において学社連携・融合事業並びに学校支援地域本 部事業を活用し公民館に講師を紹介していただいた。事前に打合せを実施し、今回の授業の実施に至 った。

(2) 授業の実際

「ぼくのおやつ わたしのおやつ」という題材名で学級活動の時間に授業を実施した。 引地先生は元中学校の校長先生ということで、教材研究もすばらしく子どもたちは多くの視覚的教材に触れながら、授業に参加することができた。指導案は本校で準備させていただいたが、引地先生との事前打合せにより、より楽しく興味深い授業を体験することができた。



「ぼくのおやつ わたしのおやつ」の 授業を行う引地先生

(3) 授業をふりかえって

子どもたちは、視覚的教材に触れながら楽しく授業に参加することができた。専門の先生から授業をしていただけたことで、より子どもの食に対する関心が高められたように思う。また、公民館等の関係機関の仲立ちのおかげで、学校と地域の結びつきが少しずつ身近になってきているように感じた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

学社連携・融合事業並びに学校支援地域本部事業を活用して、今後とも公民館との連携を深めていきたい。内容は教科指導に関するものだけでなく、安全パトロールや樹木の手入れなど学校のボランティアとして活動していただける方との連携も深めていきたい。打合せの時間の確保や人材リスト等の拡大も今後の課題として残されるが、事業を進めていくなかで一つずつ改善を図っていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「地域を学ぶ」 | |
|--------|----------------|--|
| サブタイトル | ~ 宮の秘密を見つけよう ~ | |

1 自校の事業への取り組みについて

○ 宮町には、「常磐炭鉱」が栄えた頃の名残を残す建造物やその跡が数多く残されている。本校で は、地域を核とした体験学習を重視し、協同的な学習活動を進めるため、身近にある素材に気づき、 課題意識を連続的に発展させることができるように各学年の総合的な学習の時間のテーマを次のよ うに「地域」に絞って取り組んでいる。

○3年「地域を学ぶ」

○4年「地域の人から学ぶ」

○5年「地域の伝統を学ぶ」 ○6年「地域の歴史を学ぶ」

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

○ 子どもたちは、宮町の自然や昔の様子についての調べ学習を行ってきたが、宮町についての 資料等が少なく、詳しいことまで調べることができなかった。

そこで、地域の自然や歴史等に詳しい「宮地区少年育成推進協議会長」の奥山氏にゲストティーチ ャーを依頼し、実際に現地にて説明を受けることとした。

(2)授業の実際

- 本時までに子どもたちは宮町の自然や昔の様子などを 調べ、そこから出てきた疑問について、ゲストティーチャ 一に説明を受けるという形で行った。
- 昔の写真を見ながら説明を聞いた後、実際にあった場 所を訪れた。子どもたちは、目を輝かせながら、写真を見 たり、昔の建造物などの跡を見たりした。
- ゲストティーチャーの説明や実際の場所を観察したこ とにより、子どもたちの興味・関心が高まるとともに、疑 問点についての解決が図られた。



万石(貯炭場)での説明

(3)授業をふりかえって

- 子どもたちは、写真や説明だけでなく、実際の場所を観察したことでより理解を深めること ができた。
- 地域の方々の協力により、ねらいを達成することができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

○ 地域についての学習を進めるためには、地域人材の協力が欠かせない。学習のねらいの達成 に向けた地域人材の活用をさらに図っていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第4学年)

| タイトル | 「高野町 ホタル大作戦」 |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | ~第4学年 ホタルの観察・飼育・放流から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域で行っているホタル保全活動と連携し、ホタルの幼虫の観察や飼育を通して、自然に親しみ、自然を大切にする心を育むことをねらいとしている。 平成18年度より、地域のホタル保存会の方と福島高専の先生に指導をいただいている。平成

平成18年度より、地域のホタル保存会の方と福島高専の先生に指導をいただいている。平成20年度からは第4学年の総合的な学習の時間に位置づけ、継続的な指導をしていただく体制を整えている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

4月に、前4年担任と現4年担任がホタル学習についての引継を行い、その後、地域のホタル保存会の方と福島高専の先生、4年担任、校長、教頭による打合せ(主に年間学習計画の確認)の機会を持った。子どもたちに対しては、ホタル学習オリエンテーションを実施し、子どもたちが今後の活動の見通しが持てるように、講師の先生方より具体的なアドバイスをいただいた。

(2) 授業の実際

「ホタル大作戦」の主な活動は次のようになる。

- 4月 オリエンテーション 5月 カワニナ採取と飼育
- 6月 成虫の飼育(地域のホタル観賞会への参加)
- 7月 産卵と孵化 11月 幼虫の放流

近くの川で幼虫のえさとなるカワニナを採り、飼育することから始まり、6月にいよいよホタル成虫の飼育・産卵を開始した。ゲンジとヘイケ2種類の産卵箱をセットし、定期的に地域の方の助言を受けながら様子を見守った。約40日後にはホタルの幼虫が観察できた。その後、カワニナを補充しながら飼育を続け、11月に学校のビオトープに放流することができた。



カワニナ採取

(3) 授業をふりかえって

「ホタルを見たことはあったけど、住む場所やえさ、特徴までは知りませんでした。これからは、高野のきれいな水や自然を大切にして、来年の4年生にも教えてあげられるといいなと思います。」

このような児童の感想から、ホタルの飼育・観察や地域の方々との関わりから、高野町の自然 環境に目を向け、それらを大切にしたいという思いや願いを持つことができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後も、地域のホタル保存会の方々や福島高専の先生の指導をいただきながら、子どもたちが 地域の自然環境に関心を持ち、それを守り育てようとする態度が身につくように実践を継続して いきたい。また、ホタル学習の充実はもちろん、その前後に当たる3年生及び5・6年生で行う 環境学習との関連性・系統性を大切にし、子どもたちが自分たちでできることを見つけ、積極的 に行動できるような実践意欲の高まりをめざして取り組んでいきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第2学年)

| タイトル | 「職場体験活動」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~勤労体験から将来の自分を考えよう~ |

- 1 自校の事業への取り組みについて
- ① キャリア教育の一環として、自己の将来像を考えながら、発達段階に応じた適切な職業観を 育成する。
- ② 地元事業所を中心に連携を図り、地域全体で生徒を育てていく意識の高揚と地域社会の教育力を高める。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

事前指導と段取りで成果が左右される。生徒の希望に沿って事業所捜し、交渉と長時間を必要とする。今回は約70箇所の事業所との交渉が必要となり教師サイドの役割分担を決めたものの大変であった。この場合、協力できる事業所の登録制又は公的機関による紹介などが可能であればたいへん進めやすい。

(2)授業の実際

実施後の感想文などから判断すると、働く目的、意義についての深まりは必ずしも十分とはいえないが、楽しさを味わえた生徒が多く見られた。事業所(地域社会)の方々もこの授業のねらいに沿って協力していただいた。

また、学校が何を意図してこのような取り組み(教育活動)をおこなっているのかもある程度は理解していただけたと判断している。適切な職業観の育成、自己の将来を見据えての生活をこの授業と如何に結びつけていけるかが、大きな鍵となる。



商品陳列 (楽器店にて)

(3)授業をふりかえって

- ① 生徒たちは、自分の希望した職種だったこともあり、予想以上に積極的に活動していた。 特に接客関係で活動した生徒からあいさつと身だしなみの重要性に関する感想が多く聞かれた。
- ② 学校では見ることができない、生徒の一面が見られたことは多面的生徒理解の上で効果があった。
- ③ 多くの受け入れ事業所で好意的かつ協力的に対応していただいたが、活動日数の問題、 経済状態など、特に今年は新型インフルエンザの影響もありたいへんであった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

職場体験の意義と目的を十分に理解させる必要がある。与えられたことを単に消化するという 意識から、自ら進んでという意識への転換が最大のポイントである。生徒たちは学校を離れての 活動をある意味楽しみにしている。この楽しさを大切にしながら次のステップどう進んでいける かが今後の充実を図る意味で大切である。 教科名(技術科) 実施学年(第2学年)

| タイトル | 作物栽培の学習 | | |
|--------|----------------------|--|--|
| サブタイトル | ~ 2年技術科「作物栽培」の授業から ~ | | |

1 自校の事業への取り組みについて

平成24年度から完全実施となる新学習指導要領において、「作物栽培」の学習が必修となる。本校では、移行期間である平成22年度より、「作物栽培」の学習を選考実施することとした。しかしながら、本校には技術科の免許状を持つ教師がいないため、専門的な知識・技能を持つ人材の協力を得て、授業を充実したものにしたいと考えた。人材探しや事前打ち合わせ等の準備については、内郷公民館の協力を得ることとした。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

内郷公民館の協力を得て、人材探しを行っていただき、元農業高校教諭で農業の指導について 経験豊かな外部講師に来ていただけることになった。内郷公民館が仲立ちとなって事前打ち合わ せや準備を行い、授業の計画を共同で行った。

(2) 授業の実際

5月下旬から7月上旬にかけて、計5回授業を実施した。

- 5月29日(金)農具の使い方と、ナスの苗を植え付け。
- 6月12日(金)ナスの観察とトウモロコシの植え付け。
- 6月19日(金) 肥料の三要素についての講義と施肥。
- 6月26日(金) 菜園の除草と追肥、支柱立て。
- 7月10日(金) トウモロコシの雄花・雌花についての学習と観察。



ナスの苗を観察し、植え付ける。

(3)授業をふりかえって

講師の豊富な経験に基づく指導は、生徒の興味関心を大いに喚起し、非常に効果的であった。 大多数の生徒は、これまで作物栽培の経験がなく、新たな体験をすることができ、授業後に「とても楽しく学習できた」と感想を述べる生徒が多かった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

専門的な知識・技能を有するとともに、生徒の指導についても豊富な経験を持つ人材があって こそ、今回のような充実した学習活動が実現できたものと考える。今後も、地域との協力関係を 構築し、開かれた学校づくりを一層推進していきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1・2学年)

| タイトル | 森林環境学習 |
|--------|---------------|
| サブタイトル | 森林の役割について考えよう |

- 1 事項の事業への取り組みについて
 - (1) 故郷の山を大切にする心を育成する。
 - (2) 地球温暖化防止に向け、できることは何かを考えさせる機会とする。
- 2 実践授業について
- (1)授業計画にあたって
- ○平成 20 年度末に、いわき明星大学科学技術学部岩田惠理先生と本校担当深瀬教諭が本年度の計画 についていわき明星大学にて打合せを行い計画を立案した。
- ○本年度に入ってからは、電話や電子メールにより計画の細部について連絡を取り合って実施した。
- ○計画にあたって、少人数のグループに分かれて体験できるよう大学生の学習ボランティアの協力を お願いした。
- (2)授業の実際
- ①5月20日 オリエンテーション(本校) 森林学習の見通しについて
- ②5月25日 第1回森林学習(いわき明星大) 「森林の大切さ」について岩田先生より講義を頂き、その後グループに分かれていわき公園でオリエンテーリングを実施。
- ③10月7日 第2回に向けて事前指導(本校)
- ④10月9日 第2回森林学習(フラワーセンター) 太陽光発電や、風力発電の見学し、エネルギーと環 境保全の関わりについて考えた。



「森林の大切さ」についての講義

- ⑤10月13日まとめ(本校)
- (3)授業をふりかえって
- ○本校は山間の小規模校であるが、生徒達は森で遊んだ経験もあまりなく改めて森の大切さに気づく ことが出来た。
- ○外部の人と関わる経験の少ない生徒達にとって、講師の先生や大学生の学習ボランティアの方達に ご指導いただいたことは、とてもよい刺激になった。
- ○新しいエネルギーの重要性について学び、環境問題について考える契機となり理科や社会の学習に も大いに役立った。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ○来年度は、今年の経験をふまえ「木の役割」に目を向けて活動していくこととし、「湯の岳山荘」 のボランティアの方達にご指導いただくこととした。間伐体験や炭焼き体験を行う予定である。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5学年)

| タイトル | 好間川へ行こう |
|--------|------------|
| サブタイトル | ~せせらぎスクール~ |

1 自校の事業への取り組みについて

身近な河川に対して自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質 や能力を育てる。

学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

2 実践授業にあたって

(1)授業計画にあたって

電話で実施したい意向を伝えた後、学校にて2回話し合いの機会を持つ。1回目は、実施期日と内容について話し合った。2回目は、必要とするスタッフの数・必要な道具類や提出書類についての共通理解を図った。2回目の話し合いで参加人数に対してNPO法人「いわき環境研究室」のスタッフの数が少ない、ということであったので保護者にも協力を呼びかける。

(2) 授業の実際

1グループを6人程度の少人数にして活動することによってたがいの役割を明確にすることができた。 はじめに講師の方に生物の採集の仕方と生息している場所、注意事項の説明を受けたあと、網などを持って採集を行う。様々な種類のカゲロウの幼虫を含む水生昆虫類やアユをなどの魚なども採集できた。

児童たちは、近くの川に数多くの種類の生物がいること に驚いていた。専門家の指導を通して好間川への関心を高 めることができた。



水生昆虫の採集と観察

(3)授業を振り返って

子どもたちにとって、近くにありながらなかなか生物採集を行う機会が少ない川で活動することは 貴重な経験となった。専門家の指導を受けることで、様々な生物の採集がうまくいき充実した内容と なった。

学校にとって専門家に指導していただけることは、知識を補い活動を充実させるだけでなく、危険 個所や行為を事前に察知できることで安全な活動にもつながった。

3 自校の取り組みの充実ついて

実践の計画・実施・反省の累積により充実化を図っていきたい。

教科名 (総合的な学習) 実施学年 (第4学年)

| タイトル | 「いのちといのちが支え合う」 | |
|--------|----------------------|--------|
| サブタイトル | ~ 福祉「デイサービスセンター訪問交流」 | \sim |

1 自校の事業への取り組みについて

本校は、道徳教育「生命を大切にする心豊かな児童の育成」を中心に据えた研究実践の上に、身近な地域、環境、人との関わりを通して子ども達の豊かな心の育成をめざしている。その中で4年生は、福祉を主題とし、一連の学習活動を進めてきた。まず「福祉」とは何かいわき市障がい福祉課の方の講和より、児童の福祉に対する関心と探求意欲を高めた。次に、視覚障害者や聴覚障害者の方との交流や、点字・手話の体験活動(聴覚障害者グループ、点訳グループ)を通して障害のある人たちの気持ちや願いを感じ取り、正しい理解のもとに相手の立場に立った言動を考えられるようにした。また、道徳の時間に身体の不自由な方との交流も経験しており、子どもたち一人ひとりの疑問や課題解決学習を進め、さらに実践の場として老人福祉施設の訪問交流を行った。活動に連続性を持たせ、障害のある方や介助者の話を聞いたり体験する活動をすることにより、児童が自分の将来の問題として考えたり、ボランティア活動へ進んで取り組んだりする実践的な生きる力の育成をめざしこの事業に取り組んでいる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- ・社会福祉協議会を通じ、デイサービスセンターとの交流実施の許可を得る。
- ・実施計画(ねらい、期日、実施内容等)について社会福祉協議会を通じて連絡調整を図る。
- ・事前指導の中で、高齢者の心と体、生活の仕方、お世話の仕方(留意事項)を理解させる。
- ・交流者のことを考え、ねらいにそった活動ができるよう計画の段階で教師が支援にあたる。

(2) 授業の実際

学校から施設まで徒歩約15分と比較的近いので、昼食後約1時間の訪問日程で実施した。はじめに施設の方のお話や施設の見学を通し、高齢者の人たちの生活の仕方や、身の回りの工夫などについて理解を深めた。次に、歌や合奏の発表をし、一緒にリズム体操を行った。その後グループに分かれお話をしたり準備をしていった遊びをしたりして交流を深めた。祖父母と暮らしている児童は、約1割と少ない。最初は、どのように接してよいかとまどいも見られたが、歌や合奏を嬉しそうに聞いてくれるお年寄りを見て子ども達も安心して活動を進めることができた。お年寄りの話を聞き、昔のことについて学ぶこともでき高齢者に対する尊敬や思いやりの気持ちを感じるとともに家族について見直すよい機会にもなった。



お年寄りと遊ぶ

(3) 授業をふりかえって

普段お年寄りとふれ合う経験が少ない子ども達であるが、高齢者の人たちとの交流を通し、人間的なふれ合いや生き方を直接感じることができた。高齢者から学び、高齢者と共に楽しむことは、共に生きていくことの大切さや学びあい助け合う福祉の心を育てることになる。重点目標に「思いやりのある子」があげられているが、この交流活動を通し相手の立場や気持ちを考えることができた。そして、児童は、思いやりの心や福祉の大切さを自分自身の課題として受けとめることができた。また、地域にある施設を活用することにより、地域との結びつきもより深めることができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

教育目標「心豊かで実践力のある児童」の実現に向け各教科、道徳、特活、総合など各領域で関連付けながら行われている。福祉の学習では、福祉に対する正しい理解と自己決定できる力を育てることが大切であると考える。体験の場や、専門家による講和を聞く機会を与えることにより児童の関心・意欲を高めるとともにどう生きていかなければならないか判断し、行動できる力を身に付けさせたい。本時の交流授業は、今まで社会福祉協議会の協力を得ながら行われてきた講和や体験活動の上に行われ、より理解を深めることができた。地域と結びついたこの活動がさらに継続していけるよう活動の内容を工夫していきたい。(命のアサガオプレゼント、文通など・・・)そして、自他の生命を大切にする温かい心やおもいやりの心を持つ豊かな人間性を育てていきたい。

教科名(国語科書写) 実施学年(第3~6学年)

| タイトル | 「書きぞめ」を通した書写指導 |
|--------|----------------|
| サブタイトル | ~ 校内書きぞめ大会から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

年中行事である「書き初め」を全校児童で体験することにより、これまでの書写学習の集大成をするとともに、学校課題である表現力の育成を側面から支援する。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

例年講師をされている白石吉孝氏(学校近隣に住み、行政嘱託員や学校評議員等を務める)に 快諾を得て実施している。本年度は、教頭高木が複式解消のため、第4・5学年を担当した。低 学年は、例年通り担任が担当した。

(2)授業の実際

各学年とも、2学期末からの事前指導を受け、冬季休業 中に作品作りに励んできた。

当日は、その作品をさらに高めるべく、一人ひとりの課題を確認し、2時間通しの校内書きぞめ大会を開始した。

児童は、作品を見てもらったり、提出する場所に運んだり、 トイレに行ったりするほかは、集中して自分の課題の解決 (書写技能の向上)を通して作品を仕上げることができた。



校内書きぞめ大会

(3) 授業をふりかえって

児童にとっては、「書き初め」という年中行事に触れながら、書写の技能を高めることができ たことが大きな収穫である。

地域(講師)と学校(教師)が協力して指導したことにより、一人ひとりの児童への助言や賞 替が充実し、上記につながったことが前進であると考える。

3 自校の取り組みの充実に向けて

外部の講師や協力団体との連携について、「専門家にお任せする」部分も必要ではあるが、可能な部分は教師が積極的にかかわりを持つことで、より効果が上がり、地域との関係も深まることから、実施の際に考慮していく。

教科名(1、2年創意2・3、4年総合2) 実施学年(第1~4学年)

タイトル

「昔からの遊び」

1 自校の事業への取り組みについて

〈目的〉

- (1) 日本の伝統的な遊びである、お手玉、こま回しなどを体験し、その楽しさを味わう。
- (2) 地域の老人の教えを受け、一緒に遊ぶことにより、交流を深め、敬愛の心情を育てる。
- 2 実践授業について
- (1) 授業計画にあたって
- 実施日は、ふくしま教育週間中とする。
- 事前に児童の祖父母や保護者、地域のお年寄りに案内を出し、協力を依頼する。
- 当日協力できるお年寄りや保護者、地域住民の人数や遊びの種類によって具体的な計画を 立てる。

(2)授業の実際

〈実施日時〉11月4日(水)23校時

(1・2年 創意2 3・4年 総合2) 〈場所〉大利ルーム及びオープンスペース、校庭 〈授業展開の様子〉

- 9:00~10:10 室内での昔からの遊び体験
- お年寄りの方へのあいさつ (4年)
- 校長先生のお話
- グループに分かれての活動
 - お手玉・おはじき・けん玉・こま回し・カルタ
- 10:20~11:00 外での昔からの遊び体験
 - ・ 竹とんぼ・ゴム跳び・竹馬・輪回し・羽つき
- 感想発表(各学年1名ずつ)
- お年寄りの方へお礼の言葉(4年)



おはじき遊び

(3) 授業をふりかえって

児童がふだんはあまり体験しない遊びを体験し、その楽しさに触れ、貴重で充実した活動となった。昔からの遊びについて祖父母や保護者から教えを受け、昔からの遊びを通して交流を深めることができた。児童にとっては、自分の祖父母だけでなく、友達の祖父母や保護者とも交流したり教えてもらったりする機会となり、有意義であった。大人にとっても自分の孫や子どもだけでなく、他のこどもたちと親しく接することができ、本校の児童や学校教育に対する理解が深まり、さらに、同じ地域の住人としてよい関係づくりにつながった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

より幅広く祖父母や地区民が参加できるように、案内や呼びかけの方法、内容を工夫し、さらに充実した連携となるようにしたい。

実施学年(全学年)

| タイトル | 「子ども達の安全を守るために」 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~自己防衛力を高める防犯避難訓練~ |

1 ねらい

- (1) 避難場所や避難の経路を確認し、全員が安全に避難できるようにさせる。
- (2)不審者侵入の場所・状況など落ち着いて正確に把握させ、自分たちのとるべき行動を判断させる。
- (3) 侵入してきた不審者に対しての対処の仕方を身に付ける。
- (4) 避難場所での集合・人員の把握、報告を正確に迅速に行わせる。

2 実践訓練について

(1) 計画にあたって

①想定

- ○授業中に校舎内に不審者が侵入する。
- ○職員が不審者を取り押さえる。
- ○安全が確認できたら全校生徒を誘導・避難させる。

②護身術の実演

○実演を通して、護身術を身に付けさせる。

③講評

○好間駐在所の警察官2名に依頼する。

(2) 訓練の実際

| ○不審者 | ○職員 | ○生徒 |
|---------------|---------------------------------|-------------------------|
| ・玄関から侵入する。 | ・緊急の放送を入れる。 | ・放送を聞く。 |
| ・職員が止めるが拒否する。 | ・警察に連絡する。 | ・教室の鍵を閉める。 |
| ・2階教室へ向かう。 | さすまた等で取り押さえる。 | 避難する。 |
| | ・避難放送する。 | ・整列後、人員確認する。 |
| | ・各箇所で生徒を誘導する。 | |

(3) 訓練を振り返って

実践訓練によって、先生方や生徒の動きが確認でき、次年度の計画に生かすことができた。

警察官により講評の中で、不審者の怖さや防御の仕方をきくことで、改めて「自分の命は自分で守る」 ことを知ったようである。

3今後の取り組みの充実に向けて

今回の避難は授業中という想定で計画した。しかし、学校生活の中には昼休みや部活動など様々な生活場面がある。その中で、どのように対応するかを今後の取り組みとしていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第3学年)

| タイトル | 「みんなに知らせよう四倉の磯」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | 〜蟹洗いの磯で海洋生物観察〜 |

1 自校の事業への取り組みについて

本事業は、自分たちの身近な地域にはたくさんの磯に住む生物がいることを知り、直接体験によって 生物の不思議さおもしろさを感じとり、生物をより関心を持って観察しようとする態度を培うととも に、自分たちの住む四倉のすばらしさを知ることを目的として行っている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

学校から徒歩15分ほどのところにある蟹洗いの磯で、年間3回ほどの観察活動を行う。ここは、大潮の日には70M位沖まで磯場が出現し、アワビやウニ、タコ、イカ、イソギンチャク、カニ、たくさんの小魚や海藻類を観察することができる。この場所は禁漁区になっており、一般の立入は禁止されている場所である。そのため、磯場を管理しているいわき市漁協四倉支所四倉採鮑組合や福島県水産事務所等の関係機関の協力をいただきながら、観察学習計画を進めた。

観察にあたっては、磯場までの通行の安全を図るために、保護者の方々のボランティアの協力もいた だいている。

(2) 授業の実際

福島県水産事務所の方から、磯の生き物についての説明やこの磯で働く人々のお話などをいただいた。児童は、アワビに穴をあけるタコの話にとても驚くとともに関心を持って聞いていた。

いわき市漁協四倉支所四倉採鮑組合の方々からは、磯場へ降りるはしごを架けていただくとともに、ウニやアワビの採り方やそれらが食べる海藻について説明してもらった。また、実際に採るところを見せていただいた。

この磯場から実際に採取したいくつかの生物は、学校に 持ち帰り、海水を入れた大型水槽で継続観察している。



採鮑組合長さんからウニや鮑の説明

(3) 授業をふりかえって

漁協の方や水産事務所の方から海の生物の不思議さや漁業のおもしろさを聞き、実際に生物を手で触れることによってこの四倉の自然のすばらしさを再認識できた。

この体験学習によって、児童は身近な海で働く人々に対する理解を深め、環境への関心を高めることができた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- ① 関係機関との連携を数年継続することで連携の仕方もスムーズになり、活動の安全がより図られてきているので、学校の特色ある活動としてさらに継続していきたい。
- ② 学社連携が、学校の様々な教科活動の中で生かすことができるようになってきた。地場産業についての理解や地産地消などの食育の面など、キャリア教育との関連も図りながらさらに進めていきたい。

教科名(生活・総合他)

実施学年(全学年)

タイトル 『ふれあい大浦活動』の実践から

サブタイトル ~「ひと」「もの」「こと」に積極的に関わる子どもを育むために~

1 自校の事業への取り組みについて

本校では、重点目標『豊かな人間関係の中で育む自立心―「ひと」「もの」「こと」に積極的に関わる子どもの育成―』を設定し、その課題解決のために教科横断的なカリキュラムを組んでいる。その、中心的な活動として『広げよう!深めよう!友達と地域とのふれあい 2009 ふれあい大浦活動』を構想している。

この活動でねらう子どもの姿は「①お互いに認め合い、励まし合い、ともに伸びようとする子ども②学年に応じた役割を理解し、責任を持って最後までやりぬこうとする子ども③地域の方とふれあい、親睦を深め感謝の気持ちを持つ子ども」である。地域の教育力を生かしながら、他教科で学んだことを生かして実践したり、探求したりすることを通して目的を達成しようとする事業である。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

昨年度の反省から、より継続的に地域の方々と関わっていくために大浦公民館の協力を得て、地域講師を紹介していただくだけでなく、コーディネート役としても積極的な関わりをしていただいた。

- ・本事業に関わるカリキュラムの打合せの実施
- ・クラブ活動への地域講師の参加
- ・全校生対象の「地域ふれあい会(ワークショップ講座)」
- ・「大浦ふれあい(いも煮会)」の実施(地域の方との調理やゲーム等での交流会)
- ・縦割り班ごとの反省(新聞・ポスター作り)等について、大浦公民館と打合せを行った。

(2) 授業の実際

地域の方々との交流場面

①クラブ活動(9月9日)

家庭科クラブ (マスコット作り)

運動クラブ (グランドゴルフ)

音楽クラブ (太鼓 尺八等)

ゲームクラブ (将棋) などに参加

②地域ふれあい会(9月11日)

お手玉 あやとり 絵手紙 竹細工 藁細工

そば打ち グランドゴルフ 囲碁 将棋 伝統芸能

- の10の講座に全校児童が参加し、地域の講師の方に教えて いただきながら交流を深めた。
- ③大浦ふれあい会(9月30日)

縦割り班に講師の方々にもはいってもらい、一緒にカレーを 調理して会食をしたりゲームをしたりして交流した。

④縦割り班ごとの反省会(10月1日)



「地域の方とのマスコット作り」

(3) 授業をふりかえって

- ○クラブ活動で交流をしたあとで「地域ふれあい会」を設定したので、子どもたちは勿論、講師の方の 関わり方も、例年より積極的に言葉をかけてくださったように思う。特に、「大浦ふれあい会」で は、「子どもたちの御礼としての会食会」というのではなく、一緒に作ったり教えたりしてくださ り、地域の方々の子どもたちへの「愛情」を感じる機会となった。
- ○子どもたちのカレーを食べたあとの感想で『おいしかった』『楽しかった』より『うれしかった』と の感想が多かった。特に高学年は「1年生や講師のおばあさんがにこにこしてくれたのを見てう れしくなった」ということだ。ふれあうことの大切さやよさを感じてくれていた活動になった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- □公民館との連携をより密にして、情報を交換するだけでなく、地域の方々がどうのように学校と関わっていけるか、子どもたちとの成長のために、どのような活動ができるのかを話し合っていきたい。
- □これまで、次年度に向けての計画を公民館との打合せだけにしていたが、協力いただいたサークルの 代表者と話し合う時間を設けていただき、よりクラブ活動や日常の授業に活用していける活動がある ことを確認した。
- □一方的に「学ぶ」だけでなく、学習の成果を地域の方々とともに発表できる機会を設定し、より質的 にも高いものにしていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第4学年)

| タイトル | 川を探検しよう |
|--------|----------------|
| サブタイトル | 川、土、森と生き物のつながり |

1 自校の事業への取り組みについて

本校の4年生は、総合的な学習の時間に地域の川の生き物と川の汚れや土壌との関係などについて 調べる学習をしている。毎年吉岡栄一先生を講師に迎え、年に3回実地調査と授業を行っている。学 区を流れる仁井田川にどんな生き物がいるのか、上流と中流とを比べてその原因を考えることから落 葉樹の森林が環境に果たす役割に気付かせたいと考えた。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

吉岡先生には非常勤講師として年に5時間の枠で授業をお願いしている。年度の初めに3回の授業日を決め、それぞれの授業日の前に担任との打ち合わせを行い具体的な学習内容や準備物などについて確認している。実地調査に当たっては、事前に現地の下草を刈ったり、下見をして危険箇所の点検を行ったりした。

(2)授業の実際

1回目は、6月9日に仁井田川中流霞田橋下で水生生物の調査を行った。見つけた生き物からその川の水は少し汚れていることが分かった。田んぼの土と川の土とを比べて粘土の量やにおいの違いに気付くこともできた。

2回目の9月17日は大野二小学区の紫竹橋下で調査を行った。採集した生物を前回の生き物と比較して水がきれいなことが分かった。川底の土は小石が多いことも確かめた。学校に戻り、吉岡先生から採集した生

き物について教えていただいた。

3回目は11月11日、紫竹橋近くの山の土と大野一小東の川子田の土を比べた。落葉樹の多い紫竹橋の方には虫が多くて保水力があり、水を濾過してきれいにすることが分かった。この学習に先駆けてワラジムシを飼育し、ワラジムシが落ち葉を食べフンを出し土に養分が貯えられていくことも学習した。



生き物を囲んで吉岡先生の話を聞く(仁井田川上流)

(3)授業をふりかえって

子どもたちは吉岡先生との授業をとても楽しみにしており意欲的に学習した。実際に川に入って土を浚い泥の中から生き物を探し出した喜びは大きく、さらに吉岡先生がその生き物の名前や性質をその場で教えてくれることが子どもたちの探求心を満足させ更に高めていった。授業の実験ではっきりとした結果が出なかったときには、吉岡先生から指導を受け自分たちで再実験を行った。その後子どもたちは吉岡先生との学習をもとに自分たちで数種類の土を採取して保水力や土の成分、土の中にいる生き物などについて調べた。その学習をまとめて校内で発表することができた。

この学習で地域の川の生き物と汚れに関心を持つとともに、森林の働きに目を向け環境について考える機会となった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

吉岡先生には4年間授業をしていただいており、子どもたちは毎年総合的な学習の時間の発表会で 先輩たちの取り組みを聞いて活動に見通しと期待を持ってきた。その中で毎年自分たちならではの取 り組みを工夫している。児童に地域への目と自然環境への目を開かせ科学的な探求の仕方を学ぶよい 機会として継続していければよいと考える。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5・6学年)

| タイトル | 日本文化にふれる |
|--------|-----------|
| サブタイトル | ~茶道教室の授業~ |

1 自校の事業への取り組みについて

今年で7年目となる「茶道教室」は、毎年5・6年生を対象として実施している。6年生にとっては2年連続となる。この事業を通して、室町時代から伝わっている茶道の歴史や作法等、先人たちの楽しみ方にふれ、日本文化を理解することをねらいとしている。

2 実施授業について

(1)授業計画にあたって

平成22年2月26日(金)に、地域の方と実施学年の担任が時間を決め、事前の心構えと当日の活動の流れ準備物を確認し、充実した2時間に内容を組み立てた。

(2)授業の実際

茶道の雰囲気を醸し出すための畳と床の間の設定、床の間には、 掛け軸と花瓶をいけた身の周りの小さな植物(わび助・さんしゅう)を茶花として生けている。

はじめに、茶道の歴史にふれ今日まで大切にされてきたことを 知った。

つぎに、和菓子を口にし、作法にそった茶をいただく。 最後に師匠の指導のもと、茶筅の振り方や茶の出し方を体験 し、茶の入れ方によって味も変わってしまうという深いことを 知った奥深い行事となった。



【茶道の歴史の講話】

(3) 授業をふりかえって

恥ずかしそうな面持ちでの態度であったが、正座をして、礼儀正しく振る舞っていた。指導してくださった地域の方々と顔見知りになって嬉しかったこと、地域の方も茶道の世界を堪能させることができ喜んでいた。

(4) 自校の取り組みの充実に向けて

学校の伝統となっている茶道は、今後も継続していきたい。地域の方とふれ合い、身の周りには日本文化を大切に守り続け、楽しんでいる方がいること、他にもスポーツや違った文化にも活躍していることを、子ども達に伝えていきたい。

教科名 (総合学習) 実施学年 (第1学年)

| タイトル | 「四倉町を知る」 |
|--------|---------------|
| サブタイトル | ~ 地球にやさしい農業 ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域における産業の変化を調査することで、地域の現状を知ると共に地域への関心を高めることを目的としている。さらに、調査活動の具体的な方法や調査内容の整理の仕方を身につけさせたいと考え事業を実施した。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

まず四倉町の概要を知るために商工会議所を訪問し、人口や産業の衰退などのお話を伺った。 第一次産業は今後の発展が期待される分野である。特に食料自給率を考えて、農業について調査 活動を進める計画を立てた。

地域に「地球にやさしい農業」を実践している施設があるので、その特色を知るために聞き取り調査を行いココウール養液栽培や水のリサイクルについて学んできた。また、トマトの摘葉と収穫を体験してきた。

(2) 授業の実際

- ① 温室栽培(施設)の概要を知る。
 - ・ 会社の歴史 ・施設 ・生産物 ・流通 など
- ② 栽培の特色を知る。
 - ・ ココウール養液栽培システムについて
 - ・ 温室のしくみについて
 - ・ 水のリサイクルについて など
- ③ 野菜の収穫を体験する。
 - ・トマトの収穫・トマトの摘葉



環境にやさしい農業について

(3) 授業をふりかえって

生徒は調査活動を実施するにあたり、課題解決に必要な活動の手順と報告書のまとめ方について学ぶことができた。訪問時は質問の仕方や受け答えなどが適切であり、聞き取り調査の実際の方法が身についた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後は調査した内容から様々な分野に興味を示し、多岐にわたって調査を進めることができる ようにさせたい。その調査の過程の中で各教科の知識・技能を生かせる場面を設定していきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1・2・3学年)

| タイトル | 「職場福祉体験」 |
|--------|--------------------------------|
| サブタイトル | ~ 幼児・成人・お年寄りの方の生活を体験学習により学ぼう ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

幼児の世話や職業体験、そしてお年寄りのいる福祉施設での体験を通し、生徒たちに過去を振り 返えらせたり、将来について考えさせることで人生観を広げさせる。

また、職場体験に関しては、将来の職業の選択に役立てさせるとともに、養ってもらってる保護 者への感謝の気持ちを育てる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- 6月 職場・福祉施設に受け入れ折衝
- 7月 職場についての希望調査
- 8月 生徒が受け入れていただく職場や施設へ打ち合わせ訪問
- 9月 職場福祉体験実施(3日間)
- 10月 全校生の前で体験したグループごとに体験内容を発表
- 11月 発表内容がすばらしいグループは文化祭で発表

(2)授業の実際



【園児とのふれあい】

園児が思い通りに活動して くれず戸惑う場面もあった が、最終日にはとても仲良く なっていた。



【棚卸しの作業】

お客様に元気にあいさつすることの大切さや働くことの 大変さを学んだ。



【老人福祉施設での食事介護】

お年寄りの目線の高さに合 わせて向き合う姿勢や笑顔で 接することの大切さを学んだ。

(3)授業をふりかえって

3日間の体験に最初は戸惑いながらも日を追う毎に子どもたちがたくましく成長する姿がみられた。あいさつや笑顔の大切さなどが実感できたという感想が多かった。事業所からも生徒の態度についてまじめに取り組んでいたと大変好評であり、来年度もぜひ受け入れたいという声が多数であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

職場体験の職種に偏りがあり安全性の面からも生産業関係の事業所の受け入れが少なかった。 サービス業の体験が多かったが、生徒の希望に添えるように多様な職種の事業所を開発していく ことが来年度の体験活動の充実につながると考えられる。 教科名 (総合的な学習の時間、社会) 実施学年 (第5、6年)

| タイトル | 「森林を見る・遊ぶ・学ぶ・守る・くらす」環境教育 |
|--------|--------------------------|
| サブタイトル | ~森の案内人・地域人材の活用を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

三和(いわき)の自然環境に関わる様々な体験活動を通して、森林資源の持つ役割や、林業の果た す役割について理解させるとともに、自然を大切にする心と積極的に森林環境を保全する態度を育て る。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

9月に学校裏森林の自然観察・自然体験、10月にフォレストパークあだたらでの 森林観察・自然体験、木工クラフトの実施計画をたて、森の案内人4名と打合せをし、指導していただいた。

また、5年社会科の授業において地域の林業従事者と担任が事前打合せを持ち、三和町で森林を育 てる人々の仕事の内容、その工夫について話をしていただくよう計画し、授業を行った。

(2) 授業の実際

9~10月に実施した森林環境学習においては、森の案内人の方々に、植物や昆虫の観察、川の源流観察の指導や、森の間伐材や小枝を使っての木エクラフトの指導をいただき、身近な自然への興味・関心を高め、生物と環境とのかかわりについて学んだ。3月に実施した社会科の授業においては、三和町で森林を育てる過程やそこ



で働く人たちの工夫や努力、願い等について話を聞き、森林を育てる|社会科【森林を育てる仕事】

仕事や生活との深い結びつきをもとに、林業の果たす役割についてりかいすることができた。

(3)授業をふりかえって

子どもたちは、立ち止まって耳を澄ませたり、木の上を見上げたり、落ち葉の下をのぞいたりし、 たくさんの生物が生息していることや自然の不思議さに気づくことができた。また、三和町の現在の 林業の実態等から自分たちの住んでいる地域に興味・関心を持ち、自らの課題を解決しようとする主 体的な学習態度が身に付いた。

森林に携わる森の案内人や林業従事者の専門性を生かした授業を実施することで、子どもたちは自 然環境に親しみを持ち、森林環境を保全しようとする意識が芽生えた。教師にとってもよい研修の機 会となっている。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後も積極的に地域素材を生かし、専門的な知識や技能等を所持している方に協力いただきながら 学習の充実を図っていきたい。そのために、森林環境教育を教育課程に位置付け、計画的に見通しを 持って事前打合せ、教材の開発や準備を行い、授業の充実が図れるようにしたい。 教科名 (総合) 実施学年 (第6学年)

| タイトル | 「キャリア教育実践 ~はじめの一歩~」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | 〜地域のお年寄りと共に〜 |

1 自校の事業への取り組みについて

○ 本校はへき地校のため、周辺には田畑や山林が多く農業体験は実践しているが、会社等はほとんどなく企業体験が実施しにくい。そこで、高齢化社会問題と抱き合わせて近くのデイサービスセンターで介護体験を実施すれば、キャリア教育の一環として意味のあるものになると考えた。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- 事前学習については、担任とセンター所長間で電話にて内容について共通理解をもった。
- 事前にセンター所長(本校保護者)に来校していただき、老人介護の現状について話をしていただき、その後担任との間でその後の体験学習の目的や内容について話し合いをもった。

(2)授業の実際

2010 1.28 (木)

- 1 デイサービス到着
- 2 センター内見学
 - それぞれの施設についての説明を受ける。
- 3 介護体験について
 - ・ 所員からこれから実際に行う介護体験の仕方について説明を受ける。
- 4 介護体験
 - 入浴介護
 - 車椅子介護
 - ・ マッサージ等
- 5 交流会
 - 歌や演奏のプレゼント



入浴介護の仕方の説明を真剣に聞く児童



足裏マッサージで「気持ちいい!」

(3) 授業をふりかえって

【児童の感想】

- 介護の大変さがしみじみわかった。
- 家におじいちゃんやおばあちゃんがいるので、機会があれば学習したことをやってみたい。
- ・ 将来、ぜひ介護の仕事につきたい。

3 自校の取り組みの充実に向けて

小学生にとって、将来の夢は曖昧かつ一過性のものになりがちである。しかし、今年の4月から中学校に進学する児童にとって、進路を自分のこととして捉える3年間の学習はキャリア学習を進める上で非常に大切なものになってくる。その意味で、中学校と連携をとりながら小学校でもキャリア教育を推進していきたい。

| タイトル | 「収穫祭」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~「郷土料理を学ぶ」授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

作物を育てることからはじめ、郷土料理や昔ながらの料理、道具について学ばせることで、人々の生活や知恵に触れさせ、作る人や食物への感謝の気持ちを持たせる。また、作ったものを共に食することで地域の方々とのコミュニケーションを図る。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

作物を育てる時期については、指導していただく方と学校側で連絡を取り合いながら行った。 高学年については、教師が事前に連絡を取り、あとから児童に確認を取らせることが多かった。 収穫祭そのものについては、なるべく多くの方に参加していただくために、学校と児童の両方で 案内文を出した。

(2) 授業の実際

今まで体験したことがないことに挑戦した喜びと、自信が感じられ、楽しんで作業していた。自分たちで育てた作物を使って自分たちで作ったことで、食材や料理方法にも興味を持って取り組め、もっといろいろ体験をしたいという気持ちになった。また、地域の方々に積極的に話を聞く姿も見られ、地域の方も喜んで参加してくださっていた。



みんなで煮物を作ろう!

(3)授業をふりかえって

子どもたちは、体験そのものも楽しかったが、さまざまな知識を得ることができて満足していた。学校としても、地域との交流が図れ、学校だけでは身に付かない事を教えていただけて非常に有意義な取り組みであると思う。地域の方からも、子どもに教えたり、さまざまなと人と触れ合う時間ができると、好印象であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

来年度以降も引き続き実施していきたい。その中で、今年度とはまた、違った視点で交流できればと思う。たとえば、この地域にも高齢者の方が多いので、もちろん教えていただくことも大切であるが、学校側から地域の方へ手助けをする形の交流も考えていければと思う。

教科名(生活科・総合的な学習) 実施学年(全学年)

| タイトル | 身近な自然に親しみ、大切にしようという態度の育成を目指すいとなみ |
|--------|----------------------------------|
| サブタイトル | ~アタック遊歩道の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校校舎裏には標高約500mの山があり、毎年秋が深まった時期に「アタック遊歩道」と称して、毎年全校生でハイキングを行ってきた。主に体力の向上や強い心を身に付けさせることがねらいであった。

本年度はそれらに加えて、せっかくある身近な自然をより有効活用し環境教育の観点から、自然に 親しみ大切にしようとする態度の育成を図ることをねらいとして実践した。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

本校教員の中には、植物等自然に関する知識が豊富な者がおらず、そのため、<u>NPO 法人「福島県森の案内人の会」</u>に連絡し、講師を依頼することとした。「森の案内人」の方には、本校の教育活動のねらいについて説明し理解を頂くと共に事前に裏山に登ってもらい、学習内容について具体的に打合せをした。

当日は、学年の枠をはずし、全校生を3班に分け、それぞれの班に一人ずつ講師の先生についても らうこととした。

(2) 授業の実際

11月20日(金)、当日は天候にも恵まれ、10時30分に出発し12時20分帰校という予定で、班毎に山頂を目指した。教職員はそれぞれの班に分かれて引率した。途中、自生する植物の名前や特徴を学習したり、生息している動物について話をきいたりしながら全員山頂まで登り予定通り帰校した。その後、学習して分かったことを班毎に模造紙にまとめた。



森の先生の説明を熱心に聞く子どもたち

(3)授業をふりかえって

専門家の説明を聞きながら登って行くことで、子どもたちは、今まで知らなかった植物やそこに暮らしている動物について知ることができ、身近な自然に対する興味関心が高まった。そして、自分たちがその中で生きていること、同時に様々な生き物も共に生きていることを実感できた。

私は、森のエビフライやツルリンドウがたくさん見られてよかったです。 森のエビフライとは、リスが食べた跡の松ぼっくりのことです。タヌキが同じ

所に糞をしていることも初めて知りました。

この子どもは、森のエビフライについて、すぐ家人に話しており、授業参観の際、保護者が担任に「すばらしい教育活動ですね」と感想を話してくれた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

自然を理解し親しむ活動を更に、充実させるために専門家の知恵を借りながら教育活動の工夫改善を図って行くようにする。(例えば、四季折々に裏山の学習をするなど)

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5・6学年)

| タイトル | 「永井老人会の皆さんとの交流会」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~地域の高齢者の皆さんと触れ合おう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

○ 永井地区の発展に貢献した地域の高齢者の皆さんと家庭科の時間作ったおやつを食べたり、 伝承遊び一緒にしたり、昔の話を聞いたりすることにより、触れ合いを深め「永井地域のよさ」 をとらえることができるようにする。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

- ① 教頭より地区老人会長さんへ日程の交渉をする。
- ② 担任が具体的な実施計画を立て、校長・教頭の指導後、老人会長と話し合う。
- ③ 家庭科の時間を利用し、おやつを作る。
- ④ 下永井公民館に移動し、永井老人会の皆さんと交流会を行う。

(2)授業の実際

- ① 自分たちが準備した、おやつをおじいさん・おばあさん たちが「うまい、うまい」と喜んでたべてくれて、子ど もたちは、とても満足していた。
- ② 老人会の皆さんが先生となって、伝承遊びなどを教えて いとだくことにより、すばらしい交流の機会となった。
- ③ 永井老人会の皆さんの昔の話を聞くことにより、地域の 歴史に興味を持ち、郷土を愛することにもつながった。



じゃんけんゲームとおはじき

(3)授業をふりかえって

- ① 少子高齢化が進む永井の地で、このような交流会はとても意義のあることなので、今後とも 続けていきたい。
- ② 子どもたちからも高齢者の皆さんからも「やってよかった」という満足感があった。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ① 実施内容について、さらに子どもたちのアイディアを入れる等、改善を図っていきたい。
- ② 老人会長さんとの事前の話し合いに子どもたちの代表も参加させるなど工夫していきたい。

教科名(総合的な学習) 実施学年(第1学年)

| タイトル | 「郷土に生きる」 |
|--------|--------------------|
| サブタイトル | ~ 地域の森林環境について考える ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

郷土の特色を生かした生産的活動や自然体験的活動を通して、郷土を知りそのよさを理解するとともに、主体的に生きる力を養う。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- ○6月 グリーンフォレスタ代表と連絡
 - ・体験内容の依頼 ・日程の確認 ・班編成
- ○9月 グリーンフォレスタ担当と打合せ
 - ・準備・作業場の注意

(2)授業の実際

9月9日(水)湯の岳山荘にて

- 9:00 開会式の後、生徒たちは森林整備について講話を聞き、内容について質問をした。
- 10:00 森林保全の大切さを理解し、早速4班編成で、林内 観察や樹木の計測などの森林体験を行った。
- 13:00 昼食後、間伐体験を行った。係りの方の補助で実際 にチェーンソーで伐採を体験できた。また間伐材を 利用して木工クラフト、コースター等を製作した。 生徒は、興味を持って真剣に間伐作業に取り組み、また木工 の工作に楽しそうに取り組んだ。



間伐体験

(3) 授業をふりかえって

生徒作文では「森の健康診断が興味深かった。」「間伐体験が印象に残った。」という観想が多く、自分たちの地域の森林を大切にしようという意識が高まったようである。体験を通して自然や地域への思いを育てるよい機会となった。グリーンフォレスタの方々には、中学生に合わせて安全で実践的な体験を提供していただきありがたかった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

1年生はこのほかにも、炭焼き体験や農業の収穫体験を行った。これらは地元三和の方の協力で実現したもので、年間を通して、地域の自然から多くのことを学ぶことができた。今後も豊かな地域の人材を活用して教育効果を高めたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年(第2・3学年)

> 学校林の整備事業を通して,「昔の人の知恵」に学ぶ タイトル

サブタイトル ~ 森林環境学習「学校林」の整備事業から

1 自校の事業への取り組みについて

以前、校舎が木造であった頃、それぞれの学校でもっていた「学校林」。校舎建て替えまでに 自分たちで整備をしながら、校舎建築の材料を育て上げるという「校舎に対する思い」を労働の 面からも自然保護の面からも学習することの意義について、昔の人々の知恵に学ぶとともに、学 校林を通して地域の自然環境保全についても考えさせる機会にする。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

実施の前年に磐城森林管理署三坂森林事務所の方とともに、実地踏査をし、現地の様子や活動 にふさわしい季節・内容の検討を行った。また、現在の整備状況についての調査や危険箇所や予 測できる危険な事柄に対する対処法の確認を行い、万が一に備えられるように準備した。

(2)授業の実際

- 管理署の方の説明や取り組み方について真剣に話を聞き、 木が健康にしっかりと伸びることができるように、木の生 育を阻害する蔦を伐るなど,生き生きと活動していた。
- ・木の種類や植えられた経緯,今後の活用方法などについて, 積極的に質問をしながら,整備活動を行っていた。
- 自然のありがたさについて、お互いに確認しあっていた。



管理署員の注意の下 蔦を伐る生徒

(3)授業をふりかえって

地域がら山を持っている家庭があり、家族が山で木の手入れをしていたことと、今回の事業内 容を併せて、「自然とは自然の力だけで成り立っているものでなく、人間が手入れをしないとし っかりと成長していけないことがわかった。これこそが自然と人間の共存だと思った。」という 感想を書いた生徒がいた。地域の特色と併せた活動に少し近づいたようだ。これからも工夫をし ながら取り組みたい。

3 自校の取り組みの充実に向けて

次年度は赤井中学校との交流体験学習ということで、「学校林」の整備事業やそこから派生で きる取組について計画を立てている。今年度は「蔓伐り」や「間伐材の伐採」を行ったが、次年 度は人数も多くなるので、「自然と人間の共存」について深く掘り下げた事業を行っていきたい と考えている。

そのためにも,間伐材の活用方法についても調べ学習をしたり,実際に体験をしたりしながら, 活動内容の充実を図っていきたい。

教科名 (総合) 実施学年 (第1学年)

| タイトル | 「収穫祭」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~「郷土料理を学ぶ」授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

作物を育てることからはじめ、郷土料理や昔ながらの料理、道具について学ばせることで、人々の生活や知恵に触れさせ、作る人や食物への感謝の気持ちを持たせる。また、作ったものを共に食することで地域の方々とのコミュニケーションを図る。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

作物を育てる時期については、指導していただく方と学校側で連絡を取り合いながら行った。 教師が事前に連絡を取り、あとから生徒に確認を取らせることが多かった。収穫祭そのものについては、なるべく多くの方に参加していただくために、学校と生徒の両方で案内文を出した。

(2)授業の実際

今まで体験したことがないことに挑戦した喜びと、自信が 感じられ、楽しんで作業していた。自分たちで育てた作物を 使って自分たちで作ったことで、食材や料理方法にも興味を 持って取り組め、もっといろいろ体験をしたいという気持ち になった。また、地域の方々に積極的に話を聞く姿も見られ、 地域の方も喜んで参加してくださっていた。



みんなで煮物を作ろう!

(3)授業をふりかえって

子どもたちは、体験そのものも楽しかったが、さまざまな知識を得ることができて満足していた。学校としても、地域との交流が図れ、学校だけでは身に付かない事を教えていただけて非常に有意義な取り組みであると思う。地域の方からも、子どもに教えたり、さまざまなと人と触れ合う時間ができると、好印象であった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

来年度以降も引き続き実施していきたい。その中で、今年度とはまた、違った視点で交流できればと思う。たとえば、この地域にも高齢者の方が多いので、もちろん教えていただくことも大切であるが、生徒側から地域の方へ手助けをする形の交流も考えていければと思う。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「地域との連携から育む感謝の気持ち」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~森林学習「そば打ち体験」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

- (1) 体験の活動を通して、新たな発見に気づき、知識・技能を身につける。
- (2) 地域の特色を生かした体験活動に取り組むことによって、物事の視野を広げる力をつける。
- (3) 地域の施設・人材を活用することによって、地域との連携を強め、感謝の気持ちを育てる。 ことをねらいとする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

「そばの栽培」から「そば打ち」、「試食」までを体験する試み(地域活動型)・・・総時数8時間

- ①そばの種まき・・・1時間
- ③そばの脱穀・・・・2時間
- ②そばの刈り取り・・・2時間
- ④ そば打ち、試食・・・3 時間
- ※永井地区在住の、それぞれの分野で専門的な知識や技能を有する方を講師として招いて実施。

(2) 授業の実際

そば打ち体験(10/20火)

- ◇ 実ったそばの実から作られたそば粉を打ってそばを作る。
- 1. そば打ち名人による実演・・・(全体)
- 2. そばを打つ・・・・(グループ活動)
 - ① そば粉に熱湯と水を入れ、均一に混ぜ合わせる。(十割)
 - ② そば粉を少しずつ練りながら、一つのかたまりに練る。
 - ③ のし棒で伸ばしながら、慎重に平たく均一にしていく。
 - ④ 打ったそばをたたんでから、同じ太さに切る。
- 3. そばを大きな鍋で茹でる
- 4. そばを食べる

(3)授業をふりかえって

そば打ち体験

〈感想〉

生徒:種から自分たちで育てたそばは、とてもおいしかった。収穫ができてうれしかった。

地域:中学生は、思った以上にそば作りが上手い。将来が楽しみだ。教えた甲斐がある。

学校:地域の特徴を生かした体験活動に取り組むことにより、生徒の成長が見られ、良かった。 〈成果〉

生徒:育てることの楽しみや、収穫の充実感があった。地域の方にいろいろ教えていただいた。

地域:地域の中学生が、地元の特産物や生活に目を向け、ふれあいの場が持てて良かった。

学校:地域の方々に支えられ、特徴を生かした体験活動により、地域との連携が強められた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

体験の過程、〈種まき〉→〈刈り取り〉→〈脱穀〉→〈そば打ち〉の、全ての体験の流れは必要である。その時間の経過があってこそ、思いが深まる。多くの方々に支えられ、教えを受け、習得し、活用できるようになるまでの学習に感謝し、またその気持ちを強くしていくことが期待される。4回の体験活動の他にも、時折畑に足を運んで成長を確かめる活動があると、更なる充実につながると思う。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第5学年)

| タイトル | 「伝承遊びの会」 |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~「地域のお年寄りとの交流を深めよう」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域のお年寄りの方々との交流を深める中で、普段なかなか触れることのできない伝承遊びに楽 しく取り組むことができるようにする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

学校支援地域本部のある小川公民館のコーディネーターの方にお願いし、小川地区学校支援ボランティア登録者の中から、小川地区老人クラブ連合会を選んでいただいた。その後、本校5学年主任が直接、老人クラブ連合会長と内容や方法、時間、人数、役割等について打合せを十分に行い、当日支障のないようにした。

(2)授業の実際

子どもたちは、グループに分かれて「縄ない」「お手玉作り」 に挑戦した。お年寄りのアドバイスをうけながら、子どもた ちは、慣れない手つきで作業に取り組んでいた。できあがっ た縄で「縄跳び」や「お手玉遊び」を子どもたちは体験し、 体育館いっぱいに歓声を響かせることができた。



縄ないの体験活動

(3) 授業をふりかえって

子どもたちは、内容や方法をよく理解して活動できた。

- 「互いのよさを認め合い、助け合って生活できる」という高学年の目標にせまる活動ができた。
- ・ 地域のお年寄りの方々との交流を通して、どちらもより親近感を持つことができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 学校支援地域本部との連携をさらに深めていきたい。
- ・ 子どもたちの体験活動が日常生活に生かされるよう、内容を検討し、活動の場と時間を確保していきたい。

教科名(生活科) 実施学年(第2学年)

| タイトル | 「地域の自然や環境を生かした学習」 |
|--------|--------------------------|
| サブタイトル | 地域の人々との交流 ~「そば打ち体験」を通して~ |
| | от 16 4H и 1 — 1 — 1 — 1 |

- 1 自校の事業への取り組みについて
- 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え会う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽 しさが分かり、進んで交流することができる。

2 実践授業

(1)授業計画にあたって

- 事前に、担任と「そば打ち体験」の講師である「二ッ箭そば打ち研究会」代表の方との打ち合わせ。
- ・当日の活動の目的の確認、時間、場所、班編制、材料などの確認

(2)授業の実際

- そば粉に熱湯を加え、手早くまぜる。粒状になるまでよく手の ひらでもみほぐし、水を加えまとめる。耳たぶほどの堅さになるま で練る。打ち粉を使いながら厚さにむらがないように棒をやさしく 回転させながらのばす。約2mmの厚さにし、重ねて折りたたむ。 打ち粉をふり、こま板をあてて前に押し出すように切っていく。包 丁は前に下ろし、包丁を戻したときに、こま板が次のめんの太さの 分だけスライドするように切る。
- そばをはじめから自分たちで作ってみると、普段お店で食べる のとは食感が違った。
- 地域のみなさんや保護者のみなさんにも手伝っていただき、おいしいそばができあがった
- 「二ッ箭そば打ち研究会」の人たちと進んで交流をすることができた。



そば打ち体験

(3) 授業をふりかえって

- こどもたちの感想をみると、そば打ちの体験学習から新たな気づきや発見をした子どもが多かった。 また、新たな知識・技能も身につけることができた。
- 地域の人材活用により、地域との連携を深め、感謝の気持ちを持たせることができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 児童に対する継続的指導は、もちろん、教員も技術や知識を身につけ系統的な指導ができるようにし

たい。さらに地域との連携を深め、この体験が一過性のものではなく広く浸透するようにしていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「美しいハーモニーを求めて」 |
|--------|-----------------------------|
| サブタイトル | ~ 合唱コンクール「心を合わせて歌声に」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

文化祭(夏井祭)で行う、クラス対抗の合唱コンクールで、美しいハーモニーを響かせるために、各学級で、生徒一人ひとりが話し合いの中で、自分の役割を自覚し、お互いを尊重しあうことで、心を合わせて美しい声で合唱を作り上げていった。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

学校支援地域本部事業を活用し、小川公民館に合唱指導ができる講師の先生を紹介していただき、学校として指導していただきたい時間を公民館を通してお願いし、実施できるようになった。

(2)授業の実際

講師の先生は、いつもは大人の合唱グループの指導を行っているので、音楽担当の教師とは違った観点で、合唱の指導をしてくださり、生徒にとって大きな感動を得ることのできる指導だった。

発声方法及び言葉の発音や意味、声の合わせ方など丁寧な 指導で合唱のすばらしさやハーモニーの美しさを確認でき た。



代表指揮者による全体合

(3)授業をふりかえって

子どもたちは、合唱コンクールで、自分たちが美しいハーモニーで歌えたことに感動し、保護者の皆さんや教職員も、立派に歌い上げた子どもたちの姿に感動した。

3 自校の取り組みの充実に向けて

合唱に限らず、美術の分野での造形や絵画の指導ができる方にも講師としてきていただける機 会を設けたい。

また、環境の整備についても、草花を育てたり、整えたりなど、子どもたちとともに指導していただける機会も設定したい。

教科名(生活科・総合) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「川前の特産物をもっと知ろう」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~ぶどう栽培を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

過疎化が進む中、地域の特産物であるぶどうの栽培を行うことにより、児童が地域のよさを再発見し、 ふるさとに誇りを持つ機会とする。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

学区内にあるぶどう園を営んでおられる方のご好意により、本校児童専用の区画を設けていただき、 あわせて講師として栽培指導もいただいている。年度始に担当の職員と講師の方との打ち合わせを行 い、その後も随時連絡を取り合い、効果的に栽培活動ができるよう留意している。

(2)授業の実際

経過 4~8月 ぶどうの手入れ・観察

(剪定・誘引)

9月 ぶどうの収穫

2月 ぶどうの手入れ・学習のまとめ

・ 児童の学習状況

講師の方が丁寧に指導してくださるので、初めて作業する児 童も抵抗なく活動が進められた。収穫時には、自分が育て たぶどうを味わうことができ、喜びもひとしおであった。



~講師の方から説明を受ける~

(3)授業をふりかえって

- ① 地域の特産品を育て味わうことは地域の良さの再発見につながった。過疎化が進む中、地域の 良さを体験することは、ふるさとに誇りを持つことができるよい機会であった。
- ② 地域の方に学校教育に参加していただくことにより、地域の人々と交流を持つことができた。
- ③ 児童を通じて保護者、地域に連携融合先の活動の内容を広めることにつながった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・ 本校ならではの貴重な体験ができる学習であることから、今後もこの活動を継続できるよう、諸 条件を整えていきたい。 教科名 (総合・生活科) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「わたしたちそば名人」 |
|--------|-------------|
| サブタイトル | |

1 自校の事業への取り組みについて

・ 地域の特産物であるそばを使い、川前そば組合の方々の指導の下、子どもたちといっしょにそばを打ち、会食することで、地域の良さを知り、地域の方々とふれあう場とする。

2 実践授業にあたって、

(1)授業計画にあたって

・ 川前そば組合の方々、公民館と教頭が中心となって交渉を行う。

(2)授業の実際

・ 毎年継続して行っている行事なので、子ど もたちも慣れた手つきでいっしょうけんめいそば 打ちを行っている。指導を受けながら2時間くら いで、そばができあがる。講師の方々も子どもた ちといっしょにそば打ちを行うことで、楽しい時 間を過ごしている。



(そばをうつ子どもたち)

(3) 授業をふりかえって

- ・そばうちをいつも楽しみにしています。今年は、去年よりも細く上手にそばを切ることができて 良かったです。(2年)
- ・ほかの学年の人たちと協力してそばをうてて楽しかったです。 (3年)

(4) 自校の取り組みの充実に向けて

・川前地区では、10~11月にかけてそば打ちがさかんに行われ、そばに対する関心が高い。また、身近なところでそばを栽培しているところが多く、子どもたちもそば打ちを地域の良さとしてとらえている。今後もこの地域のよさを継続して行い、本校としてのよりよい伝統としていきたい。

教科名(行事) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「子どもの健やかな育ちを願ういとなみ」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~しめ縄をつくろう~ |

1 自校の事業への取り組みについて

・しめ縄を自分たちの手でつくるために、地域の協力者の方に教えてもらう。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

・しめ縄作りを教えてくださる方は、学校の用務員さんなので、子どもたちから実際に指導のお願いをした。

(2) 授業の実際

・中学生も一緒に行ったので、難しい部分はお互いに教 え合ったり、助け合ったりできた。指導して下さるほう も特に小学生の低学年を中心に支援をしてくださった。



しめ縄作り~中学生も一緒に~

(3) 授業をふりかえって

- ・子どもたちはそれぞれ一生懸命しめ縄を作ったので、満足していた。難しいと思っていた児童も 上手にできて達成感が味わえた。
- ・学校の教員だけでは教えられなかったので、子どもたちに貴重な体験ができたことを感謝してい る。
- ・教えてくださった方は、子どもに大切な伝統文化が伝えられることができて嬉しいと話していた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

・今後もこのような学社連携事業を続けていくとともに、更に効果的な方法や内容がないかどう検 討していきたい。 教科名 (総合) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「地域のお年寄りとの心の交流」 |
|--------|-----------------|
| サブタイトル | ~門松作り・配付を通して~ |

1 自校の事業への取り組みについて

川前地区は過疎化が進み児童生徒数の減少という問題に直面している。同時に、住む人々の高齢化 が進み、一人暮らしの老人も多い。そのため、地域の次代を担う人材としての児童生徒の成長や教育 に対する関心や期待は非常に高く、体験活動への協力も熱心である。

本校では、地域社会との連携・融合の一つの在り方として、地域の人材を講師として招いて一緒に 門松を作り、一人暮らしのお年寄りに配付する活動を実践し心の交流を図るとともに、地域への感謝 の念や地域社会の一員としての自覚を深めさせたいと思い、この事業を計画した。

2 実践授業について

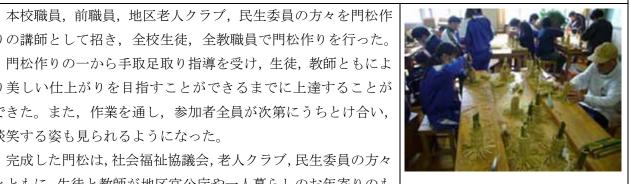
(1)授業計画にあたって

| 平成21年11月9日 | 計画立案(校内企画会議) |
|-------------|----------------------------------|
| 平成21年11月12日 | 川前地区社会福祉協議会による事業の計画運営についての指導助言 |
| 平成21年11月20日 | 地区民生委員による地区のお年寄りの現況に関する情報提供の協力 |
| 平成21年11月30日 | 地元在住の本校職員、前職員による材料の調達(竹、松、梅、南天等) |
| 平成21年12月9日 | 門松作り(平成21年12月11日 門松配付) |

(2) 授業の実際

りの講師として招き、全校生徒、全教職員で門松作りを行った。 門松作りの一から手取足取り指導を受け、生徒、教師ともによ り美しい仕上がりを目指すことができるまでに上達することが できた。また、作業を通し、参加者全員が次第にうちとけ合い、

完成した門松は、社会福祉協議会、老人クラブ、民生委員の方々 とともに, 生徒と教師が地区官公庁や一人暮らしのお年寄りのも とへ一軒一軒配付した。



門松作りの様子

(3) 授業をふりかえって

談笑する姿も見られるようになった。

事後指導における生徒作文等からは、生徒一人ひとりに地域の一員としての自覚や感謝の気持ち、 思いやりの心の深まり等の心の変容が見られた。また全教職員が参加することにより、地域の人々と の連携が深まった。地域では子ども達の訪問を心待ちにしてくれているお年寄りも多く、今後も是非 継続していきたい事業である。

3 自校の取り組みの充実に向けて

生徒の減少、時数の確保などの課題は多いが、学・社の交流や子どもたちの豊かな体験の場として の本事業の意義は極めて大きい。常日頃の学校からの情報発信を積極的に行い、教育活動への理解と 支援を得るとともに地域の諸団体や人材との連携をより深め、取り組みを充実させていきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「ふるさと学習」 |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~門松作りと寝たきり・一人暮らしのお年寄り宅訪問~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域の文化や伝統に対する理解と関心を深めさせるため、体験的な活動を通して、地域の方々と楽しくふれあう。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

児童・青少年福祉体験学習として社会福祉協議会と連絡を取り合いながら、授業に協力できる 民生児童委員、主任児童委員、川前地区老人クラブ、川前地域協議会の方々をとりまとめていた だいた。

それをもとに学校で生徒の班をつくり、当日スムーズに活動ができるように調整した。

(2) 授業の実際

「ふるさと学習」の門松作りにおいて、生徒たちは、民生児 童委員や老人クラブの方々などから作り方を丁寧に教えて いただき、立派に門松を作ることができた。そして、作った 門松を班に分かれてお届けし、お年寄りの方にたいへん喜ば れた。生徒たちは、機会あるごとにお手紙を書いて交流して いたお年寄りに直接渡せたことで活動への意欲がさらに高 まった。



門松作りの様子

(3) 授業をふりかえって

- ○生徒にとっては、地域の方々との触れ合いを通して、地域社会の一員としての自覚が高まった。
- ○学校として、地域の方々と連携を図ることで、学校の教育活動に対する地域の理解と協力を得ることができた。
- ○授業に協力していただいた地域の方々においては、一つの行事を学校と連携・協力しながら実施することで「地域の子ども」としての同じ視点に立って子どもの教育にあたるという意識の高まりが見られた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

本校は、年々生徒数が減少しており、門松作りに対する生徒の負担が大きくなってきているのが現状である。次年度から、少人数でも継続的に作業可能で地域の伝統的な正月飾りをつくり、 寝たきりや一人暮らしのお年寄りの方々との交流を深めていきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「小白井神楽」 |
|--------|---------|
| サブタイトル | |

1 自校の事業への取り組みについて

地域の方々とのふれあいを促す事業である。

地域の伝統文化の練習、発表を行うことによって、郷土愛を高め、生徒相互、生徒と教師及び

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

毎年地区の敬老会長を講師として、指導を受けている。ただし、本年度は諸事情により過去の ビデオ映像を見たり、生徒間で相互に助言しあいながら、生徒と教員が一体となり練習に励んだ。

(2) 授業の実際

全校生、全教員で取り組んだので、心を一つにし、協力し あう意識が高まった。また、互いに教えあうことで、コミュ ニケーション能力が向上した。生徒の表情も生き生きとして



小白井神楽が福を呼ぶ!

(3) 授業をふりかえって

土愛も高まった。

伝統的に続く芸能を身につけることで、地域に生活する住民としての意識、連帯感さらには郷

3 自校の取り組みの充実に向けて

地域に住む経験者の方々の講習を受ける機会を多く設定し、学校と地域の連帯感を一層高めた

۱,°

いた。

教科名(総合) 実施学年(第4学年)

タイトル 地域環境を動・植物、ゴミの調査から考えてみよう サブタイトル 大久川流域調査 ~上流から海岸まで~

1 自校の事業への取り組みについて

地域の環境調査を切り口とし

- ① 調査の仕方、結果のまとめ方など研究のしかたを学ぶこと、
- ② 調査をしながら思ったこと、感じたこと、調査をまとめながら考えたことを整理し、伝えたいことを発表できることをねらいとして取り組んだ。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

この学習は県の「せせらぎスクール」とタイアップしており、調査キッドを使用し、子どもたちが、課題設定から調査の方法、まとめ方まで分かりやすく学習することができる。また、毎年4年生の学習としており、経年観察・調査により環境の変化をつかむことができる。学び方を学ばせる、地域の環境の変化を捉える学習であることをおさえて進めていくことを確認した。

(2) 授業の実際

棲息する生き物は川の水質(きれいさ、きたなさ)を判断する指標となっている。はじめは生き物を捕まえることに夢中であった子どもたちも、調査をまとめていくに従い、川の様子を判断できるようになっていった。きれいさ、汚さを示す生き物が一緒に棲息していることもわかり、ここから子どもたちが大久川をどのような川ととらえればよいのか考えることになり、豊かな学びにつながっていった。

また、この学習と同じように川の上流を久之浜二小が、川が流れ込む海岸を久之浜中学校がそれぞれ学習の対象としており、学習の発展的な取り組みとして、久之浜の青少年育成市民会議のお力添えで、3校が連携し、大久川と久之浜の海岸の環境について考え、思ったことを発表する機会をいただけることになった。元小学校校長先生がコーディネーターとしてそれぞれの学校の取り組みをつないでくださり、公民館のホールを埋めた大勢の地域の方々にも、地域の環境を考えていただくきっかけとすることができた。



水生生物の分類中

(3) 授業をふりかえって

今年度のような発展的な取り組みは、子どもたちにとって学習したことが意義のあることと感じることができ、達成感を得ることができたと思う。地域の環境に対する関心は例年以上に高まったのではないかと思われる。また、課題解決の一連の流れが習得でき、学び方を学ぶことができたと思う。

3 自校の取り組みの充実に向けて

今後も継続して調査し、地域の環境により関心を持つ子どもを育てて生きたいと考える。そのためにも、今回地域の方々との連携・融合事業として発展させることができたことは大きな意味がある。

より多くの子どもが参加できるような仕組みについても検討していけるようになるとよいと思った。

教科名(図画工作科) 実施学年(第5・6学年)

| タイトル | 「焼き物をつくりだす喜びを味わい、ものづくりを楽しむ」 |
|--------|-----------------------------|
| サブタイトル | ~「新谷焼き体験」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

低学年の頃に、油粘土で自分の思いのままに形作ることを体験した児童にとって、粘土からできる焼き物は、あこがれである。本校では、ここ数年来、学区内にお住まいで新谷窯を持つ新谷辰夫先生に、焼き物の指導を受けている。「高学年になって焼き物をしたい」と願う児童に、焼き物というものづくりの楽しさや造形のおもしろさを味わわせたいと考えて、本実践に取り組んでいる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

毎年、10月から12月にかけて3回の体験の場を設けている。①成形(3時間)、②絵付け(1時間)、③鑑賞会(1時間)の3回である。成形は仕事場で行い、絵付けと鑑賞会は学校で実施する。新谷先生との折衝は、主に日程の調整である。児童の活動と活動の間は、新谷先生によって釉薬を塗ったり窯で焼いたりする作業が入り、数週間を要する。

(2) 授業の実際

成形

指導を受けながら、児童は粘土のかたまりから皿や置物など思い思いの作品を形作る。6年生は、ロクロによる湯飲みにも挑戦し、粘土の微妙な厚みの変化を指先で感じながら、作品の出来映えに満足げであった。

② 絵付け

素焼きしていただいた作品に絵付けをする。1色ではあるが、濃淡の出し方などを指導していただいた。

③ 鑑賞会

本焼き後、個性的な作品が仕上がり、互いの作品を鑑賞した。



ロクロを使って茶碗を形作る

(3) 授業をふりかえって

児童にとっては、本格的な焼き物を体験できるよい経験となった。特に、できあがった作品について新谷先生がそのよさをほめてくださり、児童も満足げであった。また、教師にとっても、新谷先生が指摘した着眼点をその後の鑑賞の指導等に生かすことができるメリットがある。

3 自校の取り組みの充実に向けて

昨年度まで実施していたことだが、今年度は、新型インフルエンザが流行する時期と重なり、できあがった作品を下級生に紹介する機会を設けることができなかった。来年度は、鑑賞できる場を設定し、下級生には焼き物に対する期待を、5・6年生にとっては自分の作品への自信と愛着とを深める場としたい。

教科名(理科) 実施学年(第1学年)

| タイトル | 「化石講座」 アンモナイトセンター公開シンポジウム |
|--------|---------------------------|
| サブタイトル | ~ 「いわきの地層とアンモナイト」の講座から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

久之浜は有名なフタバサウルス・スズキイの産地である大久川が流れる。また、その上流部からは巨大アンモナイトが発掘され、現在は市立のアンモナイトセンターが建てられている。学校周辺には縄文時代の連郷遺跡があり、多くの土器や石器が出土している。このように郷土を知る手がかりが町内のあちらこちらに残されており、その一つひとつを学んでいくことが郷土、地域さらには自分を知ることにつながると考え、この題材を取り上げた。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

前々年度はスクール・ボランティア講座の一環として、フタバサウルス・スズキイの発見者を お呼びして話を伺う計画を立てたが、日程が合わず実現しなかった。その代わりとして連郷遺跡 について考古資料館の学芸員の方に話を頂いた。前年度末に、アンモナイトセンターの職員の方 から公開シンポジウムの依頼があり、久之浜一小、二小の6年生58名と本校1年生63名が共 同で講義を受ける形で実現した。日時は8月31日(月)午後1時半より本校体育館で、講師に 川村学園女子大学教授で、理学博士の二上政夫氏をお招きし理科の授業として行った。保護者2 1名も参加した。

(2)授業の実際

二上先生は講義形式で、いわきの地層が双葉までつながっていること、さらにそこから発見された化石が多くあること、とりわけアンモナイトは世界でも類を見ない貴重な標本であることを、スライド等を使って説明された。その後生徒3、4名がアンモナイトについての質問をし、理解を深めることができた。

生徒にとっては地層など未習の事項もあったが、興味・ 関心を高めるという目標は達成することができたと思う。 親しんできたアンモナイトセンターが貴重な施設である ことも再認識することができた。やや内容が難しかった点 もあったので、事前に詳しい打ち合わせをすべきであった と感じている。



講義をされた二上先生

(3)授業をふりかえって

小学校時代アンモナイトセンターを訪問している生徒も多い。今後、体験をするなど学習したことを深める手だてが必要であると思う。ただ、状況からいえば、2年前にセンターまでのバス路線が廃止され、自由に行き来できなくなったのは惜しまれる。その他、海竜の里で毎年行われる海竜の里まつりなどへの参加も一つの方法である。

3 自校の取り組みの充実に向けて

この他にも、地域の資源の活用を図っていきたい。例えば、漁業、農業、炭坑、町おこし、郷土出身の有名人など教材化できるものを、町づくり協議会やミニコミ誌、各種団体との連携をとりながら発掘していく必要がある。

| タイトル | 「上遠野たんけん」 |
|--------|-------------|
| サブタイトル | ~やしおみ荘での交流~ |

1 自校の事業への取り組みについて

○ 学校のすぐ近くにあり、遠野町の重要な施設である「やしおみ荘」を見学、交流を図ることにより、施設ではどのようなことが行われ、どのような方が入所して過ごしているのかを知り、施設への理解を深めること。また、施設の方々との今後の交流について、考えることができるようしすること。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- 夏季休業中、施設との交流と見学の許可を得るため、担任が施設を訪問する。
- 施設の概要や、交流できそうなこと、今後長く施設と学校が連携することの大切さなどを伺 う。

(2)授業の実際

- 施設の職員さんから説明を聞き、施設がどのようなところであるのか理解していた。
- 入所されている方々をお世話しやすいように工夫されたお風呂や設備を直接見ることができ、多くの児童が驚いたり、感心したりしていた。
- 入所している方々が作業している様子や、フラワーアレンジメントに取り組んでいる様子を 間近で見ることができ、入所している人たちに親しい感じを覚えているようだった。

(3)授業をふりかえって

- すぐ近くにある施設でありながら、どのような人たちがくらし、どのような人たちが働き、 どのようなことをしている施設であるかということは知らない児童が多かった。しかし、今 回の見学で、子どもたちは施設でくらす人や働く人たちについて知り、身近な存在であるこ とを感じたようだった。このことは今後、町の一員として施設と交流を続けることにもつな がっていくのではないかと思われる。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 今後も、やしおみ荘との交流の機会を設けるなどの取り組みをしていく。

教科名(社会科) 実施学年(第3学年)

| タイトル | 「地域とのかかわりを大切にした学校運営」 |
|--------|----------------------|
| サブタイトル | ~遠野和紙漉き体験の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

本校では、社会科や理科、生活科、総合的な学習の時間などで地域のひと・もの・ことを教材として積極的に取り上げることにより、学習への関心・意欲を高め、地域のよさを実感したり、地域の方々との結び付きを強めたりすることができる子どもの育成を目指している。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

第3学年社会科「わたしのまち みんなのまち」の学習において、入遠野地区の自然環境や伝統的な産業についてふれる機会を設けたいと考え、遠野和紙を取り上げることとした。同時期に行われる遠足と関連付け、目的地を遠野町オートキャンプ場に設定し、そこで紙漉き体験ができるよう、ボランティア講師の方の手配など、キャンプ場側と連絡調整を行った。

(2)授業の実際

- ① 本物の紙漉きの道具を見せてもらう。
- ② 実際に紙を漉いているところを見て、やり方を知る
- ③ 自分たちも、葉書大の木枠で実際に紙漉きを行う。
 - ・ 楮が均一に広がるように
 - ・ 和紙の中にもみじなどを織り込みながら
- ④ 漉いた紙を乾燥台で乾燥させる。
- ⑤ 実際に活動した感想や、お礼の言葉を述べる。 (後日) 完全に乾燥した手漉き葉書に絵や文字を かいて、自分だけのオリジナル葉書を完成させ る。



ボランティアの方に紙の漉き方を 教えてもらったよ

(3) 授業をふりかえって

- 実際に体験することを通して、自分が住んでいる地域に伝わる技術にふれ、その難しさや伝えていくことの大切さを感じていた。
- ボランティアの方々にとって、地元の子どもたちへの指導を通して、地域のよさに目覚め、 地域に根差した人材が育ってくれることを期待していることが伝わってきた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- 各教科や総合的な学習の時間のねらいを達成するため、地域や関係諸機関と関連を図った取り組みについて、時期や内容を吟味し、積極的に計画・実践していくことが大切である。
- 地域の人材・施設設備に関しての情報を今後も積極的に集め、学校側のねらいの達成とともに、 連携側の目的も達成できるような、効果的な学社連携・融合の活動を展開していきたい。

教科名(総合的な学習の時間) 実施学年(第1学年)

| タイトル | 「歴史再発見から育む郷土愛」 |
|--------|------------------------|
| サブタイトル | ~ 地域学習「八潮見城の歴史」の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

地域学習「八潮見城の歴史」では、地域の案内人を講師として依頼し、地域の歴史的財産である 旧跡を実際に探検することで詳細に話を聞くことができる。毎年、第1学年を対象に総合的な学習 の時間を使って行っている。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

4月に年間計画を伝え、講師の都合のつく限り、学校の予定に合わせた日程で実施している。雨 天の場合も想定し、室内での講義も予定に入れている。

(2)授業の実際

1クラス20人程度の生徒が、講師の後に続いて登山し、 要所要所で鎌倉時代の歴史について講師から当時の状況を 想像しながら傾聴していた。また、その中からさらに疑問点 があれば質問をし、さらに詳しい知識を得ようとしていた。 「私たちのふるさと」を学年のテーマに設定し、この調査か ら、幅広い知識を身につけることができた。



鎌倉時代の様子を想像しながら

(3)授業をふりかえって

- ○生徒たちは地域への愛着と地域の一員としての自覚を高めることができた。
- ○学校としては地域教材の開発や地域資源の活用が図られ、学校への理解を深めることができた。
- ○生徒が授業として歴史探検を行うことで、地域としても整備を充実させようとしている。

3 自校の取り組みの充実に向けて

諸行事を通して学校・生徒・地域との連携をさらに深め、より積極的に地域と関わっていきたい。 また、地域の方々や事業所との関係及び学校の教育活動への理解を促進していきたい。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (第1・2・3学年)

| タイトル | 「子どもの豊かな心を育む体験活動」 |
|--------|-----------------------|
| サブタイトル | 「~伝統工芸「里山体験学習」の授業から~」 |

- 1 自校の事業への取り組みについて
- ①地域の自然、人材、風土を行かした郷土に伝わる様々な伝統工芸を理解し、郷土を愛する心を養う。
- ②伝統工芸(匠の技)を地域の人材から学び、触れ合いを通して人間性や社会性の育成を図る。
- 2 実践授業について
- (1)授業計画にあたって
- ※ 毎年、教育課程の「総合的な学習の時間」に位置づけて実施している事業である。 例年5月~6月にかけて学区内にある遠野オートキャンプ場を訪れ体験活動を実施している。事前に実施内容・体験人数の割り振り・準備物についてキャンプ場担当者と詳細に検討している。
- ※ 割り振り人数が決定した後、5つの工芸(野鍛冶・炭焼き・わら細工・桶作り・竹細工)ご とに、生徒の割り振り・内容・準備物等について全学年で協議決定していく。

(2)授業の実際

- ①事前学習・・・2時間(総合的な学習の時間)
 - ・里山体験の概要説明(1時間)
 - ・里山体験の内容及び割り振り等(1時間)
- ②里山体験学習···2時間×2日
 - ・1回目を5月下旬に実施。その道の達人と言われる地域の職人に説明を受けた後、指導を受けながら各工芸体験を実施。
 - ・2回目を1週間後に実施。前回の作業の続きを 、職人の方の指導を受けながら仕上げを行い、 工芸品を完成させる。
- ③事後指導・・・秋の「学習発表会」に工芸品を展示し、生徒が地域の方々に説明等を行った。生徒は伝統工芸の貴重な体験を通し、とても興味・関心を抱いた。また、地域の方々との触れ合いを通して、人間性や社会性を育むことができた。



地域人材を活用した「わら細工体験」

(3) 授業をふりかえって

【生徒】全校生が参加しているが、殆どの生徒がとても意欲的に取り組んでおり、普段なかなか体験できない伝統工芸の素晴らしさを肌で感じることができた。

【学校】本校での里山体験活動は地域と密着している。この他にも「遠野和紙」の体験活動を実施しているが、郷土理解・郷土愛を育む最良の「生きた教材」である。今後も教育課程に位置づけ推進していく方針である。

【地域】地域の人材を有効活用するための基盤となる遠野オートキャンプ場が学区内にあることで、学社連携事業が容易に実施できる環境にある。地域からは卓越した伝統工芸の技を地域の子供達に伝授する絶好の機会であるととても好評である。

- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- ※ 毎年「里山体験学習」を実施しているが、三年間で三種類の伝統工芸を学び体験できる貴重な事業である。
- ※ 教育課程に位置づけた本校の体験学習の重要な活動であり、地域との連携や伝統工芸の継承 の観点からも今後も継続していくべき事業である。
- ※ 新学習指導要領の完全実施を翌々年に控え、「総合的な学習の時間」の活動内容の精選が必至になってくるが、「里山体験」「紙漉体験」は、地域と共にある本校独自の特色ある体験活動であると認識し、今後も工夫・改善を加えながら充実を図っていく。

教科名 (総合的学習) 実施学年(第3・4学年)

| タイトル | 地域のよさにふれる ~ 乞くさんの ひっくり むきめき ~ |
|--------|-------------------------------|
| サブタイトル | ~特産物「こんにゃくづくり」の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

ねらいは、次の通りである。

- 地域のよさ(自然・特産物・歴史・祭りなど)を意欲的に体験したり、調べたりすることできる。
- 地域の人々の姿勢や考え方や友達の学びのよさに触れることで自分の考え方や学び方をふりか えることができる。
- 見通しを持って調査活動をするとともに、適切な表現方法を身につけることができる。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

- (1) こんにゃくづくりを調べよう(18時間)
- ① 学習課題を設定する(4時間)・こんにゃくとの出会い・イメージマップづくり・ウェビング
- ② 学習の見通しを持つ(1時間)・学習計画表づくり
- ③ 計画にそって調べ学習をする(3時間)
 - ・こんにゃく芋の栽培法 ・こんにゃくの作り方 ・こんにゃくのよさ
- (2) こんにゃくづくりを体験しよう(3時間)・手づくり体験…学社連携・融合事業
- (3) 体験したことや調べたことをポスターにまとめよう (7時間)
 - ・ポスターづくり ・ポスターセッション
 - ※ この他に、こんにゃく栽培農家の見学、こんにゃく芋の栽培や観察等を行う。

(2) 授業の実際

学習課題を設定した後に、個人で調べ活動を行った。

その後、地域でこんにゃくづくりをしているMさんを 講師として、こんにゃくの作り方を教えていただいた。 また、自分たちでいろいろなアイディアこんにゃくをつ くって全校生に試食してもらうなどの活動を展開した。 最後に、ポスターづくりをして学習のまとめを行っ た。



授業の様子を伝えるポスタ

(3)授業をふりかえって

地域の特産物であるこんにゃくを取り上げることで、子どもたちが意欲的に追究活動を展開した。 特に、自分たちが栽培したこんにゃく芋を原料にして地域の方にこんにゃくづくりについて教わった こと,アイディアこんにゃくを試作する活動等が有効であった。こんにゃく料理のレシピ集を作るな ど自ら追究活動をする子どもも多くみられた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

他教科等の学習との関連を図り学年間の発達段階を踏まえた年間指導計画を作成しながら、地域の 人材等を生かした学習活動を展開していきたい。

教科名 (総合的な学習の時間・生活科) 実施学年 (第1~6学年)

| タイトル | きりんこりん 「わたしたちの木林子林」 |
|--------|------------------------|
| サブタイトル | ~落ち葉のゆくえ~ |

1 事業への取り組みについて

いわき市南部の山間部に位置する本校は、目の前に入旅人川が流れ、周囲をスギ林や雑木林に囲まれた自然豊かな環境の中にある。車で10分程度のところに雑木林の学校林がある。これら地域の環境を生かした森林環境教育を行うことで環境問題への意識や郷土愛を高めることをねらいとしている。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

森林を活用した環境教育を充実させるためには、体験と知識を結びつけ、森林の働きを実感させる必要を感じていたが、教師だけでは活動が充実させられず、専門知識と技術を身につけている「いわきの森に親しむ会」の協力を得ることにした。学校側から子どもの実態や授業のねらいを伝え、打ち合わせをすることにより、調べ学習で得た知識と目前の森林とを結び付けられる活動を行うことができた。

(2) 授業の実際

子どもたちは、調べ学習で、森の中の動植物は、互いにつながり合っていることを知識として持っていた。そこで、どのようにつながり合っているのかを、落ち葉が分解される過程を観察して考えた。

低・中・高学年の3グループに分かれ、指導員と一緒に、落ち葉を上から層ごとに5つに分けて白紙に乗せ、その違いを観察した。

- 1層目は葉の形がそのままで乾いている。
- 2層目は葉が黒くなって湿っている。
- 3層目は葉の形が崩れ、湿っていてにおいがする。
- 4層目は葉が粉々になり、糸状菌が見られる。
- 5層目は湿っており、土になっていてにおいがする。

これらのことをワークシートにスケッチと文で記録した。子どもたちは、指導員から、下の層へ行くほど葉が薄くもろくなり土に変わっていく様子や、それらにかかわる菌類や昆虫、微生物の話を聞きながら観察を続け、「へ~。」「わ~ほんとだ。」「土がさらさらふわふわしている。」などと声をあげていた。これらの活動を通して、落ち葉が様々な生物のかかわりの中で土へと変化していくことを理解することができた。また、これまで意識してこなかった目に見えない微生物の存在をも理解するようになってきた。



層ごとに変化を観察



指導員の話を聞きながら観察

(3)授業を振り返って

専門家の適切なアドバイスをもとに、自分たちの学校林で学習することで、教室で学んだ知識を体験と結びつけることができた。子どもたちは、身近にある森林が環境に対して重要な役割を果たしていることに興味を持ち、さらに深く調べ学習を進めるきっかけにもなった。

教師だけでは体験活動を充実させることが難しいが、地域や専門家の方々の協力を得ることで、こちらが意図していた活動を設定することができた。

3 取り組みの充実に向けて

自分たちの学校林という意識を高めるため、子どもたちが学校林で行いたい活動を取り上げていくことが大切である。それらの活動を行うためには、地域や専門家の方々とのつながりを大切にし、共に子どもたちを育てる意識を持つようにしたい。

教科名(総合学習) 実施学年(全学年)

| タイトル | 「地域から学びそして育つ」 |
|--------|------------------|
| サブタイトル | ~「石住獅子舞」体験の授業から~ |

1 自校の事業への取り組みについて

小中の児童・生徒が地域の伝統芸能である「石住獅子舞」を実際に踊る活動を通じて、地域を知り、 地域の一員としての意識を高め、郷土の自然や文化を愛する心を育てていきたい。また、地域の方々 を講師に招き、発表の場を設け地域との交流を深めていきたい。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

「石住獅子舞」の体験事業は、今年度で2年目になる。石住地区の4名の方を講師としてお願いし、快く引き受けていただき実施した。総合学習担当者が、昨年の反省をもとに講師の方と事前に日程や 段階を追った指導の仕方について確認し獅子舞の体験活動を実施した。

(2) 授業の実際

「石住獅子舞」の体験授業は、講師の方から 4 回にわたり 指導を受けた。

授業では、教師と講師の役割分担を明確にし、石住獅子舞の歴史の話、太鼓や足の運び方、リズムの取り方などを丁寧に指導いただいた。児童・生徒は地域に伝わる伝統芸能の歴史と大切さを理解し、真剣な態度で取り組み、上達も早かった。昨年は講師の方と一緒に踊ったが、今年は児童・生徒だけで3グループに分れ、獅子頭をかぶり着物を着て舞を行った。そして、学習発表会の日に地域の方々に披露した。



獅子頭をかぶり練習に励む二人

(3)授業をふりかえって

石住獅子舞の学習を通して、子どもたちは地域の伝統芸能のすばらしさに気づくことができた。また、地域の方々にも獅子舞が子どもたちに受け継がれつつあるのでとても喜んでいただけた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

地域の伝統芸能を継承していくためには、地域の一員として学校の果たす役割も大切である。学校の教育活動の中に継続して位置づけるようにしていきたい。また、いわき市にはいろいろな地区に獅子舞があるので、それぞれの特徴を調べたりすると石住獅子舞についての理解がさらに深まっていくのではないか。

教科名(生活・総合) 実施学年(第1~4学年)

| タイトル | 「地域の人・もの・自然とともに」 |
|--------|---------------------|
| サブタイトル | ~ 「こんにゃくづくり」の実践から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

○ 本校は、周囲を山に囲まれ、豊かな自然や心温かな地域の人々に支えられている学校である。このようは環境を生かし、子どもたちが自然や人に感謝し、環境に主体的に働きかけることのできる地域の素材や地域の人材を活用して「こんにゃく作り」を行っている。

2 実践授業について

(1) 授業計画にあたって

- 指導者 地区民(2名) 保護者:4名参加
 - 4月下旬 こんにゃくいも植え(地域の方への連絡)
 - 10月下旬 こんにゃくいも掘り
 - 10月29日(木)こんにゃく作り(地区民・保護者と日程調整・道具等準備)
 - 12月下旬 種いも保存(地域の方に冬越しをお願いする)

(2)授業の実際

- 地域の方の指導のもと児童と保護者がこんにゃくいもをすりおろす。児童は、手がかゆくならないようにゴム手袋をする。次に、すったいもを鍋に入れ煮込む。ピンク色が少しずつ白色に変わりこんにゃくの臭いがしてくればできあがりとなる。(ソーダーを入れる)保護者は海草などを入れたこんにゃくなどにもアレンジしている。
- 自分たちで作ったこんにゃくをその場でおいしく 食べました。学校・保護者と地域が一体となる活 動であった。



こんにゃくをなべで煮ています。 ピンク色が少しずつ白色に変わる。

(3) 授業をふりかえって

- 児童たちは、自分たちで育てたこんにゃくいもで調理できたことや地域の方・保護者たち とのふれ合いを通して貝泊のよさを感じていた。
- 他の地域からの移住者が多く、学校という場を使い、地域の方とふれ合う機会がありとて もよいという感想があった。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- 今後も、地域のよさを生かした体験活動を取り入れた計画を継続できるよう、人材の確保 や地域のNPOなどと一緒にできる活動なども取り入れていきたい。
- 実施にあたっての単元開発や時間の確保などを工夫していきたい。

教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 森林体験学習 |
|--------|-------------------------|
| サブタイトル | ~ 地元の林業を他校の生徒と交流し共に学ぶ ~ |

1 取り組みの概要について

平成 18 年度より、森林環境学習に取り組んでいる。本年度は、湯本第三中学校の生徒との交流型森林体験活動を実施した。この体験を通して、人・地域・自然との共生について学びふるさとのよさを再発見し、地域の森を守り育てていく心を育むことをねらいとしている。

2 実践授業について

(1)授業計画

- 1 講義「森林環境学習について」(1時間)
- 2 森林体験活動(5時間)
- 3 まとめ・反省(1時間)

(2) 授業の実際

森林体験学習の実施に向けて、地元の林業家を講師に迎え、 森を守ることの重要性について理解を深めた。

体験当日は、地元の林業家6名のご指導をいただき、田人中 1・2学年19名と市内の湯本三中1学年22名、引率教職員 11名で交流型の体験活動を実施した。2校合同の1班が3~ 4名の12班編成だったが、時間が経つにつれて会話が増え、 教え合い協力し合いながらの楽しい作業となった。今年度は2 0年前に先輩たちが植林した森を除伐した。間伐した杉は、樹 皮をはぐと美しい木肌が表れ、樹皮や枝はいも煮会の燃料に活 用した。また、乾燥させてコースター等の工芸作品を制作した。



作業を終えて全員集合!

(3)授業をふりかえって

参加した子どもの声(感想)

- ○学校林の除伐では、のこぎりで切る作業が大変でしたが、除伐した後は、光が差し込んでとても 気持ちよかったです。森林の役割や手入れが必要なことだけでなく森林を守ろうとする人たちの大 変さを知ることができてよかったです。
- ○親が中学生の時に植林した森を除伐したと聞いて驚きました。森が育つには時間がかかることや世代を越えて手入れしなければ森は守れないということを知り、受け継ぐという意味を実感しました。

3 自校の取り組みの充実に向けて

- ①今年度は、森林環境学習5年目にあたり、指定最終年度である。今後は、地域の方と密接に連携し、 自然観察や環境整備、栽培にも力を入れ、田人の未来につながるよう取り組みたい。
- ②生徒の豊かな学びを保証できるよう、「地域に学び、地域に発信する」をテーマに学校行事と学習内容が関連し合う学びを計画し、地域の諸団体と連携し支援に努める。

教科名 (総合学習) 実施学年 (全学年)

| タイトル | 「地域から学びそして育つ」 |
|--------|-------------------|
| サブタイトル | ~「石住獅子舞」体験の授業から ~ |

1 自校の事業への取り組みについて

小中の児童・生徒が地域の伝統芸能である「石住獅子舞」を実際に踊る活動を通じて、地域を 知り、地域の一員としての意識を高め、郷土の自然や文化を愛する心を育てていきたい。また、 地域の方々を講師に招き、発表の場を設け地域との交流を深めていきたい。

2 実践授業について

(1)授業計画にあたって

「石住獅子舞」の体験事業は、今年度で2年目になる。石住地区の4名の方を講師としてお願いし、快く引き受けていただき実施した。総合学習担当者が、昨年の反省をもとに講師の方と事前に日程や段階を追った指導の仕方について確認し獅子舞の体験活動を実施した。

(2)授業の実際

「石住獅子舞」の体験授業は、講師の方から4回にわたり指導を受けた。

授業では、教師と講師の役割分担を明確にし、石住獅子 舞の歴史の話、太鼓や足の運び方、リズムの取り方などを 丁寧に指導いただいた。児童・生徒は地域に伝わる伝統芸 能の歴史と大切さを理解し、真剣な態度で取り組み、上達 も早かった。昨年は講師の方と一緒に踊ったが、今年は児 童・生徒だけで3グループに分れ、獅子頭をかぶり着物を 着て舞を行った。そして、学習発表会の日に地域の方々に 披露した。



獅子頭をかぶり練習に励む二人

(3) 授業をふりかえって

石住獅子舞の学習を通して、子どもたちは地域の伝統芸能のすばらしさに気づくことができた。また、地域の方々にも獅子舞が子どもたちに受け継がれつつあるのでとても喜んでいただけた。

3 自校の取り組みの充実に向けて

地域の伝統芸能を継承していくためには、地域の一員として学校の果たす役割も大切である。 学校の教育活動の中に継続して位置づけるようにしていきたい。また、いわき市にはいろいろな 地区に獅子舞があるので、それぞれの特徴を調べたりすると石住獅子舞についての理解がさらに 深まっていくのではないか。 教科名 (総合的な学習の時間) 実施学年(第1~3学年)

| タイトル 「地域を愛し、自然を大切にする心の | 育成」 |
|------------------------|-----|
|------------------------|-----|

サブタイトル ~ 体験学習「自然観察学習」の授業から ~

- 1 自校の事業への取り組みについて
- 自分たちが住む貝泊地区の自然と水生生物や昆虫との関わりを知り、貝泊の自然をさらに大切に する態度を養う。
- 水生生物の生態を調べ方や自然を保つための学習を通して、科学的思考力を高める。
- 2 実践授業について
- (1) 授業計画にあたって
- 地域の有識者とNPO法人いわき環境研究室に、自然観察学習を行うための支援を打診した。
- NPO職員2名に来校していただき、授業の内容や計画を検討した。
- 学校付近の沢で水生生物を採取し、生態を調べることに決定し、地域住人と生徒がともに学習す ることにした。前日までに、沢の草木を刈り、講師からいただいた水生生物の資料を整えた。

(2)授業の実際

- 講師の説明のあと、沢に入り水生生物を採取した。 生徒たちは生き生きと活動し、トビケラやカゲロウ の幼虫など珍しい生物をたくさん採取できた。
- 水生生物を種類ごとに分け、数を調べ、貝泊の自 然がとても豊かなことを実感できた。
- 採取後、体育館でプロジェクターを用いた水生生 物に関する講義を聞き、科学的な知識を深めること ができた。



水生生物の採取状況

(3)授業をふりかえって

- 生徒たちは地域の自然のよさを知ることができた。また、よさを教えてくれた講師や地域の方々 に感謝の心をもつことができた。
- 担当教師が講師と細かく連絡を取り、計画とおり実施することができた。第2回自然観察学習で は、いわき市内の河川の汚染具合について学習し、関連した知識を広げることができた。
- 地域の方々には、生徒とともに活動し勉強していただくことにより、より一層生徒や学校への理 解を深めてもらうことができた。
- 3 自校の取り組みの充実に向けて
- 体験学習を行うときは、地域に学校だより等で発信し、保護者や地域住民が多く参加できるよう にしていく。
- 来年度も自然観察学習を実施し、レポートのまとめ方等学習していきたい。

平成22年4月発行

学社連携·融合推進事業実践事例集

- 平・小名 浜・勿 来・常 磐・内 郷・好 間・四 倉・三 和 遠 野・川 前・小 川・田 人・久 之 浜 地 区 の実 践 —

発 行 い わきまな び あ い バ ン ク いわき市平字一町目1番地 TEL 0246-37-8888

編集 いわき市生涯学習プラザ いわき市平字一町目1番地 TEL 0246-37-8888